

海外平安文学 研究

ジャーナル 5.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.5.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



あいさつ

平成 26 年秋に創刊したオンライン版『海外平安文学研究ジャーナル』(ISSN:2188-8035)も順調に号を重ねて来て、今号で第5冊目となりました。これもひとえに、執筆を快諾していただいた方々と、ダウンロードしてお読みくださっているみなさまの、変わらぬご支援のたまものです。ご理解とご協力なくしては実現しない、情報の公開であり発信です。関係者のみなさまに、あらためてお礼を申し上げます。

さて、今号では、誌名に「海外平安文学研究」を冠するにふさわしい、平安文学の代表的な作品に関する翻訳と研究を対象とした内容を盛ることができました。

『源氏物語』は中国語と英語を、『うつほ物語』は中国語を、『伊勢物語』はスペイン語・英語・フランス語を射程に入れて考察が展開しています。さらに付録には、中国語訳『源氏物語』を日本語に訳し戻した、文化の変容を考える上で貴重な資料となるものを収載しました。幅広く活用していただけると幸いです。

本課題では、国際的な視野で日本文学および日本文化を見つめることを意識して、さまざまな問題に取り組んでいます。

今後とも、多角的な視点で平安文学を論じた、みなさまからの意欲的な投稿を歓迎します。

2016 年 9 月 1 日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する
総合的調査研究」(課題番号: 25244012)

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

■『海外平安文学研究ジャーナル』原稿執筆要項■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400 字原稿用紙換算で 30 枚以上 (12,000 字以上)
小研究 (20 枚以下)、研究余滴 (10 枚以下)、翻訳実践 (自由)
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時 (応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【itokaken@gmail.com】まで連絡のこと)
- 4 電子公開 毎年春・秋 (予定)
- 5 体 裁 A 5 版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面・活字 11 ポイント、27 行×34 字詰、余白上下左右 20 ミリ
・フォントは、MS 明朝、Times New Roman
・節ごとに小見出しを付す。
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。
注番号は本文の当該箇所にも丸括弧 () 付きの数字で示す。
(参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>) 参照のこと)
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。
問い合わせ・送付先 【itokaken@gmail.com】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から 1 年以内に 1 度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

目 次

あいさつ	伊藤 鉄也 3
------	---------

原稿執筆要項	4
--------	---

❀ 研究論文

「中譯本《源氏物語》試論—以光源氏の風流形象為例」 (中訳本『源氏物語』試論—光源氏の風流な人物造型を例として—)	朱 秋而／(翻訳：庄 捷淳) 11
翻訳にあたって	庄 捷淳 33
「忠こそ物語」と継子いじめ譚	趙 俊槐 34

❀ 研究会拾遺

ウォッシュバーン訳『源氏物語』の問題点	緑川 眞知子 61
スペイン語版・英語版・フランス語版『伊勢物語』7種における官 職名の訳語対照表	雨野 弥生 76

❀ 付録

(付録) 中国語訳『源氏物語』の書誌について	浅川 槇子 85
『源氏物語』「桐壺」中国語	87

<u>執筆者一覽</u>	105
<u>編集後記</u>	106
<u>研究組織</u>	107

(色紙詞書)

よりてこそそれかとも
見ぬたそかれに
ほのくみつる
花の夕顔

＊表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語屏風』「夕顔」巻の色紙
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1ー18)

研究論文



中訳本『源氏物語』試論 —光源氏の風流な人物造型を例として—

「中譯本《源氏物語》試論—以光源氏の風流形象為例」

(『林文月先生學術成就與薪傳國際學術研討會論文集』2014年5月 65頁～82頁)

朱 秋而
(しゅう しゅうじ)

❀ 一、序説

林文月先生が1973年4月から1978年12月にかけて台湾大学外国語学部の刊行物『中外文学』に連載していた『源氏物語』の訳注は、この重要な日本古典文学作品の最も早く公表する中国語訳本である。千余年に亘り、明治以前に至るまで、多くの場合は日本が中国文学と文化の薫陶を受けてきた中日文学交流史の中には特別な意味を持つことである。仮名文学である『源氏物語』は日本人が漢字で書いた作品、例えば我が国の人々が隔てなく読める漢字漢文などと異なり、漢訳本がなければその内容を知ることが不可能に近い。林先生の翻訳は疑いなく広い中国語の世界に真に日本文学の精髓を窺える重要な道を開いてくれたと言える。林先生は紫式部の千古な知己とも言えるだろう。

紫式部は1012年前後、当時の日本の貴族階級の女性が日常的に使っている仮名で、この世にも稀な大作『源氏物語』を書き上げた。物語文学、和歌、中日文学受容と変容などの角度から言っても、その後の日本文学の発展に深い影響を与えた作品であると言える。推測によると、平安時代に、この本は書き上げた時期から大変人気があり、広く読まれ、写され、平安後期の女性日記と歌論書にもよく言及されている。今に至って積み重ねられた研究は山ほどあるが、それ以上述べることを省く。

林先生が『源氏物語』の訳注を発表した二年後、つまり1980年12月に、大陸では豊子愷先生が1961年12月から1965年9月に訳出した中国語版の『源氏物語』の第一冊が出版され、1982年6月に第二冊、

10月に第三冊と全書が陸續と出版された。当時台湾と大陸との間の情報が隔絶されたため、林先生は豊子愷がすでに翻訳に携わっていることを知らず、訳文の内容についても知らないことは言うまでもない。このように、時間の前後があるが、特殊な状況の下にあるため、林訳と豊訳はお互いに全然影響することなく、各自独特なスタイルを呈している。調査によると、現在大陸には十余種の『源氏物語』の訳本があるが、それらは豊子愷の訳本を踏まえたものであるので、以下の検討は豊訳だけを主要な比較対象とする。

近年、『源氏物語』の英訳も大変盛んであり、よく知られているイギリスの Arthur Waley の『The Tale of Genji by Lady Murasaki』(London: George Allen & Unwin, 1925 - 1933) からアメリカの Edward G. Seidensticker, The Tale of Genji, 2 vols. (New York: Alfred A. Knopf, 1976) と Helen C. McCullough, Genji & Heike: Selections from The Tale of Genji and The Tale of Heike (Stanford: Stanford University Press, 1994) の部分訳、またはオーストラリアの Royall Tyler, The tale of Genji, 2 vols. (New York: Viking, 2001) という約十年前の新訳がある。これらの訳本は学界が「源氏物語」の翻訳に関する研究への関心を引き起こした。例えば、緑川真知子は『源氏物語英訳についての研究』¹で多様な角度から翻訳研究の可能性を考察している。緑川は以下のように述べている。

翻訳研究において、まずこれはもっとも大切な認識だと思われるのであるが、文学の翻訳研究とは「誤訳」を見つけて、それを分析するという研究ではない、ということである。しかしこれをもう少し正確に言うなら、もとの文章と翻訳された文章を比較し、間違っている箇所を指摘して翻訳の価値判断をすることは文学の翻訳研究にとってさほど重要なことではない、と言えよう。(P21「第二章 翻訳研究の方法」)

1 東京：武蔵野書院、2010

つまり、緑川は翻訳研究が「誤訳」を見出して分析し検討するだけではなく、もっと正確に言えば、原文と互いに比較し、翻訳のミスを指摘することは文学の翻訳研究にはそれほど大きな意味を持たないことと述べられている。私は、個人的に非常に緑川氏の見方に賛成している。そもそも誤訳そのものを検討する基準は何であろうか。この問題はいろいろな面と関わっているので、一概には言い難い。

小論は近年林訳と豊訳について比較し分析している主な研究を検討し、現在国内外の学界が『源氏物語』の訳本に対する評価の現状を明らかにし、さらに作中人物の「色好み」或いは「好きもの」の訳文の表現を分析し、両訳の翻訳手法の異同を比較し、現在両訳本に対する比較と批評に対する見方を述べる²。

❁ 二、源氏物語の中国語訳の研究概況

発表時間の前後から見れば、一番先に『源氏物語』の中国語訳を問題として検討したのはまさに林先生ご本人である。先生は日本語で「源氏物語の中国語訳について」³を書き、日本で発表した。その後橋内武道の「源氏物語の中国語訳と林文月教授」⁴がある。

数年後、国内の学者である林水福は前後二編の短い論文、「源氏物語の中国語訳をめぐる問題—桐壺の巻を中心に—」⁵と「中国語訳源氏物語」⁶を発表した。論文は「和歌」「朝廷専用名詞」「古今異義の言葉」「抽象語」「敬語」などの五つの項目を分け、各項目については僅か一、二例の訳文を選び出して簡単に比較するのは、典型的な「誤訳」分析であ

2 使用テキスト：林文月訳『源氏物語』(一)、(二)、(三)、(四) (台北：洪範書店、1999年)。豊子愷訳『源氏物語』(上)、(中)、(下) (台北：遠景出版公司、1993年)。清水好子、石田穰二校注『源氏物語』(新潮社、1985年)、全八冊。

3 『源氏物語の探究』第七輯 (東京：風間書房、1982年8月) 所収

4 『明星大学研究紀要～人文学部～』20号 (1984年3月)

5 『源氏物語を読む』(東京：笠間書院、1989年9月) 所収

6 『源氏物語講座第九巻、近代の享受と海外との交流』(1992年1月)

る。全文十余万字もある『源氏物語』の中国語訳の研究にどれほど役立つのか、疑問を抱く。また、その中の「和歌」の項目には「七百五十九首の和歌を」の言葉が見られるが、歌の数には明らかな間違いがある。ここ数年大陸では日本留学経験のある学者と学生によって発表された論文がメインであるが、その中、張龍妹の論文が最も代表的である。張の主要な論点は以下の論文から見られる。

「中国語における源氏物語の翻訳と研究—翻訳テキストによる研究の可能性」⁷

「豊子愷と林文月の中国語訳について」⁸

一番目の論文で、張龍妹は豊子愷の訳本を名訳だと吹聴しているが、二番目の論文では林訳と豊訳とを比較し、両者の翻訳手法の異同および共同の誤訳から、原作に対する理解を妨害するものを分析し、最後は林訳が研究的な翻訳であり、豊訳は鑑賞的な翻訳であると結論し、其々長所と短所があるので、両者の長所を生かし、文化的誤読を招くことのない新しい訳本が現れることを期待していると述べている。

最近、徐迎春は豊子愷記念館所蔵の原稿資料を利用し、豊訳の修正と推敲の過程を分析し、「豊子愷の翻訳方針について—記念館所蔵豊子愷訳源氏物語の原稿を通して—」⁹と「豊子愷『源氏物語』中国注釈の舞台裏」を発表した。

そのほか、例としては田中幹子・鄭寅瓏の「豊子愷訳『源氏物語』の問題点について—桐壺巻における林文月訳、銭稻孫訳との比較—」¹⁰と

7 『海外における源氏物語の世界—翻訳と研究—』国際日本文学研究報告集三（東京：風間書房、2004年）

8 『講座源氏物語の研究』（東京：おうふう、2008年）第十二巻「源氏物語の現代語訳と翻訳」

9 『COMPARATION』（訳者注：<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/recordID/24626>のリンクによると、雑誌の名前は『Comparatio』のようである。）Vol.14（九州大学大学院比較社会文化学府、2010年）

10 『東アジア比較文化研究』第11号（東アジア比較文化国際会議日本支部、

呉衛峰「源氏物語の中国語訳—豊子愷訳の成立を中心に—」¹¹ との二編の論文がある。この二編の論文はいずれも当時出版社が『源氏物語』の中国語訳を企画して出版した経緯について述べている。当時、銭稻孫は五巻まで訳出したが、出版社は彼のスピードが遅いと思い、かわりに豊子愷をお願いした。豊子愷が全巻を訳出した後、出版社はまた銭稻孫と周作人に校閲と鑑定をお願いした。呉は論文で、豊訳は銭稻孫が訳した五巻の訳文にそれほど影響されていないと述べている。

全体からいえば、張龍妹が以上挙げた論文で「巻名」「人物呼称」「漢籍古典籍」「和歌典故」「翻訳の文体」「文化の障壁」を以て二種の訳本の翻訳表現とそれが伝わった深層な意味を分析して議論し、翻訳者が使用した参考文献についての基本的な考察に戻ろうとする試みがあるが、「誤訳」或いは「不足」を主とする議論が多い。

❁ 三、「色好み」、「好きもの」の翻訳

『源氏物語』は宇治十帖以前、主人公光源氏の誕生、その成長及び成長した後多くの女性との恋愛の話を中心として描き、「多情」「風流」は光源氏の代名詞であると言える。紫式部が使っている「いろ - ごのみ」【色好】¹² は平安時代において、一般的に以下のように解釈されている。

(1) 好んで異性との交情にふけること。恋愛、情事にまつわる情趣をよく解すること。また、その人。

＊竹取〔9C末～10C初〕「色好みといはるるかぎり五人」

＊伊勢物語〔10C前〕三七「昔、をとこ、色好みなりける女に逢へりけり」

＊源氏〔1001～14頃〕若菜下「あだなる男、色ごのみ、二心

2012 年)

11 『越境する言の葉—世界と出会う日本文学』(東京:彩流社、2011 年) 所収

12 『日本国語大辞典』(東京:小学館、2000 年)

ある人にかかづらひたる女」

＊さるばとるむんぢ〔1598〕「男子女子ともに色ごのみの科に落ざるやうに」

＊日葡辞書〔1603～04〕「Irogonomiuo (イロゴノミヲ) スル」

(2) 実際的なことよりも風流、風雅な方面に関心や理解があること。また、その人。

＊古今〔905～914〕仮名序「あだなる歌、はかなき事のみいでくれば、いろごのみの家に、埋れ木の、人知れぬ事となりて」

＊無名抄〔1211頃〕「いみじき事なり。昔いろごのみのわざどもこのみてしけるわざなり」

＊ひとり言〔1468〕「和歌の心ざしの人、色ごのみなども残り侍りて、自ら忍び忍びに歌連歌などの事をもたがひにかたらひ侍る事よりより也」

(3) ((1) から転じて) 遊女などを買うこと。また、その遊女。

＊大観本謡曲・祇王〔室町末〕「われら賤しくも、遊女の道を踏みそめし、心はかなき色好みの、家桜花しばみ」

＊御伽草子・物くさ太郎〔室町末〕「『夫妻と云ふ事は、大事の物ぞ、色好み尋ねてよべかし』〈略〉『主なき女をよびて、料足を取らせて逢ふ事を、色好みといふ也』」

【語誌】

(1) 語源については、一説に、「いろ」は配偶者の意、「このみ」は選択する、の意があり、これが後に漢語「好色」と響き合いながら定着したものという。

(2) 平安時代には、和歌や音楽に堪能で、異性への恋に一途に生きる人を意味し、男女ともに用いられた。

(3) ほぼ同義の「すきもの」が、平安時代においては風流一般に関して概して肯定的に用いられるのに対して、「いろごのみ」は次第に本来の意味が失われ、否定的なニュアンスを強めていく。

以下、試みとして林訳（A）と豊訳（B）が「色好み」「好きもの」についての翻訳表現と翻訳手法を比較する。

○若菜下巻（あだなる男、色ごのみ、二心ある人にかかづらひたる女）

A 世間の人情を描く古い小説のなかは、往々にして風流で好色な男や、浮気する男と関わる女性などを描いているのです。

B（紫夫人）は就寝した後に、世の中の様子を描く故事が、軽薄な男、好色な者、また浮気する男を愛した女などを描き、彼らの種々な物語を描きつづけているのだと思い巡らしています。

A いままで少しでも分不相応な色めいた思いを抱く勇氣はないです；……ただ彼女が優しく可愛く、しなやかで高貴な風格は、世に並べるものはないと思っていますだけです。この瞬間、彼は自制することができないほどであり、彼女を連れて、世を逃れて知らないところまで行きたいと思うほどでした。

B だから彼が面会を願うのも、ただ聊か胸の内を打ち明けた後直ちに退出すると望んでいるだけで、少しも色めいたことを妄想する勇氣はないです。……却って温順にして可愛く、限りなく優しい色香のなかに、高貴な艶やかさがあります。

○夕顔巻（なさけなくさうさうしかるべしかし）

A ところが、惟光は、「主上の身分は高いと雖も、このように若くて女性にも好かれていては、風流韻事は少しでもないとは惜しいことではないですか。少し劣った男ですら、適当な女性に出会ったら、見過ごすことはできないですね。」と思っています。

B 惟光は心の中でこのように思っています。「私の主人は身分が高く、地位も尊く、さらに年が若く、容姿が美しく、天下の女子は靡かない人はいないです。もし色情のことがなければ、風流が欠け、玉に瑕があるようなことですね。世間の凡庸で、数に入らない人でも、このように美人に会ってもなお捨てがたいと思いますね。」

光源氏の描写について、林訳は「風流韻事」とし、豊訳は「もし色情のことがなければ、風流が欠け」と色情のことがないのは風流に欠けることだと明言しているが、色情と風流を同じものにする嫌いがある。

○夕顔巻（おのれも隈なき好きごろにて）

A 惟光は源氏の君に対して一向にして忠心であり、ただその命令に従うだけで、況や彼自身も好色なものですので、このことに対しては自然に心を尽くし、あるだけの知恵を絞り、源氏の君とその女性との密会を叶えるようとしています。

B 惟光は一向にして主人の意には少しでも背かなく、それに、自分もどのようなチャンスも見逃さない好色者ですので、苦心を尽くし、東奔西走して、ようやく源氏の公子をこの家の女主人と密会させたのでした。

従者である惟光の表現について、林訳は「好色なもの」とし、豊訳は「好色者」とし、異なるところはない。

○夕顔巻（かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに）

A 自業自得と雖も、心の中に一度に不義の恋があった報いでしょう。今このような後世の物笑いになるような事件が起こったのでは、隠そうとすればするほど露呈するのではないのでしょうか。

B 罪は心より生ずる、これは私が色情において、天に逆らい、理に背き、弁解する余地のない罪を犯した報いであるゆえ、このような珍しくて思いがけない出来事が起こったのでしょうか。

源氏の心中思惟を描く言葉について、林訳は「不義の恋」とし、豊訳は「色情において、天に逆らい、理に背き、弁解できない罪を犯した」とし、前者は婉曲で含みがあり、後者は直接的である。次の段落に源氏が自分と夕顔の恋について言及する場面も類似する表現の差異が見られる。

○夕顔巻（かやうに人にゆるされぬふるまひをなむ、まだならはぬことなる）

A ああ。皆は本当に無駄な強がりをするものですね。私は彼女によそよそしくするつもりはないですが、このような世の人に認められない秘密な恋愛は初めてですので、皇帝のほうに漏れるのを警戒しなければならないのは当然のことであり、そのほかも気をつけなければならないことがあるからです。

B 源氏の公子は言いました。「お互いに隠しあうのは、つまらないことですね。しかし私の隠しは本心から出るものではないです。このような世の人に許されない密通は一向にしてやったことがなかったからです。まず父帝からの戒めもあり、その他あらゆる面においても種々の気兼ねがありますから。」

林訳は「世の人に認められない秘密な恋愛」とし、豊訳は「密通」とするのは、両者が平安時代の貴族の男女の恋愛および婚姻観に対する理解には明らかな差がある。平安時代は現在の研究によれば、一夫一妻多妾（同居しない）制であり、豊訳の「密通」は現代の一夫一妻制の観念下の表現に近い。それに対して「世の人に認められない」というのは源氏と夕顔とのかけ離れている身分のギャップを考慮に入れたからだと言える。以下は播磨守の息子良清が述べた言葉である。

○若紫巻（いと好きたる者なれば）

A さきほど話をしたのは播磨守の息子です。彼は最近六位の藏人から五位に昇進した若者であり、能く艶を狩る者です。そのため皆痛烈に皮肉って言いました。「もしかしたらあなたはこの爺のルールを破るつもりですか」と。

B 彼の友人たちはこれを話題にして話しています。「この良清は本当に好色なものですね。彼はあのお坊さんの遺言を破り、その娘を嫁にしたいから、よくその家を覗きに行っています。」

林訳は「能く艶を狩る者」とし、豊訳は「好色なもの」として、前者は婉曲的に訳出したものであり、後者は直接に言い出したものである。

同じ巻にその後源氏が他の人の行為を想像する場面がある。

○若紫巻（このすきものどもは、かかるありきをのみして）

A 源氏の君は人より先に帰らなければならないが、まさかこのように気に入られるかわいい人と出会うとは思わなかったです！道理で登徒子（好色漢）たちが密かに歩き回るのを好むのは、このような意外な発見があるからですね。

B 源氏の公子は彼に気づかれるのを恐れ、急いでお寺に戻りました。彼は心の中に、「今日はかわいい人を見かけましたね。世の中にはこのような奇遇があるとは、道理で好色の人たちは、（脱文あり、訳者補足→いろいろな所を歩き回り、思いがけない美人を探すのですね。私のようなあまり家から出ない人も、）このような意外のことに遇えたものですね」と思っています。

林訳は「登徒子（好色漢）たち」とし、豊訳は「好色の人たち」として、意味は同じであるが、「登徒子好色賦」というタイトルの前後をそれぞれ取るのである。林訳は比較的に古風で含みがあるが、豊訳は単刀直入である。以下は源氏が、家計が左前になった末摘花に求愛する場面から取る一くだりである。

○末摘花（何やかやと世づける筋ならでその荒れたる簀子にたたずままほしきなり）

A また、彼女は一人で孤独に過ごすのは、とても寂しいでしょうし、もし私と同じ心になり、返事などくれれば、それも願いを叶えることになるでしょう。私は彼女と世俗の所謂恋愛をするつもりはないですが、ただ偶々彼女の荒れ果てた廊下で暫く佇むだけでも十分です！

B 今私は退屈で寂しくてしかたがないですが、もし彼女が私の気持ちを思いやり、返事をくれれば、私は満足すると思います。私は世間一般の男のように好色なわけではないので、彼女の荒れ果てた邸宅の廊下に立つことができればいいです。

林訳は「世俗の所謂恋愛」とし、豊訳は「世間一般の男のように好色」として、源氏が抱いている「色好み」観に対する解釈が明らかに異なっている。ところが、以下「紅葉賀巻」に源氏の父である桐壺帝が源氏のことを推測する場面がある。

○末摘花（さるは、すきずきしううちみだれて）

A 皇帝は、「夫婦である若いお二人の仲が睦まじくありませんか。どうしてこのような薄情なことをするのでしょうか」と押し量りました。光源氏はただ頭を下げただけで、畏まりながら答えもしませんでした。そこで、皇帝はまた言いました。「実は、あなたには好色で艶を狩るような形跡があるとは言えません。宮中や、ほかの所々でもあなたと深い関係を持つ女性がいると聞いたことはないです。一体どこを密かに通うことで、このような恨みを買ってしまったのでしょうか」、と。

B 皇帝は彼と葵姫との仲が睦まじくないだろうと押し量り、可哀そうにと思い、また言いました。「あなたが品行不正で好色な者だとは思いますが、これまであなたがここの宮女たち或いは他のところの女性と何かの関わりを持つと聞いたことはないです。一体どこで何かこそそそとすることで奥さんと義理のお父さんに恨まれてしまったのでしょうか。」

林訳は「好色で艶を狩る」とし、豊訳は「好色な者」の前に「品行不正」を加え、道徳的批判を一層付き加えた。同じ巻でその次に出た「典内侍」についてのくだりがある。

○末摘花（いみじうあだめいたる心ざまにて）

A あるうば桜の典侍がいます。出身がよく、才気煥発で、上品で人に尊重されていますが、性格は生まれつきの風流であり、聊かなまめかしくて、この道を好んでいます。

B 「源内侍は出身が高く、才芸に優れ、人望も高いです。しかし、性格は生まれつきで異常に風流であり、色情においては自重することを知らないです。……源氏の公子はつまらないと思いますが、このような年取った女は特別な風情があるかも知れないと推し量り、彼女のところへ密かに通いました。他の人に知られ、彼がこのような年老いた者と付き合うのを嘲るのを恐れますので、表面的ではよそよそしく振る舞っています。この老女はこれを残念なことだと思います。」

訳文は前と同じく、林訳は婉曲であり、豊訳は直接的である。それに つづき、頭中將についての描写がある。

○「紅葉賀」（盡きせぬ好み心もみまほしうなりにければ）

A 人々はこのことを意外のニュースだと思います。頭中將だけは、このことを知った後、彼自身の好色で移り気である性格から見れば、まさか源氏の君がこのような老女に興味を抱くとは思ってもしなかったです；彼も年長の女性と戯れてみたいと思いますので、なんとかして彼女に接近しようとしました。

B 頭中將はこの話を聞いて思いました。「私は色情においては至らぬところがないと言えるが、老女という道は思いもしなかったです。」彼も春情のいつでも消えない様子を見たいと思いますので、この内侍と密通しました。

林訳は「好色で移り気」とし、豊訳は「色情においては至らぬところがない」として、意味は近いが、林訳のほうが婉曲で自然である。最後に源氏と頭中將との競争を以下のように描いている。

○「紅葉賀」（この御中どものいどみこそ、あやしかりしか）

A 彼の心の中には常に思っています。「源氏の君はただ皇子として生まれただけであり、自分が大臣の中に特に帝の恩寵を蒙る左大臣の息子であり、母も皇女の出身であるから、幼い頃から大事に育てられ、人に及ばないところは何かあるでしょう？」と。実のところ、人柄など、いろいろな条件を備えている彼は、完璧だといえます。この二人の間の競争は、言い尽くせないほどの面白い出来事とエピソードがあります。それをいちいち話し出すのは、繁雑になるため、ここでは省略して書かないことにします。

B 彼は思いました。「源氏の公子はただ皇帝の息子であるだけです；彼自身に関しては、父親は大臣の中で一番厚く帝の寵愛を受けている高貴な親戚であり、母親は皇帝の同胞の妹であり、小さい頃から両親の無限な寵愛を受け、源氏の公子に及ばないところは何かあるでしょう。」と。実際に、彼の人柄も確かに完璧であり、欠けることはありません。この二人が色情における競争は珍しいことばかりです。煩雑になるのを避けるため、ここでは詳しく述べないことにします。

林訳の「言い尽くせないほどの面白い出来事とエピソード」とするが、豊沢では「色情における競争は珍しいことばかり」として、両者が形作ったこの二人の貴公子の造型には天地の差があると言える。以下は光源氏の「色好み」にかかわるくだりであるが、いちいち詳しく論ずるのを省くが、それをご参考にすればと思う。

○「葵」(かくすきわざするは)

A 葵夫人の仏事が終わりましたが、光源氏が除服する前には左大臣の邸内に喪を服しています。一人住みの寂しさに不慣れだろうと配慮し、三位中將は時々彼を訪ね、慰めています。中將はいつも最近の出来事などを話題にします。そのなかには真面目な話題もあれば、もちろん、いつものように、風流なエピソードも混ざっています。その老侍女の話もよく笑い話として話し出すのでしょう。

B この四十九日の間、源氏の公子は左大臣の邸内に閉じ籠っています。頭中將はすで三位中將に昇進しました。彼が閉じ籠りに不慣れだと知り、彼を同情し、よく一緒にいて、世の中の種々の見聞を話し、それを彼への慰めとしています。重大な出来事もあれば、以前のような軽薄で好色なこともあります。もっとも、あの内侍のことはよく笑いの種とされます。

○滯標 (かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな)

A (六条夫人)「ああ、難しいことですね。父親がいて、後ろ盾になってくれても、産みの母のない子供は可哀想です。また、大事に彼女を扶養するとあなたがおっしゃっても、人の疑心と嫉妬の目には顧慮しないといけないでしょう。余計な心配かもしれませんが、絶対にその子には何か色めいた思いを抱かないようにしてください。私は薄命であり、女はこのことについて一層顧慮があると知っていますので、彼女にこのような出来事のないようにしてあげてください。」、と。源氏の君はそれを聞き、まさか彼女がこのように露骨に話したとは大変驚きました。彼は慌てて、「近頃の私は以前と違いぶ変わりました。まさかあなたは私が以前のような好色な人としてみるとは思わなかったです。今に見てみましょう。事実はその証明してくれますから。」と彼女を慰めました。

B 源氏の公子はそれを聞き、この話は率直だと思いました！そこで、「年頃私は苦しみを知り尽くし、世の中を深く体得しました。あなたは私が以前のような好色の情の動きやすい人だと思い込んでいますか？本当に意外なことです！もういいです。それ以上は言いませんが、日が経つと自然に私の心が分かってくるのです。」と答えました。

○総合（世の常のあだことのひきつくろひ飾れるに圧されて）

A 平典侍は、「伊勢の海は底がないほど深く、波は砂浜に湧き上がり足跡を消し、ひたすらに古さを嫌うだけでは堪えられません」。どうして現在の色情的な艶なる文体を持つ小説に影響され、業平の名前を埋没することができるのでしょうか」と弁解しました。

B 左方の平典侍は、「伊勢の千尋の海を知らず、豈や浅い浜と乱れごとを言うことができるでしょう。」どうして凡庸にして虚飾ばかりの色情的な作を以て、業平の盛名を貶しめることができるでしょう。」と弁護しました。

○薄雲（かうあながちなことに胸ふたがる癖の、……いにしへの好きは）

A ああ、まさか自分が今になってもこのような秘密な恋の癖があるとは。以前犯した過ちはこれより一層重大なことでありますが、当時は年若くて無知だったので、菩薩も許してくれるでしょう。さすが今の自分は年の増すことにより、世の中を多く見聞きし、このことに対してもいささか度合を心得るようになりました。

B 彼自身も感じました。「私が不倫の恋をして自分を悩ませる癖は、また以前のままですね。」と思い、また、「梅壺女御に求愛するのは、実はいけないことですな！以前のその一件は、罪を問えば、このことより深刻です。しかし、その時は年若くて無知だったので、神仏もまた許してくれました。今はなお同じ過ちを犯すことができるのでしょうか。」と思いました。そうすると、修養が深まったことにより、同じ過ちは犯すまいと、このことについてはもう安心できると思いました。

○朝顔（御好き心の古りがたきぞ、めたら御疵なめる。軽々しきことも出で来なむ）

A 実は、皆はその下心を知り、ゆえにその背後に議論しています。「ああ、彼の好色の癖はね、本当に白い壁の微瑕ですね。これからどうなるかしりませんね。」、と。

B 左右の人は陰で非議しています。「ああ！彼の多情な癖は相変わらず治ることはないですね。本当に白い壁の微瑕ですね。禍を引き起こすまいと願いだけです！」、と。

A 侍女たちは源氏の君のために悔しがっています。「ああ、本当にひどいですね！私たちの女主人はどうしてこれほど人情がないでしょう。相手は別にになにか失礼な挙動があるわけではないです！本当にかわいそうに！」と、背後にもこのように議論されています。

B 侍女たちが互いに、「ああ、本当にひどいですね！姫様が彼に対してこれほど薄情な扱いをするのは、本当に思ってもいなかったです！彼は軽薄な様子がないので、本当に濡れ衣を着せてしまったのですね！」と議論しています。

○玉鬘（好きものどもの）

A あの登徒子（好色漢）たちは普段真面目そうな顔をしてここに来られたのは、何も悩みの種がないからです。この女の子を使い、この好色の者たちの正体をさらけ出してみましょう。紫夫人はそれに賛成しません。「変な父親ですね。第一、人を惹きつけるような考えはあってはいけません。」、と。

B あの好色漢たちがここに来る時に、いつも真面目そうな顔をしているのは、我が家に好餌がないからです。私はよくこの女の子を教養し、きっと彼たちの仮面を脱ぐことができるでしょう。紫姫は、「このようなバカな父親はどこにもいませんよ！娘を探し出し、まず彼女を人の心を誘惑させるのは、本当にどんでもないことですな。」と言いました。

○玉鬘（情けだちたる筋は……すくすくしき公人……なほしたにはほのすきたる筋の心をこそとどむべかめれ）

A 「昔の人は、学問と言え、優れた人は少なくないです。しかし、情趣の面においては現在の人に敵わないです。私はもともと中將を真面目な政治家として育てるつもりでしたが、実のところ、それは彼が将来私のように真面目でない人間になってしまうのを心配しているためです。しかし、人間は多少風情を解したほうがいいですね。一日中仏頂面で真面目ぶっているのも、頭を悩ますものです。」と。彼の口調は、いかにも子を慈しむ父のように聞こえています。

B 昔の人は、学問の面において固より勝っていますが、趣味においては現代の人には及ばないです。私は中將を正直な官吏として育て、私のように風流に耽ることのないようにと願っていたのです。しかし、人間の心は情趣に富むものであるべきです。木石のような心で、頑丈にして無我でいるのは、結局嫌われるのでしょう。

○胡蝶（恋の山には孔子のたふれまねびつべきけしきに愁へたるも）

A 普段真面目そうな右大將も、ことわざの所謂「恋の道に孔子ですら倒れる」と言っているように、恋の思いに耽り、悩んでいる様子は見るととても面白いです。

B 承香殿女御の兄である髭黒右大將は、もともと真面目そうに装ったですが、今もことわざの所謂「恋の山に登るには、孔子ですら倒れる」と言っているように、切に玉鬘に求愛しています。

○胡蝶（ゆくりかにあはつけきこととおぼし知らるれば）

A 玉の手は肉付きがよく、体付きは柔らかく、肌はきめ細かく、見れば見るほど愛情が生じてくるのです。……しかし、彼自身も分かっているように、このような挙動は唐突で失礼ですので、また侍女たちに疑われるのを恐れ、夜が深くなる前に去りました。

B その玉の手は春の筍のように丸くて太り、体付きと肌は葱のように鮮やかでみずみずしいです。……源氏はそのようにするつもりはありますが、唐突で軽佻な行為だと知っていますので、思い直して考えを改めました。

○蛭（宮は好ましき御心に）

A 「菖蒲を採るためにその根を抜き、即ちその浅さを知り、高貴さとなし、何故に泣くのか考えにくいです。心境は本当に若いですね。」
僅か数行であり、筆跡も淡々としています。ああ、もし筆跡の間に少し風情や含みを入れたらいいですね。風流で情趣を解する兵部卿の宮にとって、恐らく玉に傷のような憾みがあるでしょう。

B 玉鬢自身もその意があるようで、即ち詩で、「菖蒲は溪流の下で泣いており、その深浅はまだ明らかではないです。一旦泥から離れると、なるほど深くないです。すこぶる稚気ですね。」と答えました。この詩は薄い墨で書かれました。兵部卿親王はこの詩を見て、「もっと風情めいたように書いたほうが」と思っています。彼の色めいた心からみると、なお玉に傷のような憾みがあるのです。

○蛭（この世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ）

A 紫夫人のところではどうですか？明石のお嬢さんの要望に答え、彼女はもちろん小説を手離すことができません。「狛野物語」の絵巻はそこに開いています。……彼の一生はどれぐらい並びない種々の韻事を経験したのか知りません。「このような男女の情を描く物語は、お嬢さんに見せないほうがいいです。物語のなかに秘密の恋愛をする女主人公に興味がなくとも、世間の男女関係を見慣れてはいけません。」、と。

B 紫姫は小さい女君の好みを口実とし、恋々としてこっそり小説を読んでいます。彼女は狛野物語の絵巻を読みました。……源氏が恋愛における経験の豊富さは、世にも稀です。彼はまた、「小さい娘の前には、このような色情的な物語を読んではいけません。物語のなかに密通する女性には、彼女は興味を覚えなくとも、このようなことは世によくあることだと見て、軽々しく扱うと、それは大変なことですね！」と言いました。

○藤袴（かけかけしきありさまにて、心をなやまし）

A 自分には本当の父親がいますが、その様子をみると、どうもこちらの主人を配慮し、強いて自分をそのところに連れて帰るのは都合が悪いでしょう。しかし、このままですと、いずれ不名誉なことが起こり、自分を悩ませ、また世間の噂の種になるかもしれません。

B（玉鬘の）実の父親内大臣は、太政大臣が不快になるのを恐れ、強いて私を連れて帰って公然と娘として扱うことができません。このように、入内しても六条院に住んでいても、嫌な色情的な事を避けることができません。結局自分が悩み尽し、外の人の議論は絶えずして、この身はいかにも不幸です！

○梅枝（なほすきずきしき咎を負ひて）

A 私を例として話しましょう。幼い頃から宮中に育てられ、行動はいつも束縛され、少しでも過失があれば、人に軽率と責められると心配しています。それにしても、世の人に好色だと非難されています。

B 私は幼い頃から宮中で成長して、挙動の一つ一つは意のままならず、束縛されています。聊か過失でもあれば、軽率だと謗られますので、いつも慎重で注意深くていなければなりません。それにしても好色の罪名を得て、世の人の謗りをよく受けます。

以上をまとめると、「色好み」の翻訳については、豊子愷は平安時代の男女の情の美意識と風情が少しも知らないように、源氏、頭中将、惟光、良清、源典侍、或いは父帝が源氏に対する訓戒、源氏自身の反省などに対して全部「好色」或いは「色情」と訳している；林訳は「好色」の一語以外、最も重要なのは場面、身分、人物の違いによって、「風流」「韻事」「風情」「解趣（情趣が解する）」などと訳し、平安貴族男女の恋愛美学に近づけようとしている。これは中日文学文化史において大きな差異であり、如何に翻訳し伝達するのは非常に重要である。銭稻孫は「源氏物語選訳」の序文で以下のように述べている。「情け深く細やかな語りぶりは、日本語の柔らかさと優美を体現している。参差たる不思議な

展開は、後代の構想に大きな啓発を与えている。」¹³ 訳文が「色好み」に対する理解と把握及び翻訳策略の運用を分析することによって、林先生の訳はより紫式部の柔らかく情け深く細やかな語りぶりに近いと言うのは疑う余地がない。

第二章に言及した大陸の学者たちは一般的に豊子愷の訳本を愛でる気持ちは理解できるが、それによって偏りがある恐れもある。多くの論文の中に、よく引用されているのは吉川幸次郎博士が豊子愷を散文名家として褒め称えた資料だけであり、彼の源氏の訳文の内容についての具体的な言及はない。実のところ、当時出版社からの依頼を受けて豊子愷の訳稿を校閲した周作人は日記¹⁴ 及び友人への手紙¹⁵ では以下のような言及がある。

一月二十三日「人民文学出版社の文潔若が来訪し、『源氏物語』の校記の鑑定をお願いされた。辞したが免れなかった。」

一月二十七日「『源氏物語』の校閲を始めた。」

二月二十七日「『源氏物語』の校閲をし、その訳文が極めてだめであり、俗悪な諺を愛用する嫌いがあり、平安朝文学の雰囲気に対しては少しも解らないようであることに気づき、豊子愷氏が源氏を訳すことは信用できないと思う。」

三月五日の日記の中に「源氏を少し校閲したところ、豊子愷の文章は綺麗なだけであり、諺を無暗に使い、原文の雰囲気と合致できるかどうかを顧みないのは、上海派のよく使う手法である。文潔若は校正を加えたが、ただそれが実を欠けていることを恨む。この訳文は完全に使えない。」と記されている。

三月十日「『源氏物語』の校記を十四編まで読み、日記に「原訳文はただ雙珠鳳（訳者注：清末の白話小説であり、弾き語りや戯曲に多く受容されている。）の講談を書くぐらいに相応しいものであり、そ

13 『訳文』、『亜洲文学専号』（北京：新華書店、1957年）

14 張菊香、張鉄栄：『周作人年譜』（北京：人民文学出版社、2000年）

15 鮑耀明編：『周作人晚年書信』（香港：真文化出版社、1997年）

れを以て源氏を訳すのは不当で見苦しいものである。しかし、私がこの役を買ったのも、亦大きな幸運である。」と記している。」

三月十六日「文潔若が来訪し、懇ろに『源氏物語』の訳稿の鑑定意見を書くことをお願いしている。上司（楼適夷）のほうは却って豊訳の俗悪をよいとするからである。ややこしいと雖も、之に応じた。」

三月十九日「『源氏物語』の訳文を校閲する意見を書く。

また、周作人が一九六四年七月十三日に鮑耀明宛ての手紙に、「最近十三妹が豊子愷について論じているが、それほど優れるものではない。最近豊氏の源氏の訳稿を読んだが、それは茶屋で講談をするようなものであり、源氏はどのような本であるかまだ解らないようである。」

周作人は「平安朝文学の雰囲気に対しては少しも解らないようである」「上司（楼適夷）のほうは却って豊訳の俗悪をよいとするからである」「茶屋で講談をするようなものであり、源氏はどのような本であるかまだ解らないようである」のような酷評を下しており、文章は綺麗であるが、原作の雰囲気を伝えることができなく、茶屋で講談するような通俗小説に似ていると述べている。確かに巻名は章回小説のように訳され、文章に使われている「話分両頭（訳者注：話題を転換する時に使う慣用語である。）」「万歳爺（訳者注：皇帝の呼称の一つである。豊訳では八例の用例があり、桐壺帝に使われ、「紅葉賀」まで見られる。）」などは、豊子愷の娘である豊一吟によれば、それは古今小説（訳者注：明の馮夢龍が編纂された『喻世明言』という白話小説の初刻本である。）を参考にしたものであり、その影響を深く受けていると述べている。本章が豊訳の「色好み」の用法を分析したのと照らし合わせ、頗る共感している¹⁶。

16 また、前述した徐迎春の論文によると、（括弧内は修正である）

紅葉賀：色好み「好色（軽佻）な心を動かしました」

桐壺巻：理職、内匠寮「また宮廷營造司（修理職・内匠寮）が命令に基づき、大きく改造をしました。」

末摘花：陸奥紙の厚肥えたる「その手紙の紙はとても（無）厚い陸奥紙であると見られます。」

❀ 四、結び

世界文学史上の名著が多く、訳本を持つことは実に読者の幸せであり、しかもそうであるべきである。三年、五年乃至十年心を尽くし、努力した成果は、私を含め、この本の翻訳をしたことのない人は、短い論文一つで違う訳本に甲乙をつけることはできない。惜しいことに、現在『源氏物語』の中国語訳研究はまだこの苦境から脱出することができない。小論は現在学界で両訳本を比較する論文を整理して検討している。現在の論文はなお多く「誤訳」「不足」を論述のスタイルとしているので、文学の翻訳研究にはそれほど意義を持たない。

さらに、『源氏物語』が男女関係を描く重要な美学理念である「色好み」を主として、全面的に林訳と豊訳の表現およびその言葉の背後に隠されている文化理解と翻訳策略を分析し、林先生の訳文が努めて原作の柔らかな婉曲なスタイルに近づき、人物の場面、身分、地位、役の違いに合わせ、細やかで多重的な翻訳で平安時代男女恋愛の「風雅多情」の世界を描き出していることを明らかにした。

最後に、何れの訳本をも低く評価するつもりはないが、現在の『源氏物語』の中国語訳研究は、周作人の評価に対してまったく言及することがないようである。学術研究として理に適っていないことである。また、ある種の意味で、周作人の意見も翻訳文体及び訳者が原著の時代と文学の雰囲気に対する把握と表現という重要な問題を反映しているといえる。

(國立台灣大学日本語文學系所 教授)

(翻訳：庄 婕 淳／立命館大学 大学院博士後期課程)
(しょう しょうじゅん)

徐迎春は、「その意識は、『陸奥紙』など中国語にはない言葉については、その部分的な意味を捉えて訳出したことが『原稿』から窺えた。しかし、その意識は、『陸奥紙』の例が示すように、中国の読者からすれば分かりやすい訳と言えるが、『源氏物語』の本文の意味や雰囲気を壊してしまっていることもあるのである。出版に際して、豊子愷が試みた意識は、出版社と豊一吟によって直訳の形に修正され、脚注でその意味を補われた。」と述べている。

■ 翻訳にあたって

庄 捷淳

林文月先生訳の『源氏物語』を拝見したのは、2013年の春でした。それ以来、毎日拝読しているだけでなく、京都で伊藤鉄也先生主催の「ハーバード大学本『源氏物語』を読む会」と「『十帖源氏』を読む会」に参加する際、いつも座右の書として、参照させていただいています。いずれは研究の対象としたいとその時から考えています。

ちょうどその年に、林文月先生の傘寿のお祝いのため、かつてお勤めの台湾大学は、9月5日から6日にかけて、川合康三先生、金文京先生をはじめとする関連領域の学者をお招きし、「林文月先生學術成就與薪傳國際學術研討會」と題する盛会を催されました。中では、とくに朱秋而先生の『源氏物語』中国語訳についてのご発表が気になり、台湾大学の余筠珪先輩と張宇衛先輩のお力で、早速その発表原稿を拝読することができました。両氏に感謝いたします。

朱秋而先生は緑川真知子先生の最新の研究成果を踏まえ、今までの翻訳研究にない視点を提示し、つまり、誤訳の指摘に留まらず、当時の時代風俗や慣習を踏まえ、「風流」な人物造型の表現を切り口として訳文を分析し、文化の伝達の視点からの翻訳研究の可能性を示唆しています。

中国語の論文ですが、伊藤鉄也先生にその内容について報告しますと、日本の学界にもシェアしてほしいとのご要望を受けました。そこで、朱秋而先生と連絡を取り、有難いことに、朱先生から翻訳についての快諾を頂戴し、拙い筆ながら、現在のような形で日本語に訳すことができました。労を厭わず、何度まで返事くださり、さらに翻訳についてのご快諾を下された朱秋而先生に厚く御礼申し上げます。これからは、朱先生の論文を参考にし、研究に励んで行きたく存じます。

「忠こそ物語」と継子いじめ譚

趙 俊 槐
(ちよう しゅんかい)

❁ 1. はじめに

「忠こそ物語」が元来継母が継子をいじめるといふ、いわゆる継子いじめ譚として読み取られていることは言うまでもない。継子いじめ譚といっても、内典と外典という二種のものがその背景にある。森田実歳氏は仏教經典のクナラ太子譚をはじめとして、古代インドの大長編叙事詩の一つ『ラーマーヤナ』、さらに古代ギリシアまで遡って、特に「究察モチーフ」（父は究察せずに息子や後妻を懲罰する）に重点を置き、継子いじめは古代世界において共通的な話種だという結論を出し、「忠こそ物語」もこのような背景のもとに生まれたものだとしている¹。

池田恭子氏は古代日本には継子いじめの土壌がないから、このような話種は継子いじめの話の多い古代中国から伝わってきたものでしかないと述べ、また「忠こそ物語」と『琴操』にある伯奇譚『履霜操』、仏教の『大唐西域記』にあるクナラ太子譚、さらに敦煌変文の「舜子変」との相似性にも触れている²。相似性のあるところはそれぞれ、忠こそが読経しているのが嵯峨帝に聞こえたところと追放された伯奇が弹琴しているのが行幸中の宣王に聞こえたところ、一条北の方が忠こそに言い寄るところと阿育王の妃がクナラ太子に言い寄るところ、忠こその実母の遺言と舜の実母の遺言という三点である。三木雅博氏は「仲忠の孝養譚が明らかに『孝子伝』の孝養奇瑞譚に基づいているところから、忠こそその＜継子いじめ＞の物語にも、『孝子伝』の＜継子いじめ譚＞——具体的には「伯奇」の物語——が用いられている可能性」を論じ、日本に現存の二冊の

1 森田実歳「忠こそ」の説話的背景(上)『国語国文』42 - 10 1973年10月。
森田実歳「忠こそ」の説話的背景(下)『国語国文』42 - 11 1973年11月。

2 池田恭子「継子物語研究——継子物語の誕生に関する一仮説——」『日本文学』40 1-15P 1973年11月。

『孝子伝』³にある伯奇の話と仏教のクナラ太子譚とから「忠こそ物語」を考察した⁴。

本論文は以上の研究を踏まえて、継子いじめ譚という視点からもう少し詳しく「忠こそ物語」を論じたいと思う。継子いじめ譚は古代中国文学だけでなく、古代印欧文学にもある要素のようであるが、当時の日本を取り巻く国際環境と古代中国と頻繁に行われていた文化や文学の交流などの面から、中国の継子いじめの話と漢訳仏教に絞って、特に典型的な継子いじめ譚としての伯奇譚、舜譚、及び漢訳仏教にあるクナラ太子譚に着目して論じようと思う。

❁ 2. クナラ太子譚か老女の色好みか

継子いじめ譚として、継母が継子をいじめる理由が内在的論理上まず必要不可欠であろう。中国の継子いじめの話では継母は実子ができたから、先妻の子を憎み始めたといういわゆる家督継承権がいじめの理由になっているが、平安時代の日本は中国のような父系社会ではなく、母性原理社会なので、家督継承権はいじめの理由にはなり得ないのである。そこで、別の理由が必要になるが、この理由というのも、読者に納得させるために、当時の日本伝統や文化などに合うものでなければならない。「忠こそ物語」では、継母が愛欲を拒まれたため、継子をいじめ始めたという筋は当時の読者にとって納得できるものであり、いじめの理由になり得たわけである。

クナラ太子譚が注目されるのは「忠こそ物語」と同じようないじめの契機を有しているからであろう（『阿育王伝』『阿育王経』『大唐西域記』などでは継母が継子をいじめたのは、愛欲を拒まれたためというよりも、

3 陽明文庫所蔵の陽明本と船橋家旧蔵の船橋本（京都大学附属図書館所蔵）。

4 三木雅博(一)「『うつほ物語』忠こそその<継子いじめ譚>の位相——『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較考察から——」『国語国文』73(1) 2004年01月。
(二)「<継子いじめ>の物語と中国文学——『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために」『国文学 解釈と教材の研究』50(4) 2005年04月。

継子のクナラ太子が国王になったら、自分が殺されるのを恐れているためと言ったほうが適切かもしれない)。継父母と継子女との間の恋の話は古代中国典籍にはあまり見えないし、また倫理道德を強調している儒家社会ではほとんどありえない話である（継母の讒言として、色恋の要素が若干見えるが）。漢訳仏典にもクナラ太子譚のほか継母子間の色恋の話は見られないようである。クナラ太子の話は『阿育王伝』『阿育王経』『大唐西域記』『釈迦譜』『経律異相』『法苑珠林』など多くの仏教經典に見られる。それぞれ一致していないが、継母（三木氏がご指摘のように、「継母」という呼称は上記の經典の中で『大唐西域記』にしか見られないようだ）が継子に言い寄り、継子がこれを拒むところは一緒である。「忠こそ物語」の作者はこのような影響を受けて、同じような虐めの契機を構想した可能性はないとは言えない。ただ、すでに述べたように、この契機というのは読者にとって納得できるものでなければならない。ここでまず、「忠こそ物語」における継母の愛欲が継子に拒まれたため継子をいじめ始めたという筋が当時の日本の読者に納得できる理由を述べてみたい。

「忠こそ物語」では一条北の方は千蔭とも忠こそとも大きい年齢の差がある一人の老女として描かれている。「男はただ今三十余、女は五十余ばかりなり。よきほどなる親子ばかりなる」⁵（『宇津保物語』＜忠こそ＞214頁）という千蔭と一条北の方との年齢描写からわかるように、一条北の方は千蔭にとっても忠こそにとっても老女である。ある意味からいえば、一条北の方が千蔭に言い寄るのも、千蔭の息子の忠こそに言い寄るのも、ただ一人の老女が年若美男子に対する色好みから発した行動であると言ってもよからう。老女の色好みなら、日本古典文学の中には稀な素材とは言えない。大井田晴彦氏は老女の呪力からすでに一条北の方と『伊勢物語』第六十三段のつくも髪の老女との相似性を指摘した⁶。柳瀬先氏はさらに一条北の方のプロフィールを『伊勢物語』のつく

5 本論文が扱う『宇津保物語』は、『新編 日本古典文学全集』のものである。

6 大井田晴彦「一条北の方の造形——『うつほ物語』作中人物覚書」『物語研究会報』第26号 1995年08月。

も髪のお女、『枕草子』の「にげなきもの」、『源氏物語』の源典侍などになぞられ、色好みと滑稽な老女として捉えている⁷。ここで特に注目したいのは『伊勢物語』のつくも髪のお女である。まず、その内容を見てみよう。

むかし、世心つける女、いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど、(ア) いひいでむもたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす。子三人を呼びて語りけり。ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで来む」とあはするに、この女、けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中將にあはせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きけるにいきあひて、(イ) 道にて馬の口をとりて、「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりて、来て寝にけり。さてのち、男見えざりければ、女、男の家にいきてかいまみけるを、男ほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆとて、いで立つけしきを見て、うばら、からたちにかかりて、家にきてうちふせり。男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女嘆きて寝とて、

さむしろに衣かたしき今宵も恋しき人にあはでのみ寝むとよみけるを、男、あはれと思ひて、その夜は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。(『伊勢物語』新編 日本古典文学全集(以下、新編と略称) 164頁 下線は筆者)

一条北の方は千蔭を好きになったが、口に出しにくくて、神仏に大願を立てまわった。が、その験はない。そして一条北の方は「この人にわ

7 柳 瀬先 『『宇津保物語』における〈老女の恋〉——一条北の方をめづつて——』『名古屋大学国語国文学』(92) 2003年07月。

れかと思ふといはむ」「恥を捨てていひいでむ」（『宇津保物語』＜忠こそ＞212頁）と思うようになった。これは（イ）の「かうかうなむ思ふ」に似ているではないか。恥ずかしいけれど、仕方がないから、いっそ直接言い出してしまおうかという心理活動が一条北の方とつくも髪の老女は共通している。また千蔭を引き留めるために一条北の方は女房たちに「夢語りなど」をさせ、自分自身も「物忌みしたまふべき夢を見つ」（『宇津保物語』＜忠こそ＞221頁）と言って、まさに下線（ア）のような「まことならぬ夢語り」などをしている。

また、『枕草子』の「にげなきもの」における「老いたる女の、腹高くてありく。若き男持ちたるだに見苦しきに、こと人のもとへ行きたるとて腹立つよ」（『枕草子』新編 100頁）という好色の老女に対する批判からでもわかるように、若い男と親密関係を持っている老女がいたこと、また、老女が親密関係の男が他の女のところに行くのを腹立たしく思ったり、文句を言ったりしていたことなどが事実のようである。一条北の方も美男子の忠こそが姪のあこ君のところにしきりに通ってくるのを「いとうらやまし」と思っているのではないか。『源氏物語』の源典侍も好色の老女としてよく知られているであろう。「（源氏に）「君し来ば手なれの駒に刈り飼はむ盛り過ぎたる下葉なりとも」と言ふさま、こよなく色めきたり」、「頭中将、聞きつけて……（源典侍と）語らひつきにけり」「五十七、八の人の、うちとけてもの言ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御なかにてもの怖ぢしたる、いときなし」（『源氏物語』（一）新編 338頁）という描写でわかるように、五十七、八の老女が二十代の若い男たちにすこぶる色好みであり、「いときなし」と作者に批判されている。

こうしてみれば、一条北の方が年若の千蔭やその息子の忠こそに言い寄るといような内容は、日本古典文学に少なくなく描かれており、当時の読者にとっては馴染みのある情景のようである。言い換えれば、一条北の方が忠こそを陥れるまでの話を継母が継子に対するというよりも、老女が年若の男に対する色好みとして捉えたほうがもっと相応しいかもしれない。

「忠こそ物語」の一条北の方は度々千蔭に「恥みせたまふな」と言って迫っていく。源典侍は「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる、身の恥になむ」（『源氏物語』（一）新編 338 頁）と泣いて、立ち去ろうとする光源氏を引き留めようとした。これに対して、橘千蔭は「聞き過ぐしてやみなば、情けなきやうにもあり、人の御恥にもあり」（『宇津保物語』（一）214 頁）と思って通い始めた。光源氏は「あまりはしたなくや」（『源氏物語』（一）新編 340 頁）と思って、源典侍の望んだ通りに室内に入った。「つくも髪」の在五中将も「あはれがりて、来て寝にけり」、「あはれと思ひて、その夜は寝にけり」、老女といえども「けぢめ見せぬ心なむありける」男である。大井田氏は「忠こそ物語」の一条北の方が度々口にして「恥」を呪力として捉えている⁸し、柳瀨先氏は老女の「恥」と相手の男の「情け」を番いものとして把握している⁹。つまり、色好みの老女は羞恥心を捨てて、思い切って好きな若い男に言い寄った心には、どうしても自分に恥を搔かせずに、情けを見せてほしいという願望があり、一方、言い寄られた男のほうは相手の心中を察し、情けを知らなければならない。もし情けを知らず、恥を見せてしまったら、女に嘆かれ、恨まれるのは言うまでもないことであろう。特に多大な勇気を出して、恥を捨ててまで愛欲を示してくれた老女にとってはなおさらである。

女に恥を見せることは情けないことであり、危ないことでもある。『古事記』の中の例を挙げてみよう。伊耶那美命は火の神を生んだため死んで、黄泉国に至った。夫の伊耶那岐命は妻を恋しく思って、黄泉国まで来て、妻を連れ戻そうとする。黄泉国の竈で煮たものを食べてしまった妻の伊耶那美命は再び葦原中国に戻れないはずだが、夫の深い愛情によって、夫と一緒に葦原中国に戻ろうと思って、黄泉国神と相談することにした。そして、「且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」（『古事記』新編 四五頁）と夫を戒めたが、夫の伊耶那岐命は待ちかねて火

8 前掲大井田晴彦氏の論文。

9 前掲柳瀨先氏の論文。

を灯してみたら、蛆などの集っている汚い妻の体を見た。妻は「吾に辱を見しめつ」(『古事記』新編 47 頁)と大変怒って、黄泉国の軍を遣わして夫を殺そうとする。恥を見せたため、愛してくれただけの夫を殺そうとまでする妻には、どれほどの恨みを抱いているのかわかるだろう。「忠こそ物語」では、「恥見せたまふな」とひたすら求める一条北の方に情けをかけた父の橘千蔭とは違って、一条北の方の何度もの言い寄りに知らず顔をしているばかりではなく、「寄る波の」という断りの和歌を寄こした。これをみて、一条北の方は「寄る波」を年老いた自分をからかったと誤って、「われに恥みすること。いかでかこれが報いせむ」(『宇津保物語』〈忠こそ〉 223 頁)と恨み、いじめはじめたのである。

確かに、在五中將や光源氏、父の千蔭などと比べれば忠こそは情けの知らない男である。多大な勇気を出して、恥を捨ててまでして愛欲を示してくれた老女に情けをかけないことだけでもひどいことなのに、まして相手をからかう(一条北の方の立場からみれば)などはけしからぬことであり、相手の深い恨みを買うことであろう。恥を見せたことで愛情深い夫を殺そうとまでする伊耶那美命がいるなら、恥を見せられたどころか、年齢がからかわれたため、恨みを覚えて相手をいじめ始めた一条北の方もいるはずである。要するに、「忠こそ物語」における一条北の方が継子の忠こそをいじめる理由が充分あり、情けの知らない年若の忠こそが言い寄ってくれた継母一条北の方の老女に恥を見せることがいじめられる契機となり得るのである。

当然のことであるが、作者がクナラ太子譚からの影響を受けたという可能性を否定しようとするわけではない。ただ、クナラ太子譚からの影響を受けなくても、作者がこのような継子いじめの契機を構想する可能性は十分あるということを述べたいのである。或いは、作者はクナラ太子譚を念頭に置きながら、当時の読者の馴染みのある日本文学の要素に取り合わせて継子いじめの契機を作りだした可能性もある。「忠こそ物語」には忠こそが出家したとあるが、全体的には仏教的雰囲気があり感じられないところからしてみれば、むしろ作者は色好みの老女の「恥」を継子いじめのきっかけと思っていたのではないだろうか。

また、「忠こそ物語」は継子いじめ譚として研究されてきたのであるから、同じ題材の中国の継子いじめの話に限って考察するが、そのような継子いじめの話の中で、継母が継子に言い寄る要素はないが、継子が継母を戯れるような内容が継母の讒言として出ている。後でまた詳しく述べるが、たとえば伯奇譚の「令搦蜂」¹⁰や敦煌出土の舜譚などに、継子が自分を戯れたというような継母と継子との間の色恋沙汰のような要素が見える。作者は「忠こそ物語」を継子いじめ譚として書くのなら、同じ題材の中国の継子いじめの話に出ている継母子間の色恋から多少影響を受けてもおかしくはないであろう。

❁ 3. 伯奇譚の受容について

さて、一条北の方は告白を拒まれたため、継子の忠こそをいじめ始める。どうやっていじめるかというと、「忠こそ物語」では始めから明白に記されている。

北の方、これを見たまひて、御心誤りたまひて、われに恥見すること。いかでかこれが報いせむと思ひなりて、何ごとをいひつけむと、目をつけて見たまへど、いひつくべきこともなし。
(『宇津保物語』〈忠こそ〉 223 頁)

つまり、讒言を以ていじめようとするのである。もし「忠こそ物語」が仲忠物語と対比のものとして書かれたという三上満氏と大井田晴彦氏のご指摘に従うとすれば¹¹、仲忠孝養譚が『孝子伝』を含む孝子説話に多大な影響を受けているように、「忠こそ物語」もこのような孝子説話から影響を受けている可能性は高い。そもそも、中国の孝子説話は親孝

10 「令搦蜂」は『世俗諺文』にある言葉で、伯奇譚の主な内容を諺的に言う。

11 三上満 「「忠こそ物語」の意義について——忠こそその巻を中心に——」『日本文学』34(9) 1985年09月。大井田晴彦 『うつほ物語の世界』(風間書房 2002年12月) 第三章「「忠こそ物語」の位相——仲忠との出逢い——」。

行を強調するために、多くは継母と継子というふうに設定されている。たとえば舜譚、伯奇譚、申生譚、王祥譚などと数多い。中で讒言を以て継子を中傷し、父子関係を引き裂くもっとも有名なのは伯奇譚で、その次に敦煌本舜譚がある。すでに述べたように、「忠こそ物語」と伯奇譚との受容関係は早くから指摘されている。しかし、伯奇譚といっても、いろいろな演義があり、すべて内容が一致しているわけではないから、どのような伯奇譚からの影響かと指摘されていない。確かにどれかと明確にすることは難しいが、どのようなものがその可能性が高いかということが一応できる。

伯奇譚について、黒田彰氏は詳しく考察している¹²。黒田氏によれば、伯奇譚は中日両国の古典文学に多く記載されており、両国の共通的文学要素としてよく知られていたという。中国側の記載としては、各本所引の『孝子伝』のほか、『漢書』『後漢書』『説苑』『世説新語』『韓詩外伝』『文選』『琴操』『琴清英』『白氏文集』などと実に多い。日本側としては、以上のような中国古典が将来されていたことは言うまでもなく、日本における記載や演義としては『注好選』『世俗諺文』『内外因縁集』『今昔物語集』『太平記』などと、中国に劣らないぐらいの流布ぶりであった。特に『白氏文集』などの古代日本における受容によって、伯奇譚が当時の文人や貴族たちによく知られていたことが窺える。『白氏文集』の中の伯奇譚に関する内容を示せば以下の通りである。

誰知偽言巧似簧、勸君掩鼻君莫掩、使君夫婦成參商、

勸君掇蜂君莫掇、使君父子成豺狼。

(『白氏文集』『新樂府』五十首 47「天可度」)

『白氏文集』の影響を受けて、『太平記』はほとんど同じような内容を綴っている。

12 黒田彰 『孝子伝図の研究』 汲古書院 2007年11月。

誰知偽言巧似簧、勸君掩鼻君莫掩、使夫婦而為參商、請君掇蜂
君莫掇、使母子而成豺狼。（『太平記』西源院本 卷十二）

両者に大きな違いとしてはやはり「父子」と「母子」の違いであろう。
これについて、黒田彰氏は以下のように述べている。

面白いのは、新樂府の、「使君父子成豺狼」を、太平記が、「使母子
而成豺狼」と言い換えていることで、新樂府の「父子」ならば、なお
北野天神縁起における宇多、醍醐父子と関連付けることも出来ようが、
太平記の「母子」の場合、それも全く不可能である。すると、太平記
のこの無理な言い換えは、「掇蜂」句の指す、継子譚の典型としての
伯奇譚を、意識したものと解さざるを得なくなる。（『孝子伝図の研究』
「伯奇贅語」）

要は、『太平記』の作者が原文の「父子」を「母子」に言い換えたの
は「請君掇蜂君莫掇」を伯奇譚の継母の「偽言」としてはっきりと意識
していたからにほかならない。実は「掇蜂」（又は「弘蜂」「搦蜂」）は
中日両国において伯奇譚の代名詞のようになっていると言っていいくら
いである。これは「掇蜂滅天道 拾塵惑孔顔」（晋 陸機『君子行』）、「伯
奇掇蜂賢父逐 曾參殺人慈母疑」（唐 李端『雜歌』）、「然而於窃鉄而知
心目之可乱 於掇蜂而知父子之可間」（唐 劉禹錫『上杜司徒書』）や、「伯
奇弘蜂」（『注好選』卷上 第六十六）、「令搦蜂」（『世俗諺文』卷上）な
どによってわかるであろう。

これほどの流布ぶりの伯奇譚なら、同じ継子いじめ譚としての「忠こ
そ物語」の作者はその影響を受けなかった可能性はかえって低いと言え
るであろう。三木氏は『孝子伝』¹³ 伯奇譚との相似性については、以下
の三点に着目している。

13 三木氏は『孝子伝』のどれかはっきりと言っていないが、日本現存の二種
の『孝子伝』を指しているだろう。

- ① 継母が奸計を案じ父に讒言し継子を陥れようとし、父が継母の奸計による讒言を信じてしまう。
- ② 父に信じてもらえなかったことに衝撃を受けての子の流離と悲劇的な結末。
- ③ 真相を知った父が子を探し求めるが、子には二度と会えない。

確かに、「忠こそ物語」でも、継母の讒言、父千蔭ははじめは讒言を信じなかったが二度目の讒言を信じるようになった、忠こそはやむを得ず山林に遁世した、父は後悔して息子を探しに出たという『孝子伝』と共通的な要素が見える。しかし、このような内容は『孝子伝』に限らず、他の伯奇譚にも見えるし、共通内容である。もし伯奇譚をどれかに絞らず、共通内容として論じるならば、「忠こそ物語」には伯奇譚からの影響と思われるところは他にも少なからずある。以下は、これについて詳しく説明する。

伯奇譚には様々な演義があるが、内容豊富で陽明本『孝子伝』、船橋本『孝子伝』と『今昔物語集』巻九 20 とそれほど内容的に違わない『注好選』巻上「伯奇拂蜂」第六十六を以下に示しておく。

此の人は、周の丞相伊尹吉補が子なり。人の為に孝慈あり。未だ嘗にも悪あらず。時に後母、一男を生みて、始めて伯奇を憎む。(A) 或いは蛇を取りて瓶に入れて伯奇に賣たしめて、小児の所に遣る。小児之を見て、畏怖して泣き叫ぶ。爰に母父に語りて云はく、「伯奇は常に吾が子を殺さむと欲。君見知らずや。行きて畏しき物を見よ」と。(B) 父瓶の中の蛇を見て曰はく、「吾が子は、若うより人の為に悪無し。豈之有らんや」と。(C) 母が曰はく、「若し君信ぜずは、慥に其の所為等を見せしめむ。妾と伯奇と彼の藺に往きて菜を採まむ。君、窺ひて伯奇の所為を見るべし」と。即ち後母、密かに蜂を取りて、袖の中に裏むで藺に至りぬ。乃ち母地に倒れて云はく、「吾が懐

に蜂入れり」と。爰に佰奇走り寄りて、懷を採り蜂を掃ふ。時に母起ちて、家に走り還りて云はく、「君見ずや否や」と。(D)父之を信じて佰奇を召して云はく、「汝は吾が子なり。上には天に恐れ、下には地に恥づ。何ぞ汝後母を犯すや」と。佰奇之を聞きて、「五内に主無し。既に後母が讒謀を知りて、諍がふと雖も信ぜじ。如かじ、自ら殺害してむ」と。人有りて誨へて云はく、「罪無くして徒に死なむよりは、如かじ、逃げて他の国に住まむには」と。時に佰奇遂に逃げ去りぬ。

(E) 父猶後母が讒謀を知りて、車を馳せて遂ひ行く。河の岸に至りて、吏に逢ひて問ひて云はく、「此より童子過ぎつるや」と。吏答へて云はく、「可愛げなる童子涙たり、河の中に至りて天に仰ぎて嘆きて曰はく、「我計らざる外に忽ちに蜂の難に逢ひ、家を離れて浮蕩して帰する所無し。心に向ふ所を知らず」と。嘆き已って、即ち身を河の中に投げて没み死にぬ」と。父之を聞きて悶絶し、悲しみ痛むこと限り無し。乃ち曰はく、「吾が子佰奇、怨を含みて身を投げたり。嗟々しきかなや、悔々しきかなや」と。時に飛鳥、吉補が前に来至せり。吉補が曰はく、「吾が子の若し鳥に化せるか。若し然らば当に我が懷に入れ」と。鳥即ち吉補が手に居て、亦其の懷に入りて袖より出でぬ。又父が曰はく、「吾が子佰奇が化せるならば、吾が車の上に居て、吾に順ひて家に還れ」と。即ち鳥車の上に居て家に還り到る。

(F) 後母出でて見て曰はく、「噫、悪しき怪鳥なり。何ぞ射殺さざる」と。父弓を張りて之を射るに、箭鳥には中らずして、母が胸に当中りて死亡しぬ。鳥即ち其の頭に居て、面目を啄み穿ちて、乃ち高く飛びぬ。死にても敵を報ゆるは、所謂(「殷」の左の部分+鳥)鳥是なり。雖にして母に養はれ、長じては還りて母を食す。世々に此の怨、敵を施さざる所、以て此の如きか。(新 日本古典文学大系 『三宝絵 注好選』 二六〇)

以上の内容をまとめてみると、以下のようになる：

- A、継母は蛇を以て小児を殺そうとすると讒言する；
- B、父が信じない；
- C、継母は懷の中に入れておいた蜂を払わせているところをわざと夫に見せ、伯奇が自分を戯れたと讒言する；
- D、父が信じ、伯奇は追い出されてしまい、川に身を投げて死ぬ；
- E、父は真相を知って、追いかけて行っただが、間に合わず、後悔する；
- F、鳥に化身した伯奇は継母に報復する。

継母の讒言 A、父が信じないという B、二回目の讒言 C、父が信じてしまい、継子が流離うという D、父が真相を知って、子を探しに出たが、会えなかったという E、最後の F の報復譚は違うが、A から E までの成り行きの相似性は、三木氏のご指摘の通りである。

実は、A から E までの成り行きの相似性のほかにも、伯奇譚からの影響と思われるところはいくつかある。C のところの讒言の内容からわかるように、クナラ太子譚だけでなく、伯奇譚にも継子と継母との間の色恋沙汰が含まれている。さらに、『説苑』の伯奇譚を引いた『文選』（巻二十八）や『後漢書』（巻六十一）などでは¹⁴「伯奇愛妾」、『琴操 履霜操』では「伯奇見妾有美色、然有欲心」とはっきりと情事の要素を表している。継子が自分を戯れようとしたという継母の讒言は「忠こそ物語」にもある。一回目の讒言が無駄になってしまったため、一条北の方は甥の祐宗をして、以下のようなことを千蔭に讒言させた。

このものしたまふ人は、年も老いぬ、今更に人に見えたてまつらじと思ひしを、一人ある者どもの、つれづれどもの心細げに思ひたりしかばなむ、時々ものするを、(カ) あさましきこと、忠こそそのいかなることかありけむ、あさましき心つきて、夜昼いへば、見知らぬやうにてはべれば、思ひ狂ひて、『おほかたは父おとどのいますがあればぞ、かくあなづりたまふ。いますからずは何かつつまむ。この道には親子なきものななり。このお

14 今本の『説苑』には伯奇の話は見られない。

とど、帝傾けたてまつらむと奏して、流させたてまつりて、つ
つむことなくて責めいはむ』となむいひたばかりなる。これな
むおのが身に苦しきことなる。かかることなむあると、かしこ
に語らむと思へど、(キ) かかる仲らひを、昔より腹汚きもの
に人のいへば、あぢきなくてなむえものせぬ。(『宇津保物語』
＜忠こそ＞ 230 頁)

また、一条北の方は五節に千蔭が訪れてくる景色もないから、忠こそ
があこ君のところに来てのを見て、うらやましくて愛欲のこもった
和歌を忠こそに渡した。忠こそはこれを見て、(ク) 「いとあやしく、
かくのたまふは、おとどに悪しと思はせたてまつらむとにやあら
む」(『宇津保物語』＜忠こそ＞ 222 頁) と不思議に思った。

(力) は伯奇譚のように継子が自分に言い寄るといふ継母の讒言であ
る。さらに、継子が自分を手に入れるために父を流させようとしたとい
う恐ろしいほどの讒言まで継母は思いついた。そして、自分が自ら継子
のこの悪だくみを夫の千蔭に教えようとするが、(キ) でわかるように、
昔から継子の悪口を夫に訴える継母の心が汚いと言われてきたので、と
ても口に出不せないから、甥のあなたに助けてもらうのだと自己弁明もし
ている。(ク) のところであるが、忠こそは継母の愛欲のこもった和歌
を見て、何よりもまず心配したのはほかでもなく、継母はわざとこう言っ
て、父に自分のことを悪く思わせるのではないかということである。継
子が自分に言い寄るといふ讒言(力)、継母として継子の戯れを夫に告
げ口するのが腹汚いという一条北の方の認識(キ)、忠こそその反応(ク)、
この三つを合わせてみると、作者は伯奇譚などをはっきりと意識してい
たことがわかる。

忠こそは父に見捨てられたあと、「恐ろしく恥づかしく」(『宇津保
物語』＜忠こそ＞ 236 頁) 思ったあまり、山林に隠遁する意欲が生
じたのである。偶然かもしれないが、息子が継母を戯れたと信じ込んだ
尹吉甫が息子を責める言葉として、船橋本『孝子伝』では、「汝我子也、

上恐乎天、下恥乎地」となっており、『注好選』「伯奇拂蜂」では、「汝吾子也、上恐于天、下恥于地」（『古代説話集 注好選』原文影印 東京美術）となっており、『今昔物語集』巻九第十二では「汝ハ、我ガ子也。上ハ天ニ恐リ、下ハ地ニ恥ヅ」となっている。おそらく伯奇譚のこの「恐天」「恥地」は日本古代の文人たちによく知られていた言葉であろう。「忠こそ物語」における「恐ろしく恥ずかしく」という言い方も他の日本古典文学には見られないし、作者が伯奇譚を意識したうえでの用語ではないかと思う。

以上の内容から見れば、「忠こそ物語」は伯奇譚からの影響を受けていることはほぼ間違いないと思う。ただし、『文選』や『後漢書』などの引いた『説苑』伯奇譚と『琴操』伯奇譚には継母の蛇の讒言（A）と報復譚（F）こそないが、（B）から（E）までの要素、即ち「継母が継子の戯れを讒言したが父が信じないこと」、「払蜂」、「父からの追放」、「継子の流離」、「父の後悔」などの要素はすべて揃っているから、これらの伯奇譚も作者に影響を与えた可能性はないとは言い難い。

池田氏は『琴操』に出ている出遊の宣王が流離中の伯奇の歌を聞いてすぐに「孝子の辞」とわかって、伯奇の父尹吉甫を論したということが嵯峨帝が忠こそその読経声を聞いて、深いわけがある行者とわかって、助けてやったということとの類似性を指摘した。確かに、帝の介在に注目すれば、伯奇譚としては今のところ『琴操』（『文選』に引かれている『琴操』を含めて）だけが帝の存在が認められる。以下、『琴操・履霜操』の内容を示しておく。

《履霜操》者、尹吉甫之子伯奇所作也。吉甫、周上卿也、有子伯奇。伯奇母死、吉甫更娶後妻、生子曰伯邦。乃譖伯奇於吉甫曰：“伯奇見妾有美色、然有欲心”。吉甫曰：“伯奇為人慈仁、豈有此也？”妻曰：“試置妾空房中。君登樓而察之”後妻知伯奇仁孝、乃取毒蜂綴衣領。伯奇前持之。于是吉甫大怒、放伯奇於野。伯奇編水荷而衣之、采檉花而食之、清朝履霜、自傷無罪

見逐、乃援琴而鼓之曰：“履朝霜履兮採晨寒、考不明其心兮聽讒言。孤恩別離兮摧肺肝、何辜皇天兮遭斯愆。痛歿不同兮思有偏、誰說顧分兮我冤”。宣王出遊、吉甫從之。伯奇乃作歌、以言感之於宣王。宣王聞之、曰：“此孝子之辭也”。吉甫乃求伯奇於野而感悟。遂射殺後妻。（『琴操』 百部叢書集成 嚴一萍 選輯 芸文印書館印行）

（「履霜操」は、尹吉甫の子伯奇の所作なり。吉甫、周の上卿なり、伯奇といふ子有り。伯奇の母死にて、吉甫更に後妻を娶りて、子を生みて伯邦と曰ふ。乃りて伯奇を吉甫に於いて譜して曰く「伯奇、妾に美色有りと見て、然りて欲心有り」と。吉甫曰く「伯奇、人を為して慈仁にして豈に此有りや」と。妻曰く「試みに妾を空房の中に置け。君は樓に登りて而して之を察せよ」と。後妻は伯奇の仁孝を知る、乃りて毒蜂を取りて衣領に綴る。伯奇前みて之を持つ。是に于いて吉甫大いに怒り、伯奇を野に放す。伯奇水荷を編みて而して之を衣し、槿花を采みて而して之を食す。清朝に霜を履きて、自ら罪無しに逐われることを傷み、乃りて琴を援きて而して之を鼓ちて曰く「朝の霜を履きてや、晨の寒さを採る。考するに、其の心を明らかにせずや讒言を聴き、孤恩別離してや肺肝を摧く。何ぞ皇天に辜きてや斯の愆りに遭ふ。痛歿不同にしてや思偏り有り、誰が説き顧みてや我が冤を知る」と。宣王出遊して、吉甫之に従ふ。伯奇乃ち歌を作りて、言を以て之を宣王に於いて感ぜしむ。宣王之を聞きて、曰く「此孝子の辭なり」と。吉甫乃りて伯奇を野に於いて求めて而して感悟す。遂に後妻を射殺す。）

宣王は野に遊びに出たところ、伯奇が歌を歌っているのを聞いてこれは孝子の歌であるとすぐわかった。尹吉甫は宣王の諭しによって息子の冤罪を知り、山野に流離している伯奇を呼び戻し、姦計をめぐらした後妻を殺してしまった。池田氏がご指摘の通り、これは嵯峨帝が忠こそ

読経声を聞いて助けてやったところと関連性が高い。実は、ここだけではなく、「忠こそ物語」においては、千蔭が息子の無罪を知ったのも帝の注意（宣王の諭し）によるものではないか。忠こそがいなくなった後、千蔭が宮中に行ってこのことを語りだすと、帝は「ただにてはよに隠れじ。親ばかりの責めのたまはむにこそうずくこともあらめ」（『宇津保物語』〈忠こそ〉 243 頁）と千蔭の過失を指摘し、さらに「このことはさだめて知りぬ、人に謀られたまへるななり。不便なることなれど、左大臣の上、昔よりよろしからず、心聞こゆる人なり」（『宇津保物語』〈忠こそ〉 244 頁）と忠こそその継母の一条北の方の姦計に気付いた。「忠こそ物語」と俊蔭漂流譚が同じ作者だとすれば、琴を物語の重要な主題の一つにした作者が『琴操』などの琴に関する書物を読んだ可能性は高い。或いは、『文選』（巻十八）にも「履霜操」の内容が引かれているから（引かれた内容に、「伯奇編水荷而衣之、采梔花而食之、清朝履霜、自傷無罪見逐、乃援琴而鼓之曰：“履朝霜兮採晨寒、考不明其心兮聽讒言。孤恩別離兮摧肺肝、何辜皇天兮遭斯愆。痛歿不同兮恩有偏、誰説顧兮知我冤”」という伯奇の歌の内容が見えない、ほかはほとんど同じである）、作者は『文選』などによって「履霜操」を目にした可能性もある。

また、清の時代の茆泮林氏が中国の各典籍に引かれている『孝子伝』の内容を蒐集して作った『古孝子伝』の中に、孝子伝補逸として尹伯奇の話が見えるが、これは明の時代の楊慎が編纂した『丹鉛総録』が『孝子伝』から引いたものである。内容は非常に簡単に「尹伯奇採_□花以為食」だけである。梔花を採って食べるという内容はほかには、今のところ『琴操』『履霜操』にしか見られない。概ね「履霜操」と同じ系統の『孝子伝』系伯奇譚が存在していたかもしれない。あるいはその散逸した『孝子伝』が「履霜操」の記載内容をそのまま引いていた可能性もある。『琴操』とその散逸した『孝子伝』、『文選』が引いた「履霜操」などの存在によって、宣王介在系統の伯奇譚が広がり、古代の日本文人に馴染まれていた可能性もある。

継子いじめ譚として、伯奇譚のほかに舜譚にもこのような要素がある。たとえば敦煌変文の「舜子変」に以下のような内容がある。

後阿嬢聞道苦嗽到来、心里當時設計、高聲喚言舜子：“實若是阿耶来、家裏苦無供備；阿嬢見後菌果子、非常最好、紅桃鮮味。我若摘得桃来、豈不是於家了事！”舜子聞道摘桃、心裏當時歡喜。舜子上樹摘桃、阿嬢也到樹底。解散自家頭計、拔取金釵手裏、刺破自家脚上、高聲喚言舜子：“我子是孝順之男、豈不下樹與阿嬢看刺。”舜子聞言、將為是真無偽、舜子即忙下樹。

※ ※ ※

（省略）後妻忽聞此言、滿目摧摧下淚。“自從夫去遼陽、遣妾勾當家事、前家男女不孝、見妾後園摘桃、樹下多埋惡刺、刺我兩脚成瘡、疼痛直連心髓。當時便擬見官、我見夫妻之儀。老夫若也不信、脚掌上見有膿水。見妾頭黑面白、冀生猪狗之心。”（『敦煌變文上』楊家駱主編 中国學術名著第二輯 中国俗文學名著叢刊第一集 第二冊）

（後阿嬢苦嗽が到りて来ると聞道く、心里に當時に設計し、高聲に舜子を喚びて言ふ：「實に若し是阿耶が来らば、家裏に供備無きを苦しまむ；阿嬢後菌の果子を見るに非常に最も好し、紅桃鮮味なり。我若し桃を摘み得て来たらば、豈に家の了事に於いて是ならざらんやは！」と。舜子桃摘まむと聞道く、心裏に當時に歡喜す。舜子樹に上りて桃を摘む、阿嬢也樹の底に到りき。自家の頭計を解き散し、金釵を手裏に抜き取りて、自家の脚上を刺し破りて、高聲に舜子を喚びて言ふ：「我子は是れ孝順の男なり、豈に樹を下りて阿嬢と與に刺を看ぞらんやは。」舜子言を聞きて、將に是れ真にして偽り無きことを為さんとす、舜子即ち忙しく樹を下りき。

※ ※ ※

（省略）後妻忽ち此言を聞きて、目に満ちて摧摧と涙を下す。「夫が遼陽に去りて自從（このかた）、妾を遣わして家事を勾當し、前家の男女不孝にして、妾後園で桃を摘めるを見て、樹下に多いに惡刺を埋め、我の兩脚を刺して瘡と成りき、疼痛みて

心髓に直連す。當時に便ぐに官に見ると擬したるが、我夫妻の儀を見たるがゆえ。老夫若し也信ぜずば、脚掌上に現に膿水有り。妾頭黒し面白しを見て、冀みて猪狗の心を生ず。』)

※の箇所数行の散逸内容があると思われる¹⁵。散逸内容のため、脚が刺されたことと「妾頭黒し面白しを見て、冀みて猪狗の心を生」じたこととの関連は分かりにくい。面白いことに、『重刊増広分門類林雜説』に引かれた尹伯奇の話に以下のような内容がある。

於是母与奇至園中、詐云、被刺脚。令奇看之。父遙見、謂如母言、呼奇責之。

(是に於いて母奇と与に、園中に至り、偽りて云はく、「脚を刺さる」と。奇をして之を看せむ。父遙かに見て、謂く、「母言うが如し」と、奇を呼びて之を責む。)

懷に入れてある蜂を払わせるのに代わって、刺されたと偽って足を見させるのを夫に見せて、伯奇が自分を戯れたと陥れようとしたのである。これによって「舜子変」の継母も継子の舜がわざと刺を埋めて、自分の足を刺したのは髪も黒く、顔も白い自分に戯れようとしたからだと夫に讒言したことが想像されるであろう。

❀ 4. 舜譚の受容について

舜譚も有名な継子いじめ譚であろう。これにも『史記』をはじめとして、いろんな説があるが、ここで特に注目したいのは敦煌出土の「舜子変」と王慶菽氏が敦煌から出土した資料によって蒐集した『敦煌本孝子伝』である。なぜ敦煌出土の舜譚に注目するかというと、これには

15 原文の校記に「疑中間所缺、不過数行」としてある。

現存中国典籍に記載されている他の舜譚にはないいくつかの要素が含まれているからである。その中の一つが銀銭のプロットである。「舜子変」では帝釈が密かに井戸に銀銭伍百文を降し、『敦煌本孝子伝』舜譚 A では孝子の舜は天を感動させて銀銭を井戸に降させた。『敦煌本孝子伝』舜譚 B の本文には銀銭が出ていないが、最後の詩讃には舜が井戸を掘ると銀銭を得たというような内容がある。また、この詩讃は「舜子変」の詩讃とまったく同じものであり、敦煌本舜譚 B は「舜子変」を簡素化したものか、「舜子変」と同じ底本を使っていたか定かでない。日本現存の二冊の完本の『孝子伝』の舜譚にはこの銀銭のプロットがないが、黒田彰氏のご指摘によると、『三教指帰』三大古注の中の成安注と覚明注には舜が銀銭を持って井戸に入ったという内容があるという。そして、注釈のはじめに「孝子伝云」という文字があるところから、二人の注釈者である成安と覚明が、あるいは少なくとも先行する成安が銀銭の要素の入っている孝子伝系統の舜譚を読んだことがあったということが想像できる。また成安注と覚明注に引かれている「孝子伝云」の内容を『敦煌本孝子伝』舜譚 A と比べてみると、その内容がほとんど同じであることに気付く。成安や覚明は『敦煌本孝子伝』舜譚 A、あるいは同じ系統のものを読んだのかもしれない。ほかには『太平記』や『三国物語』などの舜譚にはいずれも銀銭のプロットが入っているし、黒田彰氏によれば、日本の昔話にも継母が継子をいじめる手段として井戸を掘らせるというような話が多く、その中にも銀銭の要素が入っているという¹⁶。

銀銭プロットのほかに、継子譚として「舜子変」にしか見られない要素が昔話（『日本昔話大成』5 関敬吾）に多く出ている。たとえば実母の幽霊がその一例である。二〇五 A の「米福栗福」（AT480 + AT510）型だけを例にすれば、各地域に流布している話形の中で、半分近く実母の幽霊が虐められている実子を助けに現れている。他に、実母でなくても、前世の母か、行者や神様などが実母の変形かと思われる形で出ている。さらに昔話には「舜子変」からの影響を受けた可能性の

16 前掲黒田彰氏の著書、「重華贅語」。

非常に高いものがある。「二一一 灰坊」(AT314)という継子譚である。
以下、表を以て両者を比べてみる。

(継子がしたのだと讒言)	金釵を抜き取りて、自家の脚の上を刺し破りて…房の中に地に伏して起きず	後阿嬢は苦嗽が到来たと聞道き、心の里に当時に設計す…(舜に桃を摘ませる)	老人は郎君に報じる「昨、遼陽城従り来たり。今阿耶の書信を得たり」と。	阿耶暫く遼陽に到り、路に沿ひて些些な宜利を覓まむ	(実母) 道い了わりて命が終わりて…阿耶一個の継阿嬢を娶りて来	舜子変
(継子がしたのだと讒言)	剃刀でもって自分の顔に傷をつけて、そうして布団をかぶって寝ころんでしまった。	明日父が帰るから、薪取ったり庭掃いたりしてうんと働けよ。	いよいよ三月経って、明日は父の船が帰るという手紙が来た。	父の殿様は三か月の江戸への旅に上がった。	マミチガネが三つのとき母が死んだので、父はまた妻を迎えた。	灰坊

敦煌変文が古代日本に伝来していたかどうか確かな証拠はないが、以上の内容から見れば、すくなくとも「舜子変」が伝わってきていたようである。しかも、その要素が昔話に多く用いられていることから、日本での流布が広いことが考えられる。

さて、「舜子変」が古代日本に伝来しており、「忠こそ物語」の作者の知識範囲に入っていたとすれば、そこで、注目すべきなのは、池田氏がすでにご指摘の通り、舜の生母が死ぬ間際に夫に残した遺言である。その内容を示せば以下の通りである。

舜有親阿嬢在堂、樂登夫人便是。樂登夫人染疾在床、三年不起、夫人喚言瞽叟、「立有孤男孤女、留在児婿手頭、願夫莫令鞭恥。」

(舜親阿嬢有りて堂に在り、樂登夫人便ち是なり。樂登夫人は疾に染して床に在り、三年起きず。夫人は瞽叟を喚びて言く、「立びに孤男孤女有り、児婿の手頭に在るを留む。願はくは夫れ鞭恥せしめること莫れ」と。)

樂登夫人¹⁷が死ぬ際に一番見捨てがたいのはやはり「孤男孤女」のことである。自分がなくなったら、子供が虐待されないようにと夫に願ったのである。実はこれも夫の後妻を意識したうえでの発言であろう。後妻さえいなければ夫だけでは子供がいじめられることはないし、「莫令鞭恥」の「令」は他人にいじめられないようにと読み取れるのではないか。とにかく、舜の実母は自分の子供が継母にいじめられることを心配し、そんなことがないようにと夫に願ったのであろう。

昔話の継子いじめ譚には夫の後妻を意識しているという実母の遺言が見られないが、典型的な継子いじめ譚としての「忠こそ物語」には描かれているではないか。忠こそが五つの時に母は急に重病になって、死ぬ間際に夫に遺言を残した。この遺言はほかでもなく息子の忠こそを心配しているものである。さらに自分が死んだあとの後妻をはっきりと意識している。息子が継母に虐められないようにという願いの旨は「舜子変」とは変わらない。残念なことに、「舜子変」も「忠こそ物語」も生母の心配していたことがすべて事実となり、あたかも子供の運命が生母の遺言によって的確に預言されているかのようなのである。「舜子変」では生母の「莫令鞭恥」という願いは「有計但知説来、一任與娘子鞭恥」（計らい有らば但だ知り説きて来たれ。一任して娘子のために鞭恥せむ）によって破られてしまい、結局舜子はさんざん「鞭恥」されてしまった。忠こそも生母の心配していた「腹汚き人」の「あしき」ことによっていろいろ酷い目に遭った。生母の遺言によって物語が預言され、収束されているという構想は両者において同じである。一条北の方の具体的なはじめは伯奇譚に受けた影響が強いだろうが、生母の遺言によってその行き先が暗示されるという構想はやはり「舜子変」、あるいは「舜子変」系統の舜譚に受け継いだものだろうと思う。

忠こそは父に見捨てられたため、憂鬱になって閉じこもっていると、尊い読経の声が聞こえたため、あわてて出て行くと、「髪ところどころ

17 『山海経』巻十二「海内北経」に「舜妻登比氏生宵明、燭光、処河大沢、二女之靈能照此所方百里。一日登北氏」とある。この「登比氏」と「樂登夫人」との間に、流布上何かの関係があるかもしれない。

白けたる」山伏が供養を求めに来ていたのを見かけた。忠こそと仏教との縁は差し置いて、門前に老人が来ているという場面は舜子変にもある。舜は三年も帰ってこない父を偲びながら部屋の中で琴を弾いていると、門前に一人の老人が来ていて、舜はあわてて走り出た（「舜子撫琴中間、門前有一老人立地。舜子即忙出門」）。両者における老人の働きは一致していないが、門前に老人が来るという発想は「舜子変」からの影響という可能性がなくてはならない。

真言院の阿闍梨となった忠こそは嵯峨院の門のあたりで痩せ衰えている老女の乞食に出会った。忠こそは食べ物をやって、聞いてみると、なんと継母であった。いくらも命が残っていない継母をかわいそうに思い、忠こそは真言院の隣に小屋を作って住ませ、大切にお世話をするようになった。このあたりは池田氏のご指摘のように豊作に恵まれた舜が市で米を売っていると、米と交換しようとして薪を負って市に来ていた見苦しい姿の継母に何度もただで米を売ってあげた場面と似ている¹⁸。この辺りはほとんどすべての形の舜譚にある場面で、舜の親孝行を表明するのにもっとも都合のいい素材で、古くからよく知られていたはずであるから、必ずしも「舜子変」からの影響とは言えないが、「舜子変」がそのような影響を施した材料の一つには数えられることは間違いないであろう。作者は舜に準えて、富貴になった忠こそに自分をさんざんいじめた継母を恨まずに親孝行を尽くさせることによって、中国の継子いじめ譚のように輝かしい孝子を作り上げたのである。

❀ 5. まとめ

以上述べたように、「忠こそ物語」の作者は「舜子変」のように生母の遺言に預言され、収束されている継子いじめという枠組みの中に、伯奇譚や舜譚、クナラ太子譚などにおける継子と継母の間の色恋沙汰を意識していながら、色好みの老女が年若男に言い寄り、情けを知らない男

18 前掲池田恭子氏の論文。

に拒まれ、恥を見せられたため恨み始めたという日本の神話や物語に見える様式を以て継子いじめの契機を作り出したのであろう。いじめの手段としては、伯奇譚や「舜子変」系統の舜譚などのように讒言という形を取ったのである。具体的な讒言としては異なる内容を取るのが当たり前だが、それでもところどころに伯奇譚や舜譚の面影を思わせる。こうしてみれば、まさに三上満氏と三木雅博氏のご指摘のように、作者は確かに実母のいる孝子という仲忠物語と正反対なものとして、実母がいないため継母に虐められるという「忠こそ物語」を書いたのかもしれない。

(天津科技大学外国語学院日本語科 教員)

研究会拾遺



ウォッシュバーン訳『源氏物語』の問題点

緑 川 真知子
(みどりかわ まちこ)

❀ はじめに

デニス・ウォッシュバーン氏 (Dennis Washburn、ダートマス Dartmouth 大学準教授。イエール大学出身。近現代文学) による『源氏物語』の英訳が 2015 年に発刊された¹。タイラー訳が出てから 14 年ほどしか経過していない。1976 年のサイデンスティックア訳からタイラー訳が出るまでには四半世紀を要し、またこの期間は、欧米における日本研究の伸張と深化という大きな変遷の時期でもあり、新しい英訳の必要性の意味と価値がはっきりしていたことを考えると、2015 年のウォッシュバーン訳は、かなり速いスピードでの新英訳の出現ということになり、その意味においても何故新しい英訳がこの時期に必要であったのかという、その出版の意義は殊更見えにくい。出版の経緯についての詳しい事情はわからないが、そもそもは非常に著名な翻訳者、樋口一葉の英訳の傑作と言われる翻訳を成した Robert Danly 氏 (1947-1997) が『源氏物語』英訳の仕事を請け負ったそうである。しかし氏の病気により中断し、その後をデニス・ウォッシュバーン氏が引き継いだという経緯があるようである²。

日本において、著名作家が次から次へと現代語訳『源氏物語』の完訳や一部訳を出版するという現象があると言えるが、英語訳の世界もそのような趣になってきたのであろうか。近年の日本の場合は、おそらく『源氏物語』現代語訳を成すことにより、人気作家が少しでもその名を将来にまで遺していこうという意図が一部には見えると思われる。だが、興

1 Dennis Washburn, trans., *The Tale of Genji* (New York: W. W. Norton, 2015).

2 Robert Lyons Danly, *In the Shade of Spring Leaves: The Life and Writings of Higuchi Ichiyō, A Woman of Letters in Meiji Japan* (New Haven, CT: Yale University Press, 1981).

味深い事に、それらの作家的現代語訳の不備を看過できない専門家が、完成度の高い現代語訳を試みるようになってきている。ということは、ある意味、日本においては、作者の個性は生きているが乱立ぎみで、専門的には首肯できない部分も多く持つ現代作家の翻訳の現状に、学者の側からのきちんとした解答が示されつつあると言えよう。

ウォッシュバーン氏は既存の英訳とは異なる読者をターゲットにしたそうである。だが、欧米における主要なアジアならびに日本研究の学術誌などの中には、ウォッシュバーン訳の書評を載せる必要性を特に感じていないものもある。少しでも多くの新しい英訳が出ることは、歓迎される事象なのだろうか。日本語日本文化に必ずしも明るくない無明の闇にいる読者を本道から逸れるところへと連れて行きはしないのだろうか。本稿では、当該新英訳の姿を覗き、表題にも掲げたように敢えてその「問題点」に切り込んでみたい。

❁ 1. ウォッシュバーン英訳のスタンス—序文から—

ウォッシュバーン氏は、序文で、「この物語と現代の読者はどのようなつきあうべきか」と言う。³ 当たり前ではあるが、現代の読者を中心に据えているということがはっきりと見て取れる。また、次のように、「翻訳についてのいくつかの覚え書き」を記している。⁴ いま、以下にその大意を簡単に箇条書き的に記してみる（下線／括弧内緑川）。

- ・ 暗に過去の英訳を批判するためではない。
- ・ このような作品を翻訳しようとするのは愚かで一つのことに夢中になる輩にちがいない。どうしてこんな苦行をはじめたのか。それでも、絶対的な翻訳など存在し得ないから、この仕事を引き受けた。
- ・ 翻訳はバーチャルなパリンプセスト (palimpsest) だから、原典の意味するところをわかるようにする仲介をしなければならない⁵。

3 [...] how contemporary readers should approach the narrative. (page ix)

4 Some notes on the translation (pp. xxxiv ~ xxxviii)

5 パリンプセスト：元の字句を消してその上に字句を記した羊皮紙。文学用

- ・ 翻訳は極めて出しゃばりな形の読み方である⁶。
- ・ 本翻訳は、直訳的なものを目指した。
- ・ （宮廷女房たちが一緒に物語を読み合ったと説明したあと）平安朝の宮廷人の読書を再現することはできない。ただ、解説や詳細な説明を加えあったりするのは、一緒に読むときの重要な要素であって、これは翻訳において取り上げることができるものである。よって、受け入れ易さや、明確さというものが最優先事項であった私にとって、適切な情報を本文や注釈に加えることをした⁷。
- ・ 翻訳の役割は説明（あるいは解説）である。それで紫式部の時代には明白であっても現代の読者にとってはわかりにくい文意を、わかりやすくするために簡単な文章（brief phrases）を付け加えることにしたが、これは脚注などよりも本文を乱してはいない⁸。
- ・ 作中和歌英訳において 5/7/5/7/7 の音節を合わせることはしなかった。和歌の意味を自由自在に伝え、同時にあまり自由詩になりすぎないために 3 行詩（triplet）にするのが最も適切であると考えた。登場人物の心内語をイタリック体にしたのと同じく物議を醸すことは承知している。
- ・ 呼称：伝統的な呼称 (traditional names) がよいと思われる登場人物はそうしたが、その都度説明を加えてある。

以上、氏の覚え書きから、キーワード的なものを抽出しようとする、「わ

語としては、何度も書き換えられるテキストなどの意味。基本的に受容されるテキストということ。（ジュネットなどの論に見受けられる概念）。

6 an extremely intrusive form of reading (p. xxxv)

7 原典は以下のようにある。Although the reading practice of the Heian couriers cannot be replicated, the tasks of explanation and explication, which were an important aspect of reading together, can be taken up in a translation. Thus, accessibility and clarity have been overriding goals for me, and to achieve those goals I have added relevant information either within the body of the text or in footnotes. (p. xxxvi)

8 adding brief phrases to clarify passages ... does no more violence to the text than footnotes (pp. xxxvi-xxxvii)

かりやすさ」「説明」「解説」というところが最大公約数的に浮かび上がってこよう。また、自ら「物議を醸す controversial (p. xxxvii)」かもしれない事柄として、和歌3行詩訳と心内語のイタリック体をあげている。本稿においては、物議を醸す和歌英訳については、今回は措いておく。これは和歌英訳を専門とする方々に委ねたい。ともあれ、当該覚え書きを瞥見するだけでも、問題点がどの辺にあるのか、翻訳に詳しい方には容易に想像が付くのではないであろうか。次にそれぞれの問題点について、見ていくこととする。

❀ 2. ウォッシュバーン訳問題点の諸相

イ. 心内語のイタリック体

まずは、氏自身も「物議を醸す」かもしれないと、十分に意識しておられる心の言葉をイタリック体に行っていることを見てみよう。今更強調するまでもなく、源氏物語の文章は、どこからどこまでが心の言葉なのか、判別が難しいものが多い。そこに敢えて区切りをつけて、どこからどこまでが誰の言葉なのか決定してしまうことによって、たしかに文意ははっきりするであろうが原典が持つ大きな特徴と言える曖昧性が完璧に消えてしまう。つまりウォッシュバーン訳は、イタリック体を使って物理的にしかも無理矢理にその境界線を作ることによって、解釈に錯誤を引き起こし、それをよしとして開き直っている、ということになってしまう。これは文学の翻訳として、大きく後退していると言わざるを得ないであろう。次にそのような例を一例だけ挙げておく。「桐壺」の巻から、帝が靱負命婦を桐壺更衣の母の家に使いに出した後、その帝の様子が描かれている場面である。原文は次のように始まっている。

夕月夜のおかしきほとにいだしたてさせ給て、やがてながめ
おはします。かうやうの折は御あそびなどせさせ給しに、心こ
となる物のねをかきならしはかなくきこえいづる事の葉も人よ

りはことなりしけはひかたちのおもかげにつとそひておぼさ
る、にも闇の現には猶おとりけり。(11、下線緑川)⁹

現代語訳は次のようにある。

夕月の美しいころに、帝は命婦を出立させられて、そのままの思い
に沈んでおいでです。このような風情ある折には、管弦のお遊びな
どをお催しになりましたが、更衣はことに優れた琴の音などをかき
鳴らされ、何となく申しあげるお言葉も、ほかの方よりは格別でお
いであつたあのご様子やご容貌が、幻影となつてはぴったりと寄
り添っているように、帝はお思いあそばすのですが、それもやはり、
闇の現つにも及ばないことでした¹⁰。(1-16、下線緑川)

ウオッシュバーン訳は上の原文及び現代語訳の下線部を次のように、帝
の心の言葉として訳す。

The moon that night was exquisite, and, having sent the woman
on her way, His Majesty was soon lost in a reverie. He had always
arranged for some form of entertainment with music and poetry
on just such spectacular evenings as this. He conjured phantom
images of playing the koto together with his lost love and recalled
the special feeling and artistry of her performance. He remembered
her way of speaking, so seemingly natural and unforced, and her
looks and bearing, so superior to the others. These images clung
to him, bringing to mind the old verse that claimed reality in the

9 『源氏物語』の引用は『源氏物語大成』による。句読点、濁点を施し、私に
仮名を漢字に変えたところがある。踊りは開いた。下線緑川。括弧内に頁番号を
付した。

10 現代語訳は特に明記し無い場合は、すべて中野幸一訳『正訳源氏物語』(勉
誠出版、2015-2016、第5巻まで刊行済み)に拠る。下線緑川。括弧内に巻番号とペー
ジ数を記した。

darkness was no better than dreams. How wrong that poet was, he thought. There is no substitute for her real presence here in the dark. (p. 8 波線／下線緑川)

今、論の便宜上、英訳下線部イタリック体にしてあるところを中心に直訳しておく。『あの歌人はなんと間違っていたことか』と帝は思った。『闇の中には生きた彼女の姿にかわるものなどありはしない』

原文にしろ、現代日本語訳にしろ、帝の心の思いはウォッシュバーン訳のようなものではないし、むしろ「闇の現」の部分は、帝の心の思いであるとは取りにくい。それは、現代語訳を参照しても何うことが出来よう。ここは、周知のとおり、「うばたまの闇の現はさだかなる夢にくらもまさらざりけり」（古今 読み人知らず 647）が引かれているのであるが、最も重要なことは、「闇の現には猶おとりけり」という部分は、語り手の言葉である度合い（語り手の介入の程度）がとても高く感じられる一文である、という事である。当該英訳では、この語り手の姿が消えてしまっている。引用した現代語訳は早稲田大学名誉教授中野幸一氏による現代語訳であるが、氏は特に語り手の語り口を現代語訳に遺すことに腐心したそうである。今更強調するまでもなく『源氏物語』には語り手がいるのである。これは、この物語を書いたと言われる紫式部その人の声ではなく、紫式部が作り上げた登場人物の一人の声であるが、その姿は見えるようでもあり、見えないようでもある、非常におぼめかされた存在であり、その存在こそが『源氏物語』の文体を特徴付けているもののひとつでもある。それを犠牲にしてまで、これを帝の心の思いとする必要性はないし、当該英訳のように訳されていると、原文をゆがめているとしか言えないであろう。これで読者には何がわかりやすくなったのであろうか。ここには昔の歌が引かれている表現があって、そのことを含意して訳した、とでも主張したいのであろうか。

ロ．説明文の付加

先にウォッシュバーンの「翻訳についての覚え書き」で、浮かび上がってくるキーワードについて触れたが、そこに「説明」という言葉があった。翻訳にはある程度の解釈が混じり、原文の言葉を補うことは起こりえることである。それが洋の東西という大きく異なる文化圏を背景とする言語の翻訳においては、なおさら必要不可欠なものとなるであろうし、ましてや『源氏物語』は一千年の歴史を持つ古典作品であるので古典についての共通認識の磁場を持ち得ない現代人を相手の場合、翻訳者が多くの工夫を強いられるのは想像に難くない。ウォッシュバーンは「受け入れやすさや明確さ」を重んじたため説明文を本文に入れたと言う。どの範囲までならば、文学としての許容範囲たり得るのか、翻訳は解説書になってしまってもよい物なのか。「葵」の巻の例を引いてみたい。

まことやかの六条のみやす所の御はらの前坊のひめ君さい宮に
る給にしかば、大将の御心ばへもいとたのもしげなきを、をさ
なき御有さまのうしろめたさにことつけて下りやしなましと、
かねてよりおぼしけり。(283)。

現代語訳は同じく、『正訳源氏物語』から引いておく。

それはそうと、あの六条御息所のお生みになった前東宮の姫君が、
斎宮におなりになりましたので、御息は、源氏の大將の君のお気持ち
も全く頼りになりませんし、姫君の幼いご様子が気がかりなことを
口実にして、いっそご自分も伊勢へ下ってしまおうかと、前々か
らお考えになっておられたのでした。(2-135)

そしてこのウォッシュバーン訳が、以下である。原文を、相当する英訳の語句の上に記し、最後にワード数も付した。

^ま ^こ ^と ^や
At this point I must bring up. At the time Emperor Suzaku ascended
the throne, an imperial princess was appointed as the new High
^斎 Priestess for the ^宮 Imperia at Ise. The mother of this princess was
^か ^の ^六 ^条 ^御 ^息 ^所
the lady at Rokujō—the woman Genji had long been visiting
discreetly—while the father was an ^前 ^坊 imperial prince who had
actually been ahead of Suzaku in the line of succession, but had
died before he could take the throne. Bsecause the Princess was
appointed High Princess under these circumstances, the lady at
Rokujō, who no longer had any confidence in the reliability of
^{頼もしげなき}
Genji's feelings, was greatly worried about her daughter's future.
The girl was, after all, only thirteen and would be alone in Ise. Thus,
^か ^ね ^て ^よ ^り ^思 ^し ^け ^り ^幼 ^き ^御 ^{あり} ^{さま} ^の
the lady at Rokujō had for some time been giving seri to leaving
^{うしろ} ^{めた} ^{ざに} ^{こと} ^つ ^{けて} ^下 ^り ^{やし} ^な ^{まし}
the capital herself to the Imperial Shrine. (pp. 181–182) 146
ワード

以下は、同じ部分のタイラー訳である。原文の「まことや」に相当するのは冒頭の Oh yes である。ワード数も最後に付した。

Oh yes, the late Heir Apparent's daughter by the Rokujō Haven had
been named High Priestess of Ise, and her mother, who doubted
Genji's devotion, had quickly invoked concern over her daughter's
youth as a reason for considering going down to Ise herself. (p.
165) 43 ワード

ちなみに、いま引用はしないが、同じ部分の他の英訳を見てみると、比較的翻訳文が長いとされるウェイリー訳は、66 ワード (p.154)、サイデンスティッカー訳は 60 ワード (p.144) であるので、ウォッシュバーン訳がどれほど破格的な分量の説明を加えているかということが明確にわかるのではなかろうか。これは依然として文学の翻訳なのであろうか。読者にわかりやすい事を優先して、このような冗長な文章になってしま

うのなら、読者は何のために世界に名だたる『源氏物語』を読むのであろうか、いっそ解説書を読む方が良いでしょう。例えば当該引用部では、六条の夫であった前坊の詳しい説明が何故ここにこのような形で挿入されなければならないのであろうか。これはもはや『源氏物語』の英訳ではなく、『源氏物語』を解説した英語による駄文と批判されても仕様がなとさえ言えはしまいか。

次に、先に見た心の言葉の英訳とも幾分重複するところがあるのだが、草子地の当該英訳における処理について取り上げる。

ハ. 草子地

従来草子地の指摘がある文章は、語り手の介入の度合いが高く、かなりはっきりと語り手の言葉だと思われる部分である。そして草子地はもちろん語り手の一人称語りであるので、英訳の場合一人称主語 I を使わなければならない場合もある。ただし、その度が過ぎると『源氏物語』の控えめな語り手の趣が壊されてしまう。先に『源氏物語』の語り手は見えるようでもあり、見えないようでもあると述べた、その点、この語り手は物語学的に言う overt（開かれた）語り手でもなく、covert（閉じられた）語り手でもない、丁度その中間に位置すると言えるような語り手なのである。この控えめな語り手の姿を「帚木」「賢木」からの例で見てみる。各例共に、原文、ウォッシュバーン訳、タイラー訳と並べてあげておく。

- a) 左むまのかみ、藤式部丞、御物いみにこもらむとてまいれり。世のすきものにてものよくいひとをれるを、中将まちとりて、このしなじなをわきまへ定めあらそふ。いと聞きにくきことおほかりなり。 (39)

以下、下線部分英訳だけを引く。

ウォッシュバーン訳：Their subsequent conversation touched

on topics of a highly questionable and even slightly disreputable nature. (p. 25) 直訳：会話はその後極めて疑わしくいかがわしい質の内容に抵触していった。

タイラー訳：They told some astonishing stories. (p. 23) 直訳：彼らは驚くような話を語った。

b) みこたちも、さまざまのほうもちささげてめぐり給ふに、大将殿の御よういなど、なを似るものなし。つねにおなじ事のやうなれど、みたてまつる度ごとにめづらしからむをばいかがはせむ。 (365)

同じく下線部分の英訳を引く。

ウォッシュバーン訳：I know that I am always praising him this way—saying that he was incomparable, peerless, not of this world—but every time I observed him, he really did look amazingly stylish and charming. So what am I supposed to do? (p. 240) 直訳：私がいつも彼をこんな風に—この世で、彼に並ぶ者はない、比類ないなどとほめたたえているということは、私は承知しています。でも私が彼を観察するときにはいつも、彼は驚くほど素敵で魅力的だったんです。だから私は一体どうしたらいいのでしょうか。

タイラー訳：Perhaps I seem only to repeat the same praises about him, but I cannot help it, because he was a wonder to behold whenever one had the good fortune to do so. (p. 211) 直訳：おそらく私は彼を褒めるのにいつも同じ言い回しをくりかえしているかもしれない、でもそれはわたしにはどうしようもない、というのも彼は、幸運にも私が彼の姿をみることができると、驚き以外のなにものでもなかった。

それぞれの引用文について詳しくみてはいかないが、ウォッシュバーン訳においては、a)「帚木」の「いと聞きにくきこと多かり」にせよ、b)

「賢木」の「いかがはせむ」にせよ、語り手の言葉の英訳ではなく、説明文である。「賢木」においては、無論一人称語り手の姿が見えてくるとはいえ、それでも So what am I supposed to do? (だから私は一体どうしたらいいのでしょうか) は、あまりにも行き過ぎているのではないであろうか。文体の品格が保たれるようにするのも、翻訳者の仕事であろう。わかりにくく、遠回しな文体に触れ、そのような世界を経験するのも、古典の世界に足を踏み入れる読者の前に広がる文学宇宙を探索することであり、異文化の体験でもある。何もかもが現代的にわかりやすく、明確になることは、おそらく一級の文学作品に関しては、決して重要なことではない。

二. 古典知識欠如による間違い

問題点の最後として、翻訳者が、これまでの既存の英訳をきちんと参照していたなら、また数多ある日本語の参考文献、現代語訳を参照したなら、起こりえないはずの間違いだとおもわれる間違いを犯しているところを検証してみる。このような間違いの根底には、参考文献を渉猟して解釈を決定すると言うよりは、現代人である翻訳者の常識とか理解の範囲内で勝手に判断して翻訳しているとしか思われえない間違いだと言える。古典作品そのものや、その現代とは大きく異なる慣習、儀礼などを尊ぶ姿勢の欠如が見えるとさえ言える。「桐壺」巻の有名な場面、鞍負命婦が更衣母を訪ねる場面である。

ややためらひて、おほせごとと伝へきこゆ。しばしは夢かとのみ
たどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく
たへがたきは、いかにすべきわざにかとも、とひあはすべき人
だになきを、しのびては参り給なむや。わか宮のいとおぼつか
なく、つゆけき中にすぐしたまふも、心くるしう思さるるを、
とくまいり給へ、などはかばかしうものたまはせやらず、むせ
かへらせたまひつつ、かつは人も心よはくみたてまつるらむと、

思しつつまぬにしもあらぬ御けしきの心くるしさに、うけたまはりはてぬやうにてなむ、まかで侍ぬる、とて、御ふみたてまつる。目もみえ侍らぬに、かくかしこきおほせ事をひかりにてなん、とてみ給。(12)

ウォッシュバーン訳は、次のようにある。

She gathered her composure, then read the message the Emperor had given her:

For a time my thoughts and emotions (中略) in dew and tears. “The Emperor’s voice was so choked with grief,” Myōbu added, “that he could not speak clearly. (中略) It was painful to see him in such a state, and I left without listening to everything he told me.”

She handed the letter over to the grandmother, who replied, “Though I am blinded by the darkness of grief, the gracious light of the Emperor allows me to read his words.” The old woman looked at the note (pp. 8-9、傍線緑川)

問題点は、下線部分であるが、靱負命婦は帝の仰せごとを「読み上げた」(read) としていることであり、更に次の下線部分にあるように、その仰せごとが書かれた「手紙」を「手渡した」(handed the letter) とある点である。

次に同じ部分のタイラー訳をみてみたい。

Then, after composing herself a little, she delivered His Majesty’s message.

(この部分に、タイラー訳では脚注があり、彼女〔靱負命婦〕は帝の自身の言葉を口頭で伝えた。She speaks in the Emperor’s own words・・・[以下略] としている)。タイラー訳は続けて、次のよ

うになっている。

“For a time I was sure that I must be dreaming, (中略) Please come soon.”

“He kept breaking into tears and never really managed to finish (中略) and I felt so much for him that I hurried off to you before I had actually heard all he had to say.” Then she gave her His Majesty’s letter.

“Though tears darken my eyes,” the lady said, “by the light of his most wise and gracious words...” And she began to read. (p. 8、傍線緑川)

梶負命婦は帝の仰せごとを口頭で伝え、更に別に書面にしたためられた(口頭での仰せごととは別な物であり、歌を含む)手紙を渡したのである。帝の使者が帝の言葉をそのまま口頭で伝えることは儀礼としてあることで、ウォッシュバーン訳において、これがいつどのように書面に書かれた言葉になってしまったのか、納得できない。

他の英訳もここは帝の言葉を声に出して伝えているという解釈で訳していてこの使者の儀礼についての誤解は全くない。末松訳では、A moment’s hesitation, and she proceeded to deliver the Imperial message:—“The Emperor commanded me to say that ….” (p. 5)、ウェイリー訳では、Then after a little hesitation she repeated the Emperor’s message: “For a while I searched in the darkness of my mind, (p.11)、サイデンスティッカー訳では、After a pause she delivered a message from the emperor. マッカラ訳でも、After a brief pause, she delivered the emperor’s message. “His Majesty said to tell you, ….” (p.29) である。

先行する英訳を参照するのは必要最低限の事ではないであろうか。あるいは、何らかのはっきりした根拠に基づいて、新しい訳において、新し

い解釈を提示するならば、それなりのはっきりとした脚注が欲しいところである。ウォッシュバーン氏は更に詳しい脚注編のようなエディションを用意しているとも聞かすが、本文を大きくゆがめてまで多くの解説を挿入している氏の英訳において、更にどのような解説の一書が必要なのであろうか。まずは、宮廷儀式などの古典貴族社会の慣例などをしっかりと学習して翻訳して欲しいものである。特に、帚木の巻冒頭の有名な草子地に出てくる平安文学の世界では、あまりにもよく知られている散逸物語の主人公「交野の少将」をキャプテン・タカノ Captain Takano と訳していることは、ある『源氏物語』学者を憤らせさえもした。現代の日本の常識的な名前にしてしまっていることなどから類推するに、持てる日本語能力でかなり安易に古典の文章に取り組んでしまっているのではないと思われる。ミスはどのような翻訳者も犯す。それはしかるべき機会があれば、訂正しなければならないものであろうし、訂正できるものでもあるが、過去の優れた英訳があつて、なお、このようなミスがあるというのは、翻訳者の姿勢を疑ってしまわざるを得ないのである。

❀ おわりに

日本語が出来れば、誰でも古典の翻訳が出来るわけではない。古典には特別な知識が必要であり、『源氏物語』はそれこそ「源氏学」という学の歴史の重みもある。近年日本語に堪能というだけで、簡単に古典和歌などの英訳を出版する（しかも一流出版社からの出版）例などが見られるようになっているが、こういう人々はまっさらな、誰も手を付けたことのない古典作品をゼロから翻訳することは、まずないようである。翻訳が乱立してくるようになってきた 21 世紀においては、翻訳の質を見抜くことも必要となってくるかもしれない。中野幸一氏が学者として改めて『源氏物語』の現代語訳に取りかかったのは、学の側からの強い責任感に拠るものだろうと思われる。

ウォッシュバーン訳の問題点を見たが、より大きな問題は、これがノートンというアメリカの巨大教科書、学術書会社から出版されたことであ

る。大きな市場に拡散されてしまうのが、このようなゆがめられた『源氏物語』であることは、ある意味、大変悲しいことである。しかもこのノートン社からは、ワールド・リテラルチャー選集と題する大学生などが世界の文学のさわりを概括的に読む書物が出されており、その2015年版の『源氏物語』はウォッシュバーン訳からの抜粋となっているのである¹¹。「交野の少将」という散逸物語は永遠にキャプテン・タカノとしてウォッシュバーン訳を読む者は記憶していくのであろう。当該訳は貴重な文化の重みと重層性をいともたやすく放棄しているのである。

(早稲田大学 非常勤講師)

11 Selections from *The Tale of Genji*, in Martin Puchner, general editor, *The Norton Anthology of World Literature*, Shorter Third Edition (New York: W. W. Norton, 2015).

スペイン語版・英語版・フランス語版 『伊勢物語』7種における官職名の訳語対照表

雨野 弥生
(あまの やよい)

本稿で示す表は、『伊勢物語』に出現する語彙のうち「大将」「中将」をはじめとする衛府官人および「馬の頭」「大臣」について、7種類の翻訳版の訳語を比較したものである。対象とした翻訳作品は、スペイン語版カベサス訳、ソロモノフ訳、マス訳の3種と、カベサス訳に先行する英語版3種、フランス語版ルノンドー訳である。

表中で比較した資料のデータを、以下に挙げる。スペイン語版『伊勢物語』3種の書誌詳細は、拙稿「スペイン語版『伊勢物語』について」で挙げた¹ので参照されたい。

[スペイン語版]

- ・ Cabezas García, Antonio: *Cantares de Ise (Ise Monogatari)*, Madrid: Hiperión, 1st: 1979
- ・ Cabezas García, Antonio: *Cantares de Ise (Ise Monogatari)*, Madrid: Hiperión, 2ed: 1988
- ・ Solomonoff, Jorge N. : *Cuentos de Ise (Ise Monogatari)*, Barcelona : Paidós, 1980
- ・ Mas López, Jordi: *Cuentos de Ise*, Madrid : Trotta, 2010

1 雨野弥生「スペイン語版『伊勢物語』について」『海外平安文学研究ジャーナル vol. 4.0』pp.37-47. <http://genjiito.org/journals/juornal4/>。なお、科研サイトの「平安文学翻訳史年表」に掲載されていた Merlino 版スペイン語訳は、その後、科研データベースのソースとなった資料の作成元より、現在、該当する本の存在が確認できない旨が科研事務局に伝えられた。そのため、本稿では、スペイン語版『伊勢物語』としてカベサス訳、ソロモノフ訳、マス訳の3種を対象とする。

[英語版]

- ・ Vos, Frits: *A study of the Ise-monogatari, with the text according to the Den-Teika-hippon, and an annotated translation (in two volumes)*, 's-Gravenhage : Mouton & Co., 1957
- ・ McCullough, Helen Craig: *Tales of Ise, Lyrical Episodes from Tenth-Century Japan*, Tokyo: University of Tokyo Press, 1968
- ・ Harries, Henry. Jay: *The Tales of Ise*, Rutland, Vt.: Charles E. Tuttle Company, 1972

[フランス語版]

- ・ Renondeau, Gaston: *Contes d'Ise*, [Paris]: Gallimard, 1969

表中、スペイン語訳の筆頭に挙げたカベサス訳は、同志社大学蔵「初版」（1979年）と雨野蔵書「2版」（1988年）および東京・市ヶ谷にあるセルバンテス文化センター東京のフェデリコ・ガルシア・ロルカ図書館が蔵する「4版」（2009年）とを比較した結果、「初版」と「2版」の間で訳文が大きく変わっていることが分かった（たとえば、和歌の訳が一首丸ごと書き換えられている箇所がある）。今回取り上げる表内では異同がないが、今後、カベサス訳の研究では版ごとの本文異同に注意する必要がある。そのため、本稿では、カベサス訳は「2版」を挙げ、「初版」との異同も表内に示した。（なお、上記の「2版」の訳語は、セルバンテス文化センター東京蔵の「4版」の訳語とも比較したが、該当箇所に異同はない。）

以下に、訳語の比較対照表を示す。『伊勢物語』本文は新編全集を用い、官職名は太字にした。

表1 《大將／中將／六衛府関係》

通し番号	官職	『伊勢物語』 所属 段数	『伊勢物語』本文（新編全集） 物語、 段数	スペイン語版			英語版			フランス語版	
				Cabezas 1988	Cabezas 初版(1979) と2版の異同	Solomonoff 1980	Mas 2010	Vos 1957	McCullough 1968		Harris 1972
1	右近衛大將	77	木の枝につけて、雲の前に立てたれば、山もさらさら前に動きいでなるやうになむ見えける。それを、 右大將 にいませがりける藤原の常行と申すいまそがりて、	General de la Guardia de Palacio, División Derecha	同じ	el general de la Guardia de la Derecha	capitán de la Derecha	the Major Captain of the Inner Palace Guards, Right Division	the Captain of the Right	le général de la Garde de droite	
2	右近衛府	78	むかし、多賀敏子と申す文御おはしましけり。うせたまひて、七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。 右大將 藤原の常行といふ人いまそがりけり。	el general	同じ	el general de la Guardia de la Derecha	capitán de la Derecha	the Major Captain of the Inner Palace Guards, Right Division	a Captain of the Right	le général de la Garde de droite	
3	中近衛府	63	いかにこの在五中將にあはせてしがなと思ふ心あり。	el coronel Zaigo	同じ	el general Zaigo	官職ナシ（人名のみ, Ariwara no Nahira）	the Middle Captain Zaigo	官職ナシ（人名のみ）	général Zaigo	
4	中近衛府	79	これは貞數の親王、侍の人、中將の子となむいひける。	el coronel	同じ	general	Subcapitán	a Middle Captain	the Middle Captain	général	
5	中近衛府	97	むかし、堀河のおほいまうちきみと申す、いまそがりける。四十の賀、九条の家にてせられける日、 中將 なりけるおきな、	un coronel	同じ	comandante de la guardia	un subcapitán de la Guardia	a Middle Captain	Middle Captain	colonel	commandant dans la Garde
6	中近衛府	99	むかし、右近の馬場のむをりの日、むかひに立てたりける時に、女の御の、下藤よりほのかに見えければ、 中將 なりける男のよみてやりける。	coronel	同じ	comandante de la guardia	un subcapitán de la Guardia	a Middle Captain	a certain Middle Captain	the Colonel	commandant dans la garde
7	近衛府	76	二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、 近衛府 にさむらひけるおきな、人人の将なまはるついでに、御重よりたまはりて、よみて奉りける。	la Guardia de Palacio	同じ	la guardia imperial	la guardia imperial	the Headquarters of the Inner Palace Guards	Imperial Guards (officer)	the Guard of the Inner Palace	la garde
8	六衛府の佐	87	それをたよりにて、 衛府 の佐ども集り来にけり。	alférezes del Ejército	同じ	los mayores de la Guardia	suboficiales de la Guardia	Assistant Captains of the Headquarters of the Guards	certain Assistant Guards Commanders	the Palace Guards	majors de la Garde
9	六衛府の督	87	この男のこのかきも 衛府 の督なりけり。	capitán del Ejército	同じ	coronel de la Guardia	coronel de la Guardia	a Captain of the Headquarters of the Guards	a Guards Commander	Captain of the Guard	colonel dans la Garde
10	六衛府の督	87	かの 衛府 の督まづよむ。	官職なし	同じ	el coronel de la Guardia	el comandante de la guardia	That Captain of the Headquarters of the Guards	the Guards Commander	that Captain of the Guard	le colonel de la Garde
11	左兵衛督	101	むかし、 左兵衛 の督なりける在原の行平といふありけり。	capitán del Ejército	同じ	un coronel Militar de la izquierda	un comandante de la Guardia Militar de la izquierda	Captain of the headquarters of the Military Guards, Left Division	the Commander of the Military Guards of the Left	Captain of the Right (Left の誤りか) Division of the Military Guard	un colonel de la Garde militaire de gauche

表2《馬の頭》

通し番号	官職	所属	『伊勢物語』 段数	『伊勢物語』本文（新編全集） 物語	スペイン語版			英語版			フランス語版	
					Cabezas 初版(1979) と2版の異同	Cabezas 1988	Cabezas Solomonoff 1980	Mas 2010	Vos 1957	McCullough 1968		Harris 1972
12	馬の頭	馬の寮	77	調の終るほどに、歌よむ人々を召し集めて、今日のめわりを題にて、暮の心はへある歌奉らせたまふ。右の馬の頭なりけるおきな、目はたがひながらよみける。	同じ	Mayoral de los Establos Imperiales	director caballerizas de la division de la derecha	el responsable de los Establos de la Derecha	the Director of the Bureau of Horses, Right Division	Commander of the Right Horse Bureau	the Captain of the Right of the Imperial Stables	directeur des écuries de la division de droite
13	馬の頭	馬の寮	78	聞きしよりは見るはまさりて、これをたに奉らばするなるべしとて、人々に歌ふませたまふ。右の馬の頭なりける人のをむ、普き舌をきさきて、詩絵のかたにこの歌をつけて奉りける。	同じ	el Mayoral de los Establos Imperiales	el director de las caballerizas de la derecha	la persona que estaba al cargo de los Establos de la Derecha	the Director of the Bureau of Horses, Right Division	the Commander of the Right Horse Bureau	Captain of the Right at the Imperial Stables	le directeur des écuries de droite
14	馬の頭	馬の寮	82	水無瀬といふ所に、営ありけり。年ごとの役の花ざかりには、その営へなむおほしませしける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に奉ておほしませしけり。	同じ	el Mayoral de los Establos Imperiales	el director de las caballerizas de la derecha	el responsable de los Establos de la Derecha	the Director of the Bureau of Horses, Right Division	Commander of the Right Horse Bureau	Captain of the Right in the Imperial Stables	le directeur des écuries de droite
15	馬の頭	馬の寮	82	その木のもとにおりありて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌ふみけり。馬の頭なりける人のよめる。	同じ	el del Mayoral	el director de las caballerizas de la derecha	la persona que estaba al cargo de los Establos de la Derecha	Director of the Bureau of Horses	the Commander of the Right Horse Bureau	the Captain of the Stables	le directeur des écuries de droite
16	馬の頭	馬の寮	82	天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒ある。	同じ	el Mayoral	el director de las caballerizas de la derecha	el responsable de los Establos de la Derecha	the Director of the Bureau of Horses	the Commander of the Right Horse Bureau	this Captain of the Stables	le directeur des écuries de droite
17	馬の頭	馬の寮	82	歌よみて恋はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。	同じ	el Mayoral	el director de las caballerizas	ナン(él)	that Director of the Bureau of Horses	the Commander	the Captain of the Stables	le directeur des écuries
18	馬の頭	馬の寮	82	かくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。	同じ	el Mayoral	el director de las caballerizas	el responsable de los Establos de la Derecha	that Director of the Bureau of Horses	the Commander of the Right Horse Bureau	the Captain of the Stables	le directeur des écuries
19	馬の頭	馬の寮	83	例の狩しにおはします供に、馬の頭なるおきな仕まつれり。	同じ	el Mayoral de los Establos Imperiales	director de las caballerizas de la derecha	un oficial de los Establos de la Derecha	Director of the Bureau of Horses	Commander of the Right Horse Bureau	Captain of the Stables	le directeur des écuries de droite
20	馬の頭	馬の寮	83	この馬の頭、心もとながりて	同じ	el Mayoral	el director de las caballerizas	ナン(él)	This Director of the Bureau of Horses	the Commander	this Captain of the Stables	le directeur des écuries

表3 《大臣／太政大臣》

通し番号	官職	所屬	『伊勢物語』 段数	『伊勢物語』本文（新編全集）	スペイン語版			英語版			フランス語版
					Cabezas 初版(1979) と2版の異同	Solomonoff 1980	Mas 2010	Vos 1957	McCullough 1968	Harris 1972	
21	大臣	太政官	6	仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かた ちのいとめでたきおほしければ、益みて買ひ ていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎 国経の大納言、まだ下屬にて、	ministro Jorikaua	el otodo Horikawa *注では el otodo(titulo honorifico) Horikawa	ナシ（人名のみ、 Mototsune)	the otodo Horikawa	ナシ（人名のみ Mototsune)	the Horikawa Minister	l'otodo Horikawa *注では l'otodo(titre honorifique) Horikawa
			81	むかし、左のおほいまうちぎみ（＝左大臣） いまそがりけり。賀茂河のほとりに、六条わ たりに、意を、	un ministro	un gran ministro de la izquierda	un ministro de la izquierda	a Great Minister of the Left	a certain Minister of the Left	a certain Minister of the Left	un grand ministre de gauche
22	大臣	太政官	97	むかし、堀河のおほいまうちぎみ（＝大臣） と申す、いまそがりけり。	el ministro	un gran ministro	el Ministro	Minister	the Minister of State from Horikawa	a certain Horikawa Minister	un grand ministre
23	大臣	太政官	98	むかし、おほきおほいまうちぎみ（＝太政大 臣）と聞ゆる、おほしけり。	Primer Ministro	el Primer ministro	canciller	the Prime Minister	a certain Chancellor	a certain Grand Prime Minister	le Premier ministre
24	大臣	太政官	101	「ななかくしもよむ」といひければ、「おほき おとど（＝太政大臣）の栄花のさかりにいま そがりて、藤氏の、ことに栄ゆるを思ひてよ める」となむいひける。	el Primer Ministro	el Primer Ministro	翻訳ミスか。 subinspector と あるが、ここでは 左中井良近を指し てしまうため、該 当する語ナシ。	the Prime Minister	the Chancellor	the Grand Prime Minister	Premier ministre
25	大臣	太政官			同じ	同じ					

【補注】 同志社大学蔵「カベサス訳『伊勢物語』初版」について

同志社大学グローバル地域文化学部烏丸書庫には、「大島正氏寄贈」との印が押された、カベサスによるスペイン語訳『伊勢物語』（“*Cantares de Ise*”）の初版（1979 年）が所蔵されている。

稿者・雨野は 2016 年 3 月に、この同志社大学蔵カベサス訳『伊勢物語』“*Cantares de Ise*” 初版を閲覧する機会があった。同本は、その時点ではアンカットのフランス装になっており、全ページにわたって 8 頁ずつ、本の天や小口が輪になっていた（その後、現所蔵者によって、各ページが見られるように切り開かれた）。見返しに、カベサス直筆の献辞および自署がペン書きされている。献辞の日付は 1979 年 7 月 10 日である。

大島正氏は、同志社大学の教員であった。訳者カベサスとのつながりは、以下の通り確認することができる。

1、カベサスによる、石川啄木『一握の砂』スペイン語訳 “*Un puñado de Arena*” 初版の INTRODUCCION（序文）の末尾に、señor Tadasi Osima すなわち大島正氏への謝辞がある。なお、この序は 1976 年 3 月 3 日のもので、『伊勢物語』翻訳の初版（1979 年）よりも先行する。

2、同志社大学には、カベサス訳スペイン語版『伊勢物語』“*Cantares de Ise*” の初版に加えて、同じくカベサス訳のスペイン語版『万葉集』“*Manioshu*” の初版も所蔵されている（グローバル地域文化学部烏丸書庫）。“*Manioshu*” の扉にも、カベサスによる “T. Oshima” への献辞と自署が直筆でペン書きされている。献辞の日付は 1981 年 7 月 6 日である。

また、“*Manioshu*” には、稿者が閲覧した 2016 年 3 月の段階で、カベサスから大島正氏宛の国際航空書簡の封筒および未記載の出席カード 2 枚、美術展の半券 1 枚が間に挟まっている状態であった。

[付記]

スペイン語版『伊勢物語』の閲覧にあたりお世話になった同志社大学グローバル地域文化学部烏丸書庫およびセルバンテス文化センター東京のフェデリコ・ガルシア・ロルカ図書館に、この場を借りてお礼を申し上げます。また、同志社女子大学の吉海直人氏から、英語版『伊勢物語』について、資料提供と貴重なご教示を賜りました。深くお礼を申し上げます。

(株式会社三省堂 辞書出版部・古語辞典編集者)

【付録】

各国語訳「桐壺」 翻訳データ 『源氏物語』（中国語）

各国語訳『源氏物語』『十帖源氏』『桐壺』翻訳データ（中国語）は、87 ページより掲載しています。

(付録) 中国語訳『源氏物語』の書誌について

浅川 槇子
(あさかわ まきこ)

本科研の HP「海外源氏情報」内の『源氏物語』翻訳史年表では、現在 200 件を超える翻訳書籍のデータを公開している。そのうち、57 件が中国語に翻訳された書籍である。中国語訳の『源氏物語』のうち、簡体字によるものは昭和 32（1957）年に銭稻孫が「桐壺」巻を翻訳したのが始まりで、繁体字による翻訳は昭和 48（1973）年に林文月氏が『中外文学』に連載したのが始まりである。この他、豊子愷・林文月・左秀靈・温祖蔭・殷志俊・黄鋒华・夏元清・梁春・姚継中・鄭民欽・宋瑞芬・康景成・彭飛・唐蓓・王烜・钱澄・叶渭渠（葉渭渠／唐月梅との共訳）・李宏伟・喬紅偉など、多数の翻訳者による訳が存在することがわかっている。

今回の『海外平安文学研究ジャーナル 5.0』では、このうち、豊子愷・姚継中・葉渭渠（唐月梅との共訳）が翻訳した、3 種類の『源氏物語』を日本語に訳し戻したデータを付録として掲載した。なお、訳し戻し担当者は、中国語を母語とし、平安文学を専攻する大学院生である。以下に、付録で扱った書誌をあげておく。

(1) 豊子愷訳

書名	源氏物語
出版社	人民文学出版社
刊行年月日	1993 年 11 月 1 刷 ※この本の初版は 1980 年 12 月
底本	底本は明記されていない。ただ、「訳後記」によると、3 種類の現代語訳である、与謝野晶子訳『源氏物語』・谷崎潤一郎訳『源氏物語（旧訳）』・佐成謙太郎『対訳源氏物語』と金子元臣『定本源氏物語新解』も加えた 4 種類が底本ではないかと推測されている。
翻訳範囲	完訳
備考	翻訳開始は昭和 36（1961）年。

(2) 姚継中訳

書名	源氏物語
出版社	江蘇人民出版社
刊行年月日	2011 年 3 月初版、2011 年 3 月 1 刷
底本	阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集 12～17 源氏物語 1～6』(小学館、1970～1976 年)
翻訳範囲	完訳
備考	この他に深圳報実業集団出版社や決定經典书系編委会から出版されている。

(3) 葉渭渠・唐月梅訳

書名	源氏物語
出版社	作家出版社
刊行年月日	2013 年 12 月初版
底本	3 種の底本を使用して日本語から翻訳。
翻訳範囲	完訳
備考	

(国文学研究資料館・研究員)

小見出し	原文（池田本校訂本文・伊藤鉄也作成）	豊子豈訳（庄姫淳）	姚継中訳（庄姫淳）	葉渭渠訳（庄姫淳）
1 ある帝の御代に、身分は高くない更衣への帝寵を女御方は憎悪する「いつれの御時〜」（0001／五㉑／一七）	いつれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。	話によれば以前某の朝の天皇の時代、後宮に妃嬪が甚だ多く、その中に一人の更衣がいます。出身はそれほど高貴ではないですが、皇帝の特別な寵愛を蒙ります。何人か出身の高貴な妃は、宮廷に入った時から自分が非凡だと思い、恩寵はきっと我に在ると思っていました。今では、この更衣の運がよいのを見て、彼女のことを誹り、嫉妬しています。彼女と同じ地位、もしくは出身のより低い更衣は、自分が競争できないと知っていますので、心の中は一層恨みに満ちています。	さて以前某の朝の天皇の時代、後宮に妃嬪が雲集しています。その中にある出身の普通の更衣は、深く皇帝の恩寵を得ています。この更衣は朝夕皇帝に伺候しています。出身の高貴の妃たちはこの情景を見て、自分はもともときっと寵愛をうけるのだと見込んでいましたが、今はこの更衣に奪われたと思い、やきもちを焼き、何時でも何事も彼女のことを誹謗します。出身はこの更衣より低く、或いはこの更衣と地位相当の人たちは、これを見て、自分が寵愛を手に入れることができないと自ら知り、一層恨んで已まなく、所々彼女を非難します。	昔何れの王朝か知りませんが、宮中では天皇に伺候しているたくさんの女御と更衣【1】がいます。その中に一人の更衣は、出身はそれほど高貴ではないが、誰よりも幸運であり、天皇の格別な寵愛を蒙っています。それによってほかの妃たちの嫉妬を招きます。例えば初めから傲慢で身の程を知らなく、自分の出身は高いからと言って、天皇の寵愛を受けるのは自分しかないと思っている妃たちは、天皇が寵愛しているのはあの更衣であることはどうしても思いも及ばないので、この更衣のことを蔑視し恨んでいます；身分はこの更衣と同じぐらい、或は出身のより低い妃たちは、彼女と競争できないと思い、心の中で不安で気が気でないです。
2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる「朝夕の宮仕〜」（0031／五㉔／一七）	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の譏りををもえ憚せたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。	この更衣は朝夕皇帝に伺候しており、ほかの妃たちはこれを見て焼きもちを焼いています。皆の恨みが集中しているせいであろうか、この更衣は病気になる、心に鬱積し、よく実家に養生に帰ります。皇帝はますます彼女のことを離れ難き、彼女を一層寵愛して、皆の非難をも顧みず、只管私情にとらわれています。このような独り占めの寵愛ぶりは、きっと後世の語り草になるでしょう。朝廷の中の高官貴族も、これをよいとせず、皆目を側め、お互い議論しています。	この更衣はこの中に身を置きますと、気持ちは鬱積して晴らし難く、日を経つと病氣となり、しばしば宮廷を出て、実家で暫く養生します。皇帝はこの離別を経て、彼女のことをますます憐れむようになり、皆の非難を顧みず、只管彼女に愛情を注ぎます。このような特別の寵愛は、朝廷の大臣ですら極めて納得できなく、裏でよく私議して言いました。	このように、この更衣は朝夕天皇の傍らに伺候しているので、ほかの妃たちは嫉妬でくらくらして、彼女を恨むことは骨髓を徹すほどです。このように、日が長く経つと、この更衣の心の中に憂いが募って晴らすことできないせいであろうか、彼女は鬱積して病氣になりました。重い病氣ですので、臆病になって堪らなく、やすれば暇を乞って故郷で静かに養生したいと思います。しかし、皇帝は切に彼女のことを愛していますので、いつまでも彼女を離させることができません。皇帝は人たちの非難を顧みず、彼女に対する寵愛は増す一方です。これは世間の慣わしを超えたので、たくさんの女官たちだけでなく、朝廷の公卿大臣、殿上人も彼女に冷たくて、背を向けて彼女を見おろしています。人々は議論百出で、
3 中国の楊貴妃まで引き合いに出される桐壺更衣は、帝の愛情に頼る唐土にも〜」（0073／五㉖／一七）	唐土にも、かかることの起こりにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出づべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類ひなきを頼みにて、まじらひたまふ。	「このような寵愛ぶりは、本当に驚くものですね！唐代はこのようなことがあるため、天の下が大きく乱されていたのです。」このことは漸く国中に伝えられ、世間は怨嗟の声が道に満ちており、これは非常に心配すべきことだと思い、将来は楊貴妃のような甚大な禍を招くかもしれないと言われています。更衣はこの境遇にあり、苦しくて耐え難く、ただ皇帝の深い御恩を蒙ることを頼りにし、びくびくして宮中で暮らしています。	「唐にはこのような専寵があるゆえ、天下を大いに乱し、本当に汗顔の至りでですね！」と。間もなく、このことは宮中から日ごとに天下に伝わり、世間上下の人々はこのことを聞こえ、怨みの声を発して、極めて憂憤であり、楊貴妃が引き起こしたような大きな災難は免れ難いと思います。更衣は深宮にいて、心の中は皇帝の恩寵を頼りとしてなお日を過ごすことができますが、心配の気持ちが抑え難く、大変辛いです。	「そのような寵愛ぶりは、実は眩しくて、正視できないほどですね！昔唐代もこのようなことがあったせいで、社会が動揺して不安定でした」と言っています。 間もなく、このことはつい宮廷の外に伝えられ、人々は心配でたまらなく、このままだと、将来は楊貴妃のようなことになるかもしれないと思っています。このような境遇のなかで、更衣は深く心を痛み、ただ皇帝の厚い寵愛を幸いとし、宮中で慎みながら、心細い日々を過ごしています。
4 桐壺更衣は父大納言の没後に入内し、孤立無援の宮中で心細い生活「父の大納言〜」（0103／五㉙／一八）	父の大納言は亡くなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ華やかなる御方々にもいたう劣らず、何事の気色をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。	この更衣の父親は大納言という官位に就き、すでに世を去りました。母夫人も名門貴族の出身であり、人の娘が両親共に具し、尊くて栄華であるのを見て、わが娘も人に劣らないようにしようと思い、慶事や葬式などの儀式に参加する時は、いつも心を尽くし、あれこれと調度し、人目の前で体裁を整えています。ただ惜しいことに、有力な保護者がいないため、万が一意外が起きましたら、きっと孤立されて助けてくれるものがないだろうと、心の中に悲惨な思いをするのも免れません。	この更衣の亡くなった父親は嘗て朝廷に身を並べ、大納言の位に就いており、母親も名門の後です。さてこの更衣の母親は、夫に亡くされた後、他人の娘は両親共に具し、栄耀栄華を極めているのを見るたびに、悲しくなるのも当然なことであり、いつも自分の娘も立身出世できるようにと祈っています。慶弔に出席するたびに、いつもいろいろと心を遣い、体面を保ち、周到であるように努めます。ただ惜しいことに朝廷には重臣の庇護がなく、心の中では心配の念を抱えがたいです—もしもの事がありましたら、自身を保全する力がなく、惨めな結末を迎えるのが免れ難いとの恐れです。	この更衣の父親は、大納言の官職に就き、早くこの世を去りました；母親は名門名家の出身であり、昔気質の人です。彼女は両親共に具している女性が、世間の名声が高く、立派で裕福な生活をしているのを見ると、自分の娘をもそれに劣らないように過ごさせたいと思っています。儀式を挙げるたびに、彼女は心を尽くして娘のためにとても相応しく装いと調えをします。しかし、到底のことで強い後ろ盾がないため、肝心かなめの時になると、頼りがいがないことで怯えるのも免れ難いです。
5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する「前の世にも〜」（0136／六㉑／一八）	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまつて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御容貌なり。一の御子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君、と世にもてかしづききこゆれど、この御匂ひには並びたまふべくもあらざりければ、大方のやむごとなき御思ひにて、この君をば、私ものに思ほしかしづきたまふこと限りなし。	たぶん宿世因縁であろう、この更衣は容貌が玉の如く、世に並べるもののないほどの皇子を生みました。皇帝は早くこの嬰兒を見たく、宮中に急いで抱いてもらいました。見てみますと、思ったとおり非常に美しくてかわいい皇子でした。 大皇子は右大臣の娘弘徽殿女御の腹であり、高貴な外戚が後ろ盾としていますので、疑うことなく、人々に尊敬されている東宮太子です。しかし、容貌といいましたら、この小皇子ほど美しくありません。従って皇帝は大皇子に対しては普通の寵愛であり、この小皇子を自分私蔵の秘宝と見て、無限な寵愛を与えます。	或は前世の因縁によって決められたことか、この更衣は心配の中に日を送っていますが、容貌明潔で、美しく輝くほど非凡の皇子を産みました。皇帝はこれを知り、急いで人を召してこの子を抱いて宮中に送りました。見てみると、本当に美しくて感じのいい小皇子です。 さて宮中の大皇子は、その母である弘徽殿女御は、当朝の右大臣の娘です。貴顕なる母方の親戚を持ち、皆の恩寵を深く得るはずであり、尊しく東宮の太子として敬われるのも実に当然なことです。しかし、その容貌は小皇子ほど艶めかしくないので、皇帝は彼のことを可愛がっていますが、小皇子に対する私愛とは比べ物にならないです。その小皇子に対しては、皇帝は本当に天上にしかない宝物のように思っています。	前世の縁が深かったゆえであろうか、この更衣は世に並びなく、玉のように純潔な小皇子を産みました。皇帝は早くこの皇子に会いたいと切に思い、いらいらして、早速更衣の実家からこの親子二人を召しました。皇帝はこの皇子を目にかかると、この赤子の容貌が優れて、非凡なものだと思います。第一皇子は右大臣の娘である弘徽殿女御の所生ですが、堅い外戚の後ろ盾がいて、疑いもなく間もなく皇太子として立てられ、世の人に尊敬されます。ただ容貌について言えば、大皇子はこの綺麗で美しい小皇子とは比べられないです。従って、皇帝は大皇子に対しては表面的な慈愛に止まり、この小皇子を個人秘蔵の宝物と見て無限に寵愛しています。

<p>6帝は桐壺更衣を厚遇し、弘徽殿女御は我が皇子の立坊に疑いを抱く</p> <p>「はじめより〜」(0184／六㉗／一九)</p>	<p>はじめより、おしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることの節々には、まづ参上らせたまふ、ある時には大殿籠り過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなされたまひしほどに、おのづから軽きかたにも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子のあたまふべきなめり、と一の御子の女御はおぼし疑へり。</p>	<p>小皇子の母親は更衣であり、身分により、固より普通の下級女官のように、皇帝の日常の暮らしに伺候する必要はないです。彼女の地位は普通ではなく、人柄も高貴です。しかし、皇帝は彼女を度の過ぎるほど寵愛し、道理に通わず、只管彼女を傍に住ませ、片時も離れません。結局宴会およびほかの盛会佳節に逢うたびに、いつも一番先にこの更衣を召します。皇帝が起きるのが遅くなる時もあれば、その時は一日中この更衣を傍に置かせ、彼女を自分の局に帰らせません。このように夜昼伺候しているのは、更衣の身分から言えば、却って軽々しいことになります。小皇子が生まれた後、皇帝は更衣のことを尤も重視しています。これによって、大皇子の母親である弘徽殿女御は疑いを抱いています。彼女は、この小皇子は太子として立てられるかも知れないと思います。</p>	<p>小皇子の母親である更衣は、出身は普通でなく、人格も高尚であり、一般の下級の女官は比べ物にならないですので、当然のことに頗る皇帝の愛護を得ています。皇帝は彼女を愛しいものとして愛して、只管彼女を側に留めさせ、伺候させます。宴楽の時は左右を離れさせないのと言うまでもないです。偶に朝起きるのが遅くなりますが、いっそのこと彼女を終日側に伺候させ、宮廷に返さないです。これは更衣の身分から言っでは、適切ではないようです。また、この小皇子を産んだ後、皇帝の恩寵は日ごとに増すばかりであり、大皇子の母である弘徽殿女御はそれを疑って気兼ねして已まないです―このままだと、恐らく皇帝はこの小皇子を太子として立てるのではないかと、と。</p>	<p>この小皇子の母親である更衣は、もとより皇帝の傍らに宿直をし、皇帝の日常生活に伺候するような身分ではないです。また、実は彼女は貴人のような気品を持ち、さらに皇帝が彼女に対する格別な寵愛を加え、何事も構わず彼女を傍らにと留めさせたいですので、何か遊園や管弦の盛会がある時、あるいは何か面白い集いをする時、皇帝が初めて召す人はこの更衣になります。皇帝は朝遅く起きる場合もありますが、その日は更衣を傍らに留めさせ、彼女を自分の独立している壺に帰らせないです。このように、更衣の振る舞いは人から見れば軽率な嫌いがあるのも当然なことです。</p> <p>しかし、この小皇子が誕生した後、皇帝はいつものやり方を変えました。これによって大皇子の母親である弘徽殿女御は疑いを起し、「ひょっとしたら、この小皇子は皇太子として立てられるかもしれませんね」と思います。</p>
<p>7帝は弘徽殿女御を氣遣うも桐壺更衣を寵愛し、更衣の気苦勞は増す</p> <p>「人より先に〜」(0248／六㉓／一九)</p>	<p>人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほ煩はしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰を頼みきこえながら、おとしめ、疵を求めたまふ人は多く、我が身はか弱くものはかなきありさにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。</p>	<p>弘徽殿女御が一番先に入内したので、皇帝が彼女を重視するのは、普通の妃が比べられないほどです。それに加え、彼女はすでに皇子と皇女を産みました。従って、彼女に疑われることだけは、皇帝を悩ませ、不安の念を抱かせる。</p> <p>更衣は皇帝の深い恩寵を蒙っているが、彼女のことを賤しめ、謗る人も少なくありません。彼女は体が弱く、外戚と後ろ盾がないので、皇帝が彼女のことを寵愛するほど、彼女は心配して恐れるのです。</p>	<p>弘徽殿女御は入内してから長く経っており、また皇子と皇女を産みしたので、皇帝は彼女を寵愛するのは、当然普通のものではないです。彼女の心の中の疑いと気兼ねは、皇帝に憂いの思いをさせ、皇帝は悶々として、心掛けです。あまりに寵愛しますと、誹謗もそれについて来ます。この更衣は皇帝の寵愛を得ていますが、弱くて病気がちです。宮中には強力な外戚を後ろ盾としていなく、皇帝が彼女に対するあまりの恩寵は、却って時々彼女を悩ませます。</p>	<p>ですが、何といっても、この女御はほかの女御や更衣より先に正式的に入内して、また最も皇帝に大切にされており、皇帝との間大皇子と皇女を産みしたので、この女御に嫉妬してくくらさせるのは、皇帝にとっては都合のよくないことです。また、この女御にこのような嫌な思いをさせるのも不憚なことです。</p> <p>さて更衣は皇帝の恩寵を蒙り、畏まりながらこの寵愛を自分の人生の唯一の当てにしています。しかし、背後で彼女の悪口を言い、彼女にけちをつけたい人は、たくさんいます。彼女の体が弱く、実家も実力がないので、皇帝に寵愛されるほど、他人の嫉妬による被害を受けないために心を砕いています。</p>
<p>8更衣の局は東北隅の淑景舎で、参上の折毎に酷い嫌がらせを受ける「御局は桐壺〜」(0288／七㉓／二〇)</p>	<p>御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾堪へがたく、まさなきこともあり。また、ある時には、えさらめ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心を合はせて、はしためわづらはせたまふ時も多かり。</p>	<p>彼女が住んでいる宮殿は桐壺と言います。皇帝が常に住んでいる清涼殿までは、多くの妃の宮殿を通らなければなりません。彼女が頻りに行ったり来たりしていますので、ほかの妃たちがそれを見て、不快に思うのも当然なことでしょう。ある時、更衣の行き来があまりにも頻繁になりますと、彼女たちは悪戯をし、板橋や廊下に汚い物を散らかし、桐壺更衣を送迎する宮女たちの衣の裾を汚くさせます。ある時、彼女たちはお互い約束し、桐壺更衣が通らなければならない廊下の両端を閉ざし、彼女に面倒をかけ、困らせます。</p>	<p>彼女が住んでいる桐壺宮と、皇帝が常に住んでいる清涼殿との間には、多くの妃の宮殿が相隔てています。更衣が時々その間を行き来しているので、その妃たちは自然に目障りとし、時には悪意的に彼女に悪戯をし、彼女が必ず通る板橋や廊下に汚い物を置き、彼女を送迎する侍女たちの衣を汚れます；あるいはお互いに約束をし、更衣が通る廊下を閉ざし、彼女を行き詰まらせ、困らせます。</p>	<p>更衣が住んでいる独立な宮殿は、桐壺院と言います。皇帝は毎回お出でになる時、必ず多くの妃たちの壺を通ります。このように、頻繁になりますと、ほかの妃たちがこの上なく恨んでいるのは言うまでもないです。また、更衣は皇帝の住んでいる清涼殿に行く回数が多くなりますと、それは妃たちの嫉妬を招き、彼女たちはいつも更衣の通っている板橋あるいは廊下に、汚い物を散らかし、桐壺更衣を送迎する侍女たちの服の裾を汚れてぐしゃぐしゃにさせます。ある時、彼女たちは馴れ合いして、よく桐壺更衣の必ず通る宮殿の廊下の両端の門を閉ざし、更衣に茫然させ、仕方なくさせ、或は彼女に辱しめに合わせます。</p>
<p>9帝は桐壺更衣への虐待を不憚に思い、局を淑景舎から後涼殿に移す「ことにふれ〜」(0344／七㉑／二〇)</p>	<p>ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局にたまはす。その恨みましてやらむ方なし。</p>	<p>このような類のことは、続々と現われてきかないので、桐壺更衣は大変辛くたまらないです。皇帝がこれを見て、ますます彼女のことを憐れみ、清涼殿の後ろにある後涼殿のある更衣を別の所に引越させ、その部屋を桐壺更衣の宿直する時の休憩室とします。その他所に引越した更衣が一層恨みを抱くことはいうまでもないです。</p>	<p>このような悪戯は、本当に更衣にいっぱい苦しい目を合わせます。皇帝はそれを聞き、一層彼女を憐れんでではなく、清涼殿の後ろの後涼殿に住んでいる更衣を他所に引越させ、其処を桐壺更衣の宿直の時の住まいにします。その引越させられた更衣は、桐壺更衣に対する恨みは、普通のものではないです。</p>	<p>このような悪戯は続いていますので、更衣は苦しめられ、愛いの極まりで、気持ちはとても晴れないです。皇帝はこれを見て益々彼女のことを憐れみ、清涼殿にすぐ近くにある後涼殿のある更衣を他のところに引越させることを命じ、この後涼殿を空きにして、皇帝が更衣に賜る独立な宮殿とします。他所のところに追い出されたこの更衣は、一層この桐壺更衣を憎むようになりました。</p>
<p>10若宮は三歳で袴着の儀式をし、成長と共に憎しみが賞賛へと変わる「この御子三つ〜」(0378／七㉒／二一)</p>	<p>この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の譏りのみ多かれど、この御子のおよすけもおはする御容貌、心ばへ、ありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかると人も世に出でおはするものなりけり、とあさましきまで目を驚かしたまふ。</p>	<p>小皇子が三歳になる年に、裙を穿かせる儀式を行います。その体裁は大皇子の時に劣りません。内蔵寮と納殿の物資が取り尽くされ、非常な立派な儀式でした。これも世間にいろいろな非難を浴びます。やがてこの小皇子の容貌が美しく、振る舞いも優美であるのを見て、なるほど世に並べ無いほどの玉のような人であると、誰しも敢えて彼を嫉妬するようなことはしません。見聞が豊かで知識の広い人ですら、彼を見ては驚き、目を見張り、嘆いて言いました。「この神仙のような人もこの塵の世に降りて来たものですね!」、と。</p>	<p>さてあの小皇子の年は三歳に近く、道理上裙を穿かせる儀式を行う年になります。内蔵寮と納殿はそのある全てを出し尽くし、見栄えを張り尽し、その盛大さは少しも大皇子以前の儀式に劣らないです。皆はこれを見て、一斉に非難するのも当然なことです。しかし、小皇子の絶世な容姿を目にすると、その非凡な容姿に、全ての疑いと非難は俄かに消えました。博識の人ですら、これを見ると、驚いて目を見張り、「この世にはどうしてこれほど神仙のような人物が存在するのか」と言っています。</p>	<p>さて、小皇子三歳の時に、裙褲を穿く儀式を挙げました。その盛大さは、以前大皇子が挙げた儀式に劣らないです。内蔵寮、納殿に納めている金銀財宝、祭祀の服装と物品など、全部取り出して並べて、儀式の盛大さは並べないぐらいですので、世間から多くの避難を受けます。しかし、実際に、人々はこの小皇子が成長するほどにつれ、容貌端正で、意気軒昂たるになったのを見て、彼が非凡で世にまれな宝のような人物だと思うようになる時、その嫉妬の気持ちも漸くおさめて、続けることができなくなりました。理の弁える人たちは、思わず目を見張って驚き、「稀世の宝物のような人もこの人の世に降りてきたものですね!」と言います。</p>

11 若宮が三歳の夏に桐壺更衣は重病になり、御子を宮中に残して退出「その年の夏〜」(0439／八②／二一)	その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、「なほ、しばし試みよ」 とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそ、と心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。	この年の夏、小皇子の母親である桐壺更衣は体調が良くなり感じ、暇を乞い、実家に療養したいと思いますが、皇帝はいつもそれを許しません。この更衣がここ数年病気がちであるのを見慣れていますので、皇帝は、「暫くここで養生してから様子を見ましょう」と言いました。しかし、その間、更衣の病気が日一日重くなるばかりで、五六日過ぎたばかりで、体が大分衰弱してきました。更衣の母親である太君は泣き泣き皇帝に暇を乞い、やっと彼女を宮廷から退出するのが許されました。このような時にしても、意外が起こり、驚いて生き恥をするのを用心しなければなりません。ですので、皇子を宮中に留めさせ、更衣一人だけ密かに退出することにします。	この夏、桐壺更衣は具合が優れず、実家に戻り、養生したいと思います。皇帝は離れるのを忍ばず、頑として許しません。この更衣は近年弱くて病気がちでいるのは、皇帝はすでに慣れていますので、即ち彼女に、「暫く宮中で養生してから、様子を見てまた決めましょう」と言いました。しかし、思わずその間、更衣の病気は一層重くなり、五六日の間、艶めかしい色と玉のような体は皆衰えて柳のように痩せてしまい、甚だ人の心を痛めます。母太君は御前で泣いて暇を乞います。皇帝はこの様子を見て、強いて留めることもよくないと思い、ようやく彼女が宮中から出ることを許しました。	この夏、小皇子の母である桐壺更衣は何故かわからなく、いつも気分が優れなく、暇を乞い実家に帰りたいと思いますが、皇帝の許しを得ることができません。彼女は近年病気がちですので、皇帝はそれを常のこととして慣れて、「ここでもう少し養生してから様子を見ましょう」と言っているだけです。しかし、日が増すほどに、桐壺更衣の病気が重くなり、五六日の間で、すっかり痩せてしまい、非常に衰えたように見えます。桐壺更衣の母は泣きながら、皇帝に休みを許すように奏上します。この時になると、皇帝はやっと桐壺更衣が宮廷から出ることを許しました。このような場合でも、桐壺更衣は、人々はまた何かの手段を以て自分を辱しめるかもしれないと心配しています。これで、彼女は小皇子を宮中に留めるようにし、自分一人で密かに宮中から出ることを決めました。
12 帝は絶え入らんばかりの桐壺更衣をご覧になるにつけ途方に暮れる「限りあれば〜」(0488／八⑦／二二)	限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いと匂ひやかにうつくしげなる人の、いたう面憂せて、いとあはれものを思ひしみながら、言に出でても聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを、御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはすれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどいもとたゆげにて、いとどなよなよと、我かの気色にて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。	このような事態で、皇帝も一途に引きとどめることができなく、ただ身分の関係で、自ら宮廷から出るのを見送ることができないのを心の中に言い難い痛みを抱えています。更衣は本来花のような美しい人でありましたが、この時はすでに憔悴して、万感胸に迫りながら、それを言い出す力無く、息が絶え絶えな様子です。皇帝はこの様子を見て、茫然として迷い、泣きながら旧情を述べ、誓いを繰り返します。しかし、更衣は答えられなく、両目がぼんやりしており、体も動けなくなり、朦朧として横になっています。皇帝は困り果てて仕方がなく、	しかし、それにしても、皇帝は疑って意外が起こるのを恐れ、他人に驚かれて賤しめられないために、更衣一人で密やかに出て、小皇子を宮中に留めることを決めました。身分の関係で、皇帝は自ら宮中から見送ることができなく、心の中で痛くて不安であるのも当然なことです。この更衣は重い病に罹り、花のような容貌が憔悴し、よろずの言葉がありますが、ただ恨むことにそれを口にする力がすこしも持っていないく、息が絶え絶えで、切れそうです。皇帝は彼女を目にして、茫然として仕方がなく、ただ涙を飲んで鳴咽して、度々昔の情けを語り、再びお互い誘い合って約束した誓いを言い出します。この時、更衣はへなへなになり、横になって話すこともできなく、両目に暗くて元気がないです。可哀想なことに皇帝はそれを見ているだけでどうすることもできなく、	何事にも限度がありますので、皇帝は桐壺更衣が実家に戻ることを止めることはできません。特に身分の関係で、自ら彼女を見送ることもできないので、気持ちはどうしてもふさぎ込むようになり、よろずに悲しく思います。桐壺更衣は普段はみずみずしく可愛い絶代の美人ですが、この時は非常に憔悴してしまい、いろいろな感想を抱き、心の中によろずの言葉がありながら、皇帝にそれを申し上げることはできません。皇帝は彼女の息が絶え絶えて悲しげなさまを目にしますと、よろずに彼女を憐れみ、茫然としてなす術を知らないです。皇帝は泣きながらいろいろな保証する言葉を言いかけますが、桐壺更衣はこの時すでに答える力もなく、両目を光を失い、疲れてたまらなくて、体に力がなく、うとうとと眠気を催し、危篤に陥るように横たわっています。皇帝は一時なす術を知らなく、
13 輦車の宣旨を受けた桐壺更衣は、帝に歌を残して里邸へと退出する「輦車の宣旨〜」(0537／八⑭／二二)	輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも、後れ先だたじ、と契らせたまひけるを、さりともうち捨てては、え行きやらじ」 とのたまはするを、女もいといみじと見たてまつりて、 限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり いとかく思ひたまへましかば」 と息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながらともかくもならむを御覧じはておとおぼしめすに、「今日始むべき折りども、さるべき人々承れる、今宵より」 と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせたまふ。	急いで部屋から出て左右に輦車の用意をさせますが、やはり彼女のことが離れがたく思い、再び更衣の部屋に入り、彼女が退出するのを止めます。彼は更衣に言いました。「私はあなたと誓いをしました。命の限りになっても二人で一緒に行くものです。あなたもきっと私を捨てて行くようなことはしないでしょ！」あの女も深い愛情を感じ、途切れ途切れに吟じました。 「命の限りに臨み、長く別れることを悲しみ、 残りの人生を名残惜しみ、命が終わることを嘆く。 今日のことを早く知っておけば……」と、ここまで言うと思が絶え絶えで、言い続けたいが、疲れ果てて、辛くて堪りません。皇帝は彼女をここに留めさせ、その病状を見守りたいです。しかし、左右が奏して言いました。「そちらの祈祷は今日から始まり、高僧もすでに招いてきて、今夜から啓儀（※私注：仏教儀式の名称か）をすることになっておりますが……」彼らは皇帝に早く出発させるように催促します。皇帝は仕方がなく、更衣が宮廷から退出し、実家に戻ることを許しました。	左右に車の用意を命じて、慌ただしく退出しました。しかし、やはり別れ惜しく思い、再び部屋の中に入り、彼女が離れるのを忍ばないです。皇帝は更衣に言いました。「あなたと私は嘗て命の限りになっても、必ず一緒に行く」と誓い合っています。私を顧みないようなことはしないでしょ？」、と。更衣はそれを聞き、心の中で気がひかれるようで、強いてしゃくりあげながら吟じました。 「命の限りがすでに来て、永久に離別することを悲しみ、 残りの灯は將に終わろうとして、命が尽きることを嘆く 今日のような結果になると早く知っておけば……」、と、言い終わると、すでに息ができないほどです。皇帝はまた彼女を宮中に留め、自ら面倒を見てあげたいを思います。惜しいことに側近の人が催促し、「貴妃の実家に、高僧などの人は全員招かれ、今夜から懺悔を始めることになっていますが……」と奏しました。皇帝は仕方がなく、更衣が実家に帰り、暫く養生することを許しました。	急いで桐壺更衣を実家に送る輦車を用意するように命じましたが、後になるとまた彼女をとでも離れがたく思い、すぐに桐壺更衣の部屋に入り戻り、どうしても彼女が宮廷を出ることを許しません。皇帝は桐壺更衣に言いました。「あなたと私はいつまでも変わらぬ愛の誓いをして、寿命の尽きる時は一緒に黄泉の路に行くことを願っていますが、あなたは私を捨てて一人で行くようなことはしないですね！」、と。桐壺更衣もよろずに悲しうて吟じました。 「寿命の尽きる時になり、將に永久に別れようとする。 恋々として真な愛は、命の短いことを恨む この日が来ると早く知っておけば、その時は（誓いをしなければよかったのに）……」、と。彼女は息が絶え絶えで、たくさん言いたいことがあるようです。彼女の表情は非常に辛く、大変そうに見えますので、皇帝も「このまま彼女を宮中に留めて面倒を見てあげたい」と強く思っています。しかし、側にいる侍女は彼女を催促し、「古里での祈祷法事は今日から始まり、法力の靈驗ある高僧をたくさん招きましたので、ちょうど今夜から開始することになっておりますが……」と奏上しました。皇帝は仕方がなく、更衣が実家に戻ることを許しました。

14 心塞がる帝は眠れぬ夏の短夜に、桐壺更衣の死を聞き悲嘆に暮れる「御胸つと〜」(0608／九⑦／二三)	"御胸つと塞がりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいげせさを限りなくのたまはせつるを、	桐壺更衣が宮廷から出ますと、皇帝は胸がいっぱいで、眠ることができなく、ただ夜の長いことは一年の如く感じ、心が憂え傷んでいます。見舞いに遣わした使者はなかなか帰らず、皇帝は頻りに嘆いています。使者は更衣の実家に着きますと、中から慟哭するのが聞こえてきました。家人が泣きながら言いました。「夜半過ぎた後はこの世を去りました!」、と。使者はすっかり元気がなくなり、宮廷に戻りこのことを奏しました。皇帝はこれを聞くと、胸が刀でえぐられる思いであり、恍惚として、部屋に引きこもり、つくねんと座り、思いに耽けています。	さて桐壺更衣が宮中から出ますと、皇帝は心を痛めてではなく、夜も眠れず、つくねんと座ってつまらないです。実家に見舞いに遣る使者はまだ姿が見えないので、皇帝はさらに嘆いてやまないです。さて使者は更衣の実家に着くと、中に人の声が絶えずに泣きわめいて天地をどよめかすほどであるのを聞き、心の中は自然とその事情をすこし悟りました。中で「夜半に亡くなりました!」と泣きわめいたのを聞くだけで、使者は快快として帰り、皇帝に奏上しました。皇帝はこの凶報を聞き、心の長い痛みは抑えられず、俄かに呆然として、部屋の中に引込み、鬱々として思いに耽っています。	桐壺更衣が実家に戻りますと、皇帝は悲しみでいっぱいになり、その夜は徹夜して眠れなかったです。まだ見舞いに遣る使者が帰る時間になっていないと知りながら、皇帝はものすごく苛立ってきて、頻りに「どうしてまだ帰ってこないのか」と言います。さて、使者が桐壺更衣の実家に着くと、古里の人々が声を張り上げて泣き叫んで、「夜半過ぎた頃に亡くなられました」と告げるのを聞きました。使者も非常に落ち込んでおり、帰ってこの事実を奏上しました。皇帝はこの凶報を聞くと、胸を刺されるような思いをして、茫然として、只管一人で部屋に閉じこもっています。
15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する「御子は〜」(0644／九⑩／二四)	御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、例なきことなれば、まかでたまひなんとす。何事かあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。	小皇子は母親を亡くされたので、皇帝は彼を傍らに留めさせたいと思います。しかし、喪中の皇子が御前に伺候するのは、古に先例のないことですので、皇帝は本不意でありながら、彼が宮廷を出て、実家に住むことを許しました。小皇子は幼くて未熟ですので、宮女たちが泣く泣き、父帝が涙を絶えずに流しているのを見て、子供心の中はただ怪しいと思うだけです。普通の親子の別れですら悲しいことなのに、まして今は死別に生き別れを加えているのとは。	小皇子は幼くて母を亡くされ、実に可哀想です。皇帝は彼を宮中に留めたいと思いますが、先祖からの決まりがあり、服喪する間は宮中に留めることはできないですので、彼を実家に出します。さて小皇子はまだ幼いので、侍女たちが泣きわめき、皇帝も一日中涙を流しているのを目にし、心の中は怪しいと思います。普通の親子の別れは固より悲しくて断腸な思いをさせるものであり、このような生き別れと死別に遭うのはさらに言うまでもないのは、彼はどのようにわかることができるでしょうか!	それにしても、小皇子は幼くて母に亡くされたので、皇帝はどれほど彼を傍らに留め、毎日彼の顔を見たいと強く思うものでしょう。しかし、服喪している皇子を皇帝の傍らに留めるのは、昔から先例のないものですので、皇帝はやむを得ず小皇子を宮廷から母方の御祖母さんの家に送りました。幼い小皇子は侍女たちの一人ひとりが一日中涙を流しており、父帝も熱い涙を流して止まらないのを見て、何が起ったのか分かんなく、不思議がって周りを見回っています。普通の父子の別れでさえ人を悲しませるものなのに、況や今のこのような哀れな情景は、本当に言葉で言い尽くせないものですね。
16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒にと泣き焦がれる「限りあれば〜」(0684／一〇②／二四)	限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなんと泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけん。	悲しみには限度がありますので、やがて葬礼の仕方に従い、火葬を行います。太君は恋々として去るを忍ばず、悲しみに号泣します。「私を娘と一緒に塵にしてください!」彼女は前に押し詰め、葬送する侍女たちの車に乗り、一緒に愛宕の火葬場に着きました。そこでは荘厳な儀式が行われています。太君はその地に着き、心の中はどれほど悲しいことでしょう!彼女が言っていたことは道筋が通っています。	悲しみの余り、やはり葬礼によって、火葬の儀式を行います。母太君はその娘を離れ難く思い、皆が娘を葬送するのを見て、「私のこの老いた体も、彼女と一緒に灰になって消えましょう」と泣きわめいています。即ち侍女たちの葬送の車に押し込み、愛宕に着きました。荘重な火葬の儀式はここで行います。この時の太君は、心の中に悲しんでならないのも当然なことですが、思いがけなく彼女はゆっくりと言い出しました。	恋々として別れ惜しいですが、事にはすべて限度があるはずですので、最後は例のやり方によって火葬を行います。老夫人は悲しくて極まりなく、泣きながら、「私も娘と一緒に青い煙になって空に昇りたい!」と告げました。彼女は女官の乗っている葬送の車に追いつけて、その車に乗って荘厳な火葬式を行う現場である愛宕地方に着きました。その時、彼女はどれほど悲しかったでしょう。老夫人は理を弁えるように言いました。
17 気が動転している母は、火葬の実実も受け入れられず諦めきれない「むなしき〜」(0712／一〇⑤／二四)	「むなしき御骸（から）を見る、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはんを見たてまつりて、今は亡き人、とひたぶるに思ひなりなん」と、さかしうのたまひつれど車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかし、と人々もてわづらひきこゆ。	「その遺骸を見るだけでは、彼女がまだ生きていると思ひ込み、彼女がすでに死んでしまったとどうしても信じられません。彼女が灰になるのを見て、やがてすでにこの世の人間ではないと確信できると思います。」しかし、(その場になると、)彼女は泣き崩れ、車から転がり落ちるばかりでした。侍女たちは急いで彼女を助け、あれこれと慰めました。彼女たちは、「こうなってしまふのを心配していました」と言いました。	「彼女を見て、普段の音容を思い出し、彼女がまだ生きていると思います;やがて灰と煙になったのを見て、やっと彼女はもうこの世にいないと信じるようになりました。」と、言い終わると、心身ともに極度に疲れて、車から転ぼうとします。侍女たちは彼女を取り込んで支え、慰めて已まっています。皆は、「今日のように早く心配していました」と言っています。	「この目で娘の遺体を見る時、どうしても彼女はまだ生きていると思い、娘が灰になるその場を見ると、初めて娘はもうこの世の人でないことに気づき、そこで徹底的に絶望すると思います!」しかし、(その時になると)、彼女は悲しくて泣き崩れ、車から転ぼうとしました。女官たちは彼女が手に余ることだと思い、大急ぎであれこれと彼女を慰め、彼女の面倒を見て上げます。ある人は、「このようなことが起こると早くから心配していました」と言いました。
18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す「内裏より御使〜」(0741／一〇⑧／二五)	内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだに、と贈りせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。	宮中から勅使が来ました。詔旨を読み上げました:三位を追贈します。この詔旨は新しい悲しみを掻き立てます。皇帝はこの更衣の在世中に女御に昇らなかったことを思い出し、非常に申し訳なく思います。今彼女を一級昇進させたいと思いますので、追贈をします。この追贈はまた多くの人の嫉妬と恨みを招きました。	間もなく、朝廷から使者が来ました。それと同時に勅旨を持ってきて、更衣に三位の位を追贈すると読み上げました。これは泣きわめく声を引き起すのも当然なことです。皇帝は更衣に一級を追贈したのは、彼女が在世の間に女御の名を得ていなかったことを心から申し訳ないと思うからです。この追贈はまた多くの恨みと嫉妬を招いたことは思いもしなかったです。	宮中から勅使が遣わされました。死者に三位の位を追贈するためした。勅使は贈三位旨を読み上げますと、また人々の悲しみを掻き揚げます。皇帝は更衣の在世中、女御の位すら彼女に与えなかったことを実に残念に思い、今彼女はすでに故人となりましたので、彼女の位を一位上げさせてもいいと思い、勅使を遣わし、追贈しました。しかし、この破格の追贈はまた多くの人の嫉妬と恨みを招きました。
19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ「もの思ひ知〜」(0775／一〇⑩／二五)	もの思ひ知りたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。	しかし、道筋のわかる人は皆、桐壺更衣の容貌と気質は優美で可愛く、態度と性格も親切でやさしく、文句無だと思ひます。ただ以前皇帝があまり彼女のことを寵愛していたので、人の恨みを買いました。今彼女は不幸にして亡くなりました。皇帝の傍の女官たちは彼女の品質の良さ、心の優しさを思い出し、皆惜しんで堪えられません。「生前は誠に憎むべきだが、死後は皆可愛くなる」と、この古歌もきつこの情景に沿って発するものでしょう。	道理の弁える人は、なお更衣の性格が淑やかで優しく、上品であり、姿も美しくて艶めかしく、親しみやすくて敬うべき人であるが、固より責めることなく、ただ生前の隆盛の恩寵により、人に嫌われ、恨まれていただけたと思っています。今この身はすでに青い煙に化して消えてしまったので、情けと恨みも自然にそれと共に消えました。言ってみればおかしいことではないですが、皆は却って更衣生前のいろいろな優れるところを思い出し、彼女の高貴で優しい気品は、人を悲しみ惜しませます。所謂「生前は恨みを招くが、死後は皆に愛される」というのです。この古歌は正にこの情景と合致していますね。	ところが、道理をわきまえる人たちはこれによって亡き桐壺更衣のいろいろな優れたところを懐かしく思います。彼女は容貌端正で、風采も人を動かすところがあり、性格が優しく、心が善良であり、いざこざを引き起こさないですので、彼女を憎もうとしても憎むところはないです。この前皇帝はあまりに桐壺更衣を寵愛していたせいであろうか、人たちの非情なまでの嫉妬を招きましたが、今桐壺更衣はすでに世を去り、彼女は品格も可愛らしく、性格も優しく、心も情け深いですので、皇帝に伺候している女官たちも彼女のことを懐かしく思ってたまらなく、彼女の辞世を心から惜しんでいます。古歌に云う「生前は人の恨みを招いたが、死後は人の恋しさを引き起こす」は、このような場合を吟じているのでしょう。

<p>20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない「はかなく～」(0809／一一①／二六)</p>	<p>はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにも、細かにとぶらはせたまふ。ほど経るまに、せむ方なう悲しうおぼさるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。</p>	<p>時が流れ、桐壺更衣の死後、法事を行うたびに、皇帝は必ず人を遣わして弔問し、慰めること特に厚いです。時が移り、状況が変わりますが、皇帝の悲しみは減ることなく、紛らわすことができないです。彼は絶対ほかの妃を召すことなく、朝夕涙に暮れています。皇帝の傍の人たちはこれを見て、皆憂えて嘆き、秋色に涙を流します。弘徽殿女御などの人だけ、今になっても桐壺更衣のことを許せなく、「幽霊になっても人に安らかをさせないものですね。このような寵愛ぶりはどうでもないものですね!」と言います。</p>	<p>時がながれていますが、桐壺更衣が死んだ後、皇帝はなお彼女のことを恋しく思って止まないです。例の法事を挙げるたびに、必ず人を遣わして弔問し、礼儀甚だ盛大です。それにしても、皇帝の傷心は遣えることができなく、他の妃に気を留める心もなく、ただ一日中一人で涙を流し、それを堪え忍んで日を暮しています。臣下たちは皇帝の様子を見て、皆悲しくて嘆いて涙を流します。弘徽殿などの人たちだけ、今なお死んだ更衣を恨み、「冥界の鬼になっても人の邪魔をするのは、普通でない愛情ですね!」と罵っています。</p>	<p>無常の時が流れました。桐壺更衣の逝去から久しくなりますが、彼女の実家で彼女のための法事を挙げるたびに、皇帝は必ず使者を遣わし懇切にお弔いをします。歳月が無情に流れますと、皇帝は依然として愛いを晴らすことができません。桐壺更衣の辞世後、皇帝はほかの妃たちを召して宿直をさせることなく、只管朝夕涙を流すばかりです。皇帝の側で伺候する人たちは皇帝のご様子を見て、同情の涙を流し、秋の日々を憂鬱の中に過ごしました。しかし、弘徽殿女御などの人たちは、今になっても桐壺更衣のことを気にかかっており、「ああ、皇帝はどれほど彼女のことを寵愛するものですかね!彼女が死んでも人を安らかさせないもの、まったく……」と言っています。</p>
<p>21 帝は若宮を恋しがり、野分だつタ暮に靱負命婦を更衣の里に遣はす「一の宮を～」(0850／一一⑤／二六)</p>	<p>一の宮を見たてまつせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほしいでつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつ、ありさまを聞こしめす。野分だちて、にはかに肌寒きタ暮のほど、常よりもおぼし出づること多くて、靱負(ゆげい)の命婦といふを遣はす。</p>	<p>皇帝は大皇子が傍ににいるにも関わらず、心の中はいつも小皇子のことに気をかけ、時々親近の女官或いは乳母等を小皇子の実家に遣わしてその様子を聞きます。深秋のある暮れ、朔風が吹き始まり、直ちに寒さが肌を刺すように感じます。皇帝は過去を懐かしみ、一層悲しくなりますので、靱負の命婦を小皇子の実家に遣わして慰問させます。</p>	<p>皇帝は宮中に住み、大皇子が時々側に伺候しているにしても、小皇子のことを片時も忘れられなく、よく実家に人を遣わして見舞いをします。この頃はちょうど深秋です。ある日の暮れ、朔風が吹き襲い、寒さは肌を徹します。皇帝は一人で宮中におり、心がそれに触れられ、一層悲しくなりました。即ち靱負の命婦を実家に遣わし、小皇子の音信を尋ねます。靱負の命婦はすぐ車に登り、出発します。</p>	<p>皇帝はよく大皇子を目にかかりますが、心の中でいつも小皇子のことを心配しており、時々信用する女官あるいは乳母を桐壺更衣の実家に遣わして小皇子の近況を聞きます。ある深秋の夕方、台風が俄に吹き始め、すぐさま寒気が人に迫るような感じがします。皇帝はいつもよりも故人を懐かしく思い、一層悲しく思いますので、靱負の命婦を更衣の実家に使わしてお見舞いさせます。</p>
<p>22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る「夕月夜の～」(0877／一一⑨／二六)</p>	<p>夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなるものの音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし気配容貌の、面影につと添ひておぼさるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。</p>	<p>命婦は明月が中空にかかっている夜に、車に乗り、出発します。皇帝は月を望み、徘徊しながら、過ぎ去った昔の事を懐かしく思い出します。昔は、花の朝、月の夜に逢うたびに、必ず管弦の興しがあります。その時更衣は時には琴を弾き、その音色は軽快であり、心を打ちます。時には詩を吟じ、その声は抑揚があり、滑らかで調子が美しく、群を抜いて優れています。彼女の声と容貌は、今は既に幻になりましたが、時々彷彿として目の前に現れてきます。しかし、幻影はいくら深いと雖も、一瞬の現実と敵うことはできません。</p>	<p>その時明月はちょうど中空にかかっており、皇帝は宮中を歩き、月を見上げ、昔の情景を追憶します。朝の花と暮の月の間、宮中の管弦の音は耳に絶えず聞こえ、更衣はあるいは琴を弾き、その音色は澄んでいてちょうどいいぐらいです;あるいは詩歌を吟じ、意味深長で響きがよく、それと比べられるものはないほどです。惜しいことにその声と容貌は、尋ねることもできなく、徒にかすかな断片が残っているだけであり、片時の現実とはいかに比べることができるでしょう。</p>	<p>命婦は情趣に富む明月の夜に、車に乗って行きます。皇帝は只管思いに耽り、いろいろと連想して、昔の記憶に浸っております。そうです、昔は今のような時分となると、きっと管弦遊樂などを挙げます!頭に浮かぶ思いに乗せ、皇帝はまるで以前更衣が琴を弾き、余韻の深い琴音を掻き鳴らしたのを見ているようで、彼女が偶に吟じた歌も実に非凡な意味を持っています。このように、皇帝は彼女の面影がどうしても払い出すことができなく、いつも彼についているように思います。しかし、「頼りない闇のなかの真実」は、果たして一層醜げになり、無常になりました。</p>
<p>23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む「命婦かしこ～」(0907／一一⑫／二七)</p>	<p>命婦(みょうぶ)かしこにまうで着きて、門引き入るより、気配あはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とくつくろひたてて、めやすきほどにて過ぐしたまへる、闇にくれて臥ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎(やへむぐら)にもさはらずさし入りたる。</p>	<p>靱負の命婦は小皇子の実家に着きました。車が門に入りますと、景色が異常に生気がないように見えます。もともとこの邸宅は寡婦の家であり、以前は愛嬢を育てるために、嘗てはすこし取り繕いをし、一定的な体裁を保っていました。しかし、今この寡婦は亡き娘のために日々悲しんで泣いており、それを整備する気になれないので、庭の草木などが荒れ果てています。この時寒い風がサラサラと吹き渡るのを加え、一層物寂しくてわびしいです。ただ一輪の秋月は、生い茂っている雑草ですら覆い隠すことができなく、明るく照らしています。</p>	<p>さて靱負の命婦は実家に着き、車でお庭に入ると、その庭は寂れており、大変荒れ果てているのを見ました。昔、桐壺の母太君が寡の日に、大事な娘を保養させるために、この庭を修繕し、立派に仕上げた日々もありました。更衣が亡くなった後、母太君が失意のどん底に陥り、娘を亡くされた悲しみに耽っているので、どうして邸宅を管理する気を持つことができるでしょう。邸宅もそれによって自然に荒れ果ててきて、草木が枯れ、乱雑になりました。今日は寒い風がサラサラと吹き渡っているので、この庭は一層物寂しくて侘しいです。その明るい秋月だけは、少しも変わっていないです。</p>	<p>命婦は桐壺更衣の実家に着きました。車が門に入りますと、目に見えるのは荒れ果てている情景ですので、思わず悲しみは胸から湧き出てきました。この邸は桐壺更衣の母親が寡婦の住居している処であり、愛嬢である更衣との関係を考慮し、百方手を尽くしてお庭と門前を整え、人の前に体面を保つように努めましたが、今この寡の母は日々亡き娘のことを悲しみ、大変落ち込んでいますので、お庭を修繕するなどには及ぶ暇もないです。知らない間、お庭に雑草が群生していっぱいになり、台風のことを加え、お庭は一層物寂しげな荒れ果てた景色になりました。月の光だけは、群生している葎の草でさえ覆い隠すことができなく、大地を遍く照らしています。</p>
<p>24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える「南面に～」(0937／一二②／二七)</p>	<p>南面(みなみおもて)に下ろして、母君もとみにえものものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の、蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。「『参りてはいとど心苦しう、心肝もつくるやうになん』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。</p>	<p>命婦は正殿の南面で下車しました。太君が引接し、その場で悲しみが中から湧いてきて、喉が詰まって声が出られなかったです。やっと口を開き、「わたくしはしばらく余命を長らえ、本当に薄命の人です。聖上のご高配を蒙り、霜と露の中、ご足労をし、この葎の門にご光来を賜り、誠に忝く存じます!」と言い、涙の落ちること、雨の如くです。命婦は答えました。「先日典侍はこちらに一度訪ねて、宮中に奏しました。こちらの光景は、悲しい思いをさせて目も当てられないほどであり、断腸の思いをさせるほどだと言いました。わたくしのような頑迷無知な人ですら、今日の光景を見ると、悲しい思いを禁じ得ないです!」彼女はしばらく躊躇い、詔旨を伝えました。</p>	<p>正殿の南に着くと、靱負の命婦は下車します。太君は宮中から人が来るのを見ると、また悲しくて嗚咽して、暫くの間は声が出られなく、その後は言い出しました。「老身は衰れな運命ゆえ、一人ぼっちになってわだにこの世に生きています。現在は聖上の御恩を蒙り拙宅にご光来賜り、感慨極まりないです。」と、言い終わると、また暫く涙を流しています。命婦は答えました。「前日典侍は宮中に戻り、聖上に此処の様子を奏上し、本当に人を悲しませて気をかけるものです。今此処に着き、私のような愚昧のものにしても、この情景を目にすると、限りなく悲しんでいます。」と。躊躇ってから、皇帝からの勅旨を伝えました。</p>	<p>車は正室の南面に止り、命婦が下車しました。老夫人がご迎えしますが、その場で言葉で出られなかったです。すこししてから、やっと言いました。「今迄私はおそろかにして生き長らえ、実に悲惨なことです。聖上の御恩を蒙り、勅使を遣わし、ご足労をして、この葎の門に御光来を賜り、実に恥づかしくて極まりないです。」と。言い終わると思わず涙を流しました。命婦は答えました。「この前聖上は典侍を使わして見舞いをさせました。彼女は、「目に見える限りは創痍であり、実に悲惨な光景で、人を悲しませて心を砕かせるほどです」と奏上しました。わたしのような道理の弁えない人にしても、ここに来て一目しますと、心の中は悲しくてたまらないです。」と。命婦の悲しみが少し落ち着きますと、彼女は皇帝の御言いつけを伝えました。</p>

<p>25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す『『しばしは～』(0987／一二⑦／二八)</p>	<p>『『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しうおぼさるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうも、のたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつらるゐと、おぼしつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、承りはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる』とて御文たてまつる。</p>	<p>「聖上は言いました。『当時は夢だと思い、只管夢中になっていました。その後漸く落着きましたが、夢から醒めることができなく、辛くて堪りません。何を持ってこの憂いを晴らすことができるか、聞ける人もいません。太君を密かに宮中に招くつもりですが、いかがですか。私は小皇子のことを心配しており、彼を悲嘆と涙の中に暮らせるのも、可愛そうなことです。是非とも早く彼と一緒に此処に連れてきてください。』聖上はこの言葉をお話しなさった時、途切れ途切れであり、悲しみに声を出さずに泣いていました。人が彼を臆病だと笑うのを深く恐れ、敢えて高い声を出しませんでした。その表情は本当に見ては堪えられないものですので、わたくしは彼が言い終わっていないところで退出いたしました。』言い終わった後、皇帝のご親書の手紙を呈上しました。</p>	<p>「聖上は、『初めの頃は日々夢のように恍惚としてますが、その後辛いことで少し落ち着きましたが、夢うつつで迷い、痛みは癒されることができない、どうやってこの憂いを解消できるのか、尋ねるところありません！太君が密かに此処に来てくださいませんか。別れてから幼い子のことも心掛けてあり、彼が幼くて母に亡くされ、父と別れ、この悲しみは日に増すほどですので、早く彼を連れてきてください。』と言っています。聖上がお話をされる時、悲しみを抑えながら、忍び泣いており、他人に笑われるのを恐れ、目立たないようすごす様子は実に言い表せないほどです。まだお話が終わっていないところで、私は早くし退出しました。』、と。それにつき皇帝のご親書の手紙を呈上しました。</p>	<p>「聖上は、『その時暫くの間、朕は自分が夢の中を流離っていると思ひこみ、その後氣持が漸く落ち着き、やっと自分の気持ちは確かに夢のようだと気づき、しかしそこから覚めることができなく、辛くてたまらないです。どうすればいいのか、胸の中を吐露できる人すらいないです。老夫人は一回秘かに此処に来てくれませんか？また、朕は大変小皇子のことを氣にかけていますので、涙が流れている中で、寂しくて孤独な日々を過ごさせるのは、実に心を痛くさせることであり、必ず早く小皇子を連れて一緒に宮廷に入ってください。』と、涙を流しながら、途切れ途切れで言いました。聖上は周りの人に自分のこの様子を見られると臆病だと思われるかもしれないと顧慮し、その顔色は心の中がどれほど辛いのかを表しています。私は聖上の述懐を最後まで聞くのに忍ばず、御前から退出しました。』、と。命婦はそう言いながら皇帝のご親書の手紙を老夫人に呈上しました。</p>
<p>26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった「『目も見え～』(1043／一二⑬／二八)</p>	<p>「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなん』とて見たまふ。 「ほど経ば少しうち紛ることもや、と待ち過ぐす月日にぞへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさ、今はなほ昔の形見になすらへてものしたまへ」 など、細やかに書かせたまへり。 宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはてず。</p>	<p>太君は、「涙を流しすぎて、両目がかすんでいますが、今は宸翰を賜り、目の前に輝きが増します」と言い、手紙を開き、拝読しました。</p> <p>「爾來月日が移り変わるに従い、悲しみが段々と減ることを望みますが、あに知らんや時が久しく離れるほど、悲しみの増すことです。これは本当に仕方の無いことです。近頃、幼い子はいかがお過ごしでしょうか。時々恋しく思います。太君と一緒に育てることができないのは、誠に残念なことです。今はこの子を亡き人の形見と見て、一緒に宮中にお入りください。」</p> <p>そのほかまたいろいろと詳しいことが書かれています。手紙の末には詩一首ついています。</p> <p>冷たい露、佗しい風の夜、 深い宮に、涙が襟に満ちています。 遙かに憐れみ、荒れた渚の上に、 小草が甚だ寂しげです。</p> <p>太君はまだ読み終わってない時からもうすでに悲しみのあまり喉を詰まらせ声が出ないほどでした。</p>	<p>母太君は、「老身は一日中涙を流しているせいで、目が暗くてよく見えませんが、宸翰を賜る御蔭で、輝きを増すことができました。」と言い、即ち宸翰を拝読します。「時の流れにつれ、この悲しみが減ることができると願っていますが、日が増すにつれ、一層深くなり、それを遣る力すらないです！我が子は近頃お元気ですか？甚だ心掛けです。太君に面倒をかけ、一人で養育するのは、深く残念なことだと思ひます。故人の形見としても、彼を宮中に連れてきてください。」と書いています。</p> <p>また、その中では多くの離別の情けを述べ、詩一首をつけてあります。「秋風が吹き渡り、寂しくて傷心な涙を流す。 荒れ果てた庭に、細い草が一層寂しくなる」 また読み終わっていないのに、太君は悲しみのあまり喉を詰まらせ声が出ないほどでした。</p>	<p>老夫人は、「私の目は涙ぐみであり、両目はものをはっきりと見えませんが、誠に恐縮しながら宸翰を賜り、私に光明をくださいました。さて、拝読させていただきます。」と言いました。言い終わると宸翰を拝読します：</p> <p>「もともと時間の経つにつれ、多少悲しみを晴らすことはできるだろうと思っていましたが、どうして心の傷みは日と共に増すものでしょう。本当に堪え難いものです。どうしたものでしょう！朕はよく心配しています：幼い子は近頃どうしていますか？朕は太君と一緒に幼児を扶養することができなく、大変残念に思いますが、太君はどうか朕が幼児を故人の形見として見ることを許し、幼児を連れて宮廷に入ってください。」そのほか、また細かにたくさん書いてあり、それに歌一首を付けています：</p> <p>深い宮に、朔風は人の涙を催す。 遙かに思ひかける、荒野の小さい若草。</p> <p>老夫人はまだ手紙を読み終わっていない間、すでに目の中に熱い涙が満ちています。</p>
<p>27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く「命長さの～」(1094／一三⑥／二九)</p>	<p>「命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるに、松の思はんことだに、恥づかしう思うたまへばれば、ももしきに行きかひはべらんことは、ましていと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、自らはえなん思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはんことをのみなむおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべる、など内々に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいしう、かたじけなくなむ」とのたまふ。</p>	<p>その後返事をしました。わたくしは老いてなかなか死なないのは、このようなつらい目に逢う定めです。今は松を見ても恥ずかしく思いますので、まして九重の宮には、敢えて仰ぐことはできないでしょう。たびたび聖上のご高配を蒙り、感銘して堪えられません。しかし、わたくし自身は、宮中に入るのは不適当であり僭越だと思ひます。ただ秘かに感じたことは、小皇子がまだ幼いですが、何故か賢く、近頃はよく父帝のことを恋しく思い、早く宮中に入りたいようです。これは実に人間のこの上ない深い心であり、深く褒めて憐れむべきです—この事は代わりに奏していただきたいです。わたくしは薄命の人であり、此処は縁起の良いところではありませんので、長く小皇子を此処に住まわせてはいけません……」</p>	<p>暫くしてからやっとゆっくりと答えました。「老身は老い耄れ、かううじてこの人の世に生きており、このような目に遭う定めです。普段は昔い松を見て、恥ずかしくて面目がないのですが、どうして敢えて九重の地に入ることを望むことができるでしょう。深く御恩を蒙り、いろいろと慰めてください、老身は本当に感激して言い表せないほどです。ただ宮中に入ることは、勝手に決めることができないです。自らもすこし感じましたことは、皇子は幼少にして賢くて、近頃はよく父帝のことに思い慕っており、宮廷に入ることを望んでいるようです。この情けは実に憐れむべきものであり、本当に人間の至大な愛ですので、是非お伝えください。この物寂しい地は、老身はまだ耐えられますが、ただ惜しいことに小皇子に窮屈な思いをさせるのは……」、と。</p>	<p>彼女は命婦に言いました。「老女であるわたしはこのように生き長らえるのは実に辛いことです。長寿の高砂松を見ては猶恥ずかしく思うものですが、況や高貴な宮中を出入りするのには、気兼ねすることが多くて敢えて仰ぐことができないです。誠に恐縮しながら度々聖上の宸翰を賜りますが、以上のことで、老女の私は今になっても行っていないです。しかし、近頃なぜかわからないですが、小皇子は急いで宮中に戻りたいようです。これは童心が父帝を思い慕うからだろうと思い、これも肉親に繋ぐ情けであり、人情の常です。このことは必ず秘かに皇帝に奏上してください。老女は畢竟不吉な身ですので、小皇子をこのようなところに住まわせるのも不吉のことであり、彼の身分に相応しくないです。」、と。</p>

<p>28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ「宮は大殿籠〜」(1149／一三⑩／三〇)</p>	<p>宮は大殿籠（おほとのごも）りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさま奏しはべらほしきを、待ちおはしますらんに、夜ふけはべりぬべし」とて急ぐ。</p>	<p>この時、小皇子はすでに眠りにつきました。命婦は言いました。「もとより小皇子に謁見し、その詳しい事情を奏すべきですが、聖上が返事を待ちかねていらっしゃいますので、遅く帰るのはよくないです。」急いで帰ろうとするのですが、</p>	<p>この時小皇子は眠りにつきました。命婦は、「このたび小皇子を謁見し、このあたりの様子を詳しく奏すべきですが、仕方なく聖上がまだ返事を待っていらっしゃいますので、ここで久しく留めることができません。」と言い、帰ろうとします。</p>	<p>この時、小皇子はすでに就寝しました。命婦は、「もともとは小皇子の顔を拝見して、実際の状況を聖上に詳しく奏上したいと思っていましたが、現在はずでに深夜で寝静まる自分ですので、聖上はまだ待っていらっしゃるかもしれません。」と言い、すぐにも別れを告げ、急いで帰ろうとします。</p>
<p>29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る「くれ惑ふ〜」(1163／一三⑭／三〇)</p>	<p>「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかてまへ。年ごろ、嬉しく面だたしきついでにて、立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかればべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を達へじとばかりに、出だしたてはべりしを、身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、まじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひはべりつるに、横さまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなん、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になん」と、言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。</p>	<p>太君が言いました。「近頃は亡き娘のことを懐かしみ、気持ちが鬱積しており、苦しくて堪えられません。顔る知己の人に気持ちを語りつくし、憂えの気持ちを少し晴らそうと思います。公務の合間に、是非よくいらっしゃってください。待ち望むこと堪えられません。思い出せば、年ごろ逢うたびにはいつも慶事のためです。このたび、この悲しい書簡を伝えるために会うのは、本当に私の望むところではありません。わたくしの薄命により、このような苦しい災厄に遭いました。亡き娘が誕生した時、わたくしたち夫妻は厚い期待を寄せ、この娘が家の名誉を高めることを願いました。亡き夫大納言は臨終の際、猶繰り返して、『娘を入内させる願いは、必ず叶えてください。わたしが死したと言ひ勢いを失うこと勿れ』と言いつけました。私は、家には有力な後ろ盾がいないと、入内してはきっと種々な不幸に遭うことだろうとも思い及びました。しかし、遺言を背くことを忍ばぬゆえ、彼女を入内させました。入内した後、図らずも聖上の度を過ぎる寵愛を蒙り、情けをかけられること、至らぬところないほどです。亡き娘も敢えて他人からの色々な不人情な侮辱を耐えなければならなく、妃たちと付き合っていました。思わぬことに傍輩の嫉妬心は日に日に積み重なり、心を痛めることは述べきれないほどです。憂いは能く人を傷つけますので、つい早世してしまいました。昔の深い恩情と愛情は、却って恨みの源となってしまうました。一嗚呼、これはもともと子に亡くされた傷心な寡婦であるわたくしの妄語に過ぎないですが。』太君は言い終わらず、悲しみが胸に込みあげ、喉を詰まらせ声が出ないほどです。この時はすでに深夜になりました。</p>	<p>太君は言いました。「愛嬢を亡くされ、憂いが募り、知己の人と胸の中を打ち明け、気分を晴らしたいです。暇のある時は、時々拙宅にお光来を賜るように望んでいます。老身にとっては嬉しくて感激すべきことです。昔の面会を思い出せば、いつも境遇のよい時でしたが、今は手紙を伝え、その哀傷の情を託したのは、実に恨むべきことです！それは皆老身の薄命により、不幸にしてこのように劇変に遭いました。わが娘が誕生した時、老身夫婦は厚く希望を託し、彼女がわが家を栄えるようにと望んでいます。亡き大納言は、別れに臨み、「彼女を入内させ、我が願ひをかなえてください。私が亡くなったといい、諦めないでください。」と言っていました。強い支援する人がいないと、わが娘が入内したらきついろいろな辛い目に遭うだろうと百も承知しており、嘗て心配していました。ただその父の遺言により、すこしもそれを背くことができません。聖上の寵愛を蒙り、わが娘が入内してからいろいろと寵愛を受けていますが、妃たちの不当な辱しめを免れることができません。わが娘は巧みに應對していますが、その怨みと嫉妬の心は、日に増すほどであり、たくさん苦しい目に遭いました。やがて鬱積して身を傷つけ、このように結果になってしまいました。聖上のよろずの寵愛は、却ってこのような怨みを招きました。まあ、いいです。この横柄な言い草を老女が傷心の極まりのでたらめだと見てください。』と。太君は辛酸な思いをし、言い終わっていないうちにすすり泣いてしまいました。その時夜が更けました。</p>	<p>老夫人は、「近頃、老女は亡き娘を追憶し、気持ちが憂鬱で、目の前が真っ暗になり、辛くてたまらないです。ただ一人の知己を得て、胸中を吐露し手憂いを晴らしたいと思いますが、あなた様が公務の合間に暇のある際は、是非拙宅にご光来賜り、ゆっくりとお話しできればと願っています。長年あなた様は慶事を伝えるために拙宅にいらっしゃいますが、今この悲しい便りを伝えるためにいらっしゃったのは、すべては老女の艱難辛苦の多い運命を怨むだけです！亡き娘が誕生してから、愚夫婦は厚い期待を託しました。亡き夫大納言は臨終の際、尚遺言を残して再三に言いつけていました。『入内する願望を実現するために、この子をよく慕ってください。私が死んだと言って、挫折して気を抜けるな』と。老女は自ら秘かに考えたのです。娘には強い後ろ盾の保護がなく、宮中の女官たちと付き合うのも大変なことです。宮中で暮らすのは却って不幸なことになるのではないのでしょうか、と。自分はとても心配していますが、夫の臨終のお言いつけに背くこともできないので、娘を宮中に送りました。入内した後、聖上の格別な寵愛を蒙り、面倒を見ること、至らぬところがないほどです。その故、娘は他人からの非情なほどの屈辱を耐えなければならなく、意を曲げてでも折り合って他人と交際しなければなりません。秘かに友人たちからの多く嫉妬と恨みに堪えており、長い時間が経つと、病気になるのも免れないことですが、可哀そうなことに彼女がつい早世しました。それはどうも非業な死だと感じてたまらなないです！この有り難い恩寵が却って莫大な遺憾をもたらしたとは、誰も思ってもいなかったことです……老女がここでくどくどこの心境を話しだすのは、親心ゆえの愚かさからでしょう。」と、まだ言い終わっていないようですが、小声で泣き出しました。この時夜がすでに更けて、</p>
<p>30 命婦は帝が悲涙の内に更衣との因縁を偲ぶさまを語って帰参を急ぐ「上もしか〜」(1256／一四⑩／三一)</p>	<p>「上もしかなん。『我が御心ながら、あながちに人目驚くばかりおぼされしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契りになむ。世に、いささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはでは、かううち捨てられて、心をさめむかたなきに、いとど人わろうかたくなになりはべるも、前の世ゆかしうなん』と、うちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたうふけぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せん」と急ぎ参る。</p>	<p>命婦は答えました。「妄語ではありません。聖上もこのように思っいらっしゃいます。彼は、『私は確かに心から彼女のことを愛していますが、どうしてこのように分を過ぎた寵愛をする必要があるのですか。それは却って人の目を驚かしました。これによって恩愛の長くない定めが決められました。今思い出してみれば、私と彼女との契りは、果たして悪縁だったですね！一向にして人の恨みを買うようなことはしていないと自負していた私は、この人のために、わけもわからぬ多くの恨みを招きました。結局捨てられ一人ぼっちになってしまい、自らを慰める術もなく、それに加え、人に恨まれてしまうような愚かな者になってしまいました。これも前世からの因業でしょう。』彼は繰り返して述べられ、涙は乾く暇もないです。」彼女はくどくどしており、言い尽くすのは難しいです。その後命婦はまた涙を浮かべながら告げました。「夜が更けました。今夜は必ず宮中に戻り、奏上しなければなりません。」そう言いながら急いで出発しようとしています。</p>	<p>命婦は慰めて言いました。「確かに太君の言う通りです。聖上もそれを知り、嘗てこのように言いました。『真心を以て愛し合うとは言え、過剰な非難を招き、良いことは却って続くことができなくなりました。このことから見れば、私たちの間柄は、良くない縁だと言えるでしょう。従来怨みを招くことはないと思っていますが、この更衣のためにこのような怨みを招いたとは思ひもしなかったです。今一人ぼっちになり、却って笑われます。これも恐らく前世からの悪縁でしょう。』と。聖上はその怨みを訴えて已まなく、涙も乾く時はないほどです。」と。命婦はくどくどと言っています。最後、命婦は涙ながら告げました。「こんな時になると、早速宮中に戻り聖上に奏上しなければなりません」と、急いで帰ろうとします。</p>	<p>命婦は言いました。「いいえ、聖上もこのように言いました。『朕は心から桐壺更衣のことを寵愛していますが、それによって再三に世人の驚きの目を引いてしまい、この因縁はつい長く続くことができなくなりました。これに思いつく時、私たち二人がいつまでも変わらぬ愛を誓い合ったのは、却って辛い悪縁となってしまったことを感じてならないです。朕は従来人の心を傷つけるようなことはしないですが、桐壺更衣のこのために、知らぬ間にもともと怨む必要のない人たちの怨みを招き、結局今のように朕が孤独で一人ぼっちになってしまい、心に溜った憂いを晴らすこともできなく、終りは見っとも無い頑固者になってしまいました。朕は本当に前世にはいつたいどの悪業をしたのか、知りたいです』と。聖上は繰り返してこのように言いながら、悲しくて熱い涙を流しています。』と。命婦はまた言い尽くせない言葉があるようです。彼女は泣きながら、「夜が更けました。今夜中必ず宮中に戻り聖上に奏上しなければなりません。」と言って急いで別れを告げました。</p>

<p>31 月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える「月は入り方〜」(1315／一五④／三二)</p>	<p>月は入り方の、空清う澄み渡れるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。</p> <p>鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな えも乗りやらず。</p> <p>「いとどし虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人 かことも聞こえつくなん」と、言はせたまふ。</p>	<p>その時冷月は西に沈み、夜の空は水の如くです。寒い風が顔に吹いてきて、俄かに寂しさを感じます。草の虫は乱れに鳴いており、人の涙を催します。命婦はこの景色を見て、名残惜しくすぐに離れるに忍びなく、詩を吟じました。</p> <p>「秋虫と共に泣く雖も、 長い夜を泣きつくしても涙は末だに乾かない」</p> <p>言い終わってもなかなか車に上る気がないです。太君は詩を応え、侍女を介して伝えました。</p> <p>「泣き声は虫の鳴くところとよく似ており、 宮人の涙、万行ほど添った。</p> <p>この怨みの言葉も、代わりに奏聞してください。」</p>	<p>この時、月は西に沈み、寒い風は人の顔を撫でます。天籟が冷静し、一層人を悲しませます。鳥たちが哀れに鳴き、尤も人の心を乱します。命婦は躊躇って帰るのを忍ばず、詩を吟じました。「秋虫は人と共に泣くとも難も、 長い夜が過ぎてても涙は尽し難い」と吟じますと、また車に登ろうとしません。さて太君も返事に詩一首を吟じ、侍女を遣わして伝えました。</p> <p>「泣声は虫が鳴くのと似ており、 宮人は一緒に悲しく泣いて禁じ難い」 この怨みの句を、聖上にお伝えください。</p>	<p>その時明月は将に西に沈もうとし、晴れた空は万里に亘り、寒い風が物寂しく吹き、草むらの中の秋虫は悲しく鳴き、人の哀傷な顔を催します。これも離れがたく別れ惜しむ情趣ですので、それに付けて歌を吟じました。</p> <p>鈴虫の哀れの鳴き声は限りありとも、 長い夜の涙の湧くこと、尽くす時はない。</p> <p>歌を吟じた後、命婦は依然として車に登る気はしません。老夫人は返歌をして、侍女に命じて贈りました。歌は、</p> <p>「浅茅のむらのなか、虫は悲しく鳴く。 女官の涙を催す。</p> <p>この哀れな心境は、代わりに奏上してください。」</p>
<p>32 負命婦の婦参に際して、祖母君は桐壺更衣の形見の装束等を贈る「をかしき御贈〜」(1358／一五⑩／三二)</p>	<p>をかしき御贈り物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。</p>	<p>今回命婦に労い褒美を与える時、風情に富む贈り物は不適です。従って、太君は亡き更衣の遺物である衣装一式と梳り道具数点を記念として命婦に贈りました。このものはそのために残されているようです。</p>	<p>あなた様へのご褒美は、素朴なものでなければならないと思います。ですので、更衣が残った衣装一式と少しの化粧道具を記念として贈り、また宜しいだろうと思います。</p>	<p>この場合は風雅な贈り物を贈るのは宜しくないですので、老夫人は亡き娘が残した装束一着と梳り道具を選んで記念として命婦に贈りました。これらの物はこのために残したようです。</p>
<p>33 亡き更衣の女房たちは若君の参内を促すも祖母君は手放し難く思う「若き人々〜」(1378／一五⑫／三二)</p>	<p>若き人々悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことを唆しきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまつらんも、いと人間き憂かるべし、また見たてまつらでしばしもあらんは、いと後ろめたう思ひきこえたまひて、さすががともえ参らせたまてまつりたまはぬなりけり。</p>	<p>小皇子についてここに来た若い侍女たちは、皆悲しんでいることは言うまでもないです。彼女たちは宮中での華やかな景色を見慣れており、ここの光景を異常に悲しく思います。彼女たちは皇帝の悲しい様子を想像し、甚だ同情しますので、太君に早く小皇子を宮中に入れるように勧めました。太君は自分が不潔な身だと思い、小皇子と一緒に宮中に入るのは、きっと他所から多くの非難を浴びます。しかし、この小皇子を見られないことは、暫しの間にしても不安な思いをしますので、小皇子を宮中に入れることは、当分断然と実行できないです。</p>	<p>小皇子の側のたくさんの若い侍女たちは、世間の華やかさになれており、宮中を出てこの物寂しい所に来て、その落ちぶれた侘しさを嘆き、怨み甚だ多く抱いているのも当然なことです。皆は皇帝が恋人を失い、肉親と離れた痛みを思いやり、憐れんでではなく、太君に小皇子を宮中に送り、父帝と一緒にさせることを勧めます。太君は自分が不潔な身で、小皇子と一緒に宮廷に入るのはきっと世の人の非難を招くだろうと思います。しかし、小皇子と別れることは、自分からも捨てがたいと思い、暫くの別れですら耐えがたいです。このこともこれによって不問に付します。</p>	<p>小皇子について御祖母さんの実家に来た侍女たちは、皆悲しく思うのは言うまでもないです。彼女たちは朝夕宮中の暮らしに慣れており、此処は非常にさびしく思います。彼女たちは皇帝の悲しさを想像し、また中傷の噂を思い、老夫人に早く小皇子を宮中に送るように勧めました。しかし、桐壺更衣の母親として、彼女は自分が不吉で恨むべく身でありながら、小皇子と一緒に宮中に入るなら、きっと他人の多くの非難を招くだろうと思います。また、自分が小皇子に会えないと、片時でも安心できないです。このように、彼女は少しでも小皇子を宮中に戻したくないです。</p>
<p>34 桐壺帝は女房と語り明かし長恨歌の絵を見ながら命婦の婦参を待つ「命婦は〜」(1420／一六③／三三)</p>	<p>命婦は、まだ大殿籠らせたまはざりける、とあはれに見たてまつる。御前の壺前栽の、いとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに、心憎き限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ枕言にせさせたまふ。</p>	<p>命婦は宮中に戻り、皇帝がまだ就寝していないのを見て、可哀そうに思います。この時清涼殿の庭にある秋の草花は、ちょうど生い茂っているところです。皇帝はそれを観賞しているふりをしながら、四五人の温雅な女官を友にし、ひそやかに話を交わし、気晴らしをしています。最近皇帝が朝夕ご覧になっているのは、『長恨歌』の絵巻です。これは以前宇多天皇が画家を命じて描かせたものであり、そのなかには著名な詩人である伊勢と貫之が作った和歌と漢詩があります。普段の話も、この類のものが話題になります。</p>	<p>さて命婦が宮中に戻り、皇帝がまだお休みになっていないのを見ると、心から憐れみを感じます。清涼殿の前の秋の草花は今とても茂っています。皇帝は四五人温雅な宮女と一緒に草花を観賞し、あるいは雑談をし、詩を吟じ、静かに気晴らしをしています。皇帝は近頃昔宇多天皇が絵師を命じて画かせた『長恨歌』をご覧になり、その中の歌人伊勢と貫之による和歌と漢詩は、普段一番よく話題にするものです。</p>	<p>さて、命婦は宮中に戻りました。皇帝はまだ就寝していません。命婦は皇帝が返事を待ちかねている様子を目にし、大変同情してたまらないです。聖上は清涼殿の中庭で植えてある花と木を観賞しているように見せかけています。茂っている花は盛んに咲き、とても喜ばしいです。聖上は秘かに四五人心の通じ合う女房を呼び寄せて、無駄話をし、物語を語って暇をつぶします。</p> <p>近頃、皇帝は朝晩亭子院が人に作らせた『長恨歌』絵巻を御覧になっています。絵には伊勢と貫之が作った和歌あるいは漢詩を付けてあり、話の内容も多くはこの類の愛妻と死別する話題です。</p>

35 帝は里邸の様を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う「いと細やか〜」（1469／一六⑧／三三）	いと細やかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、「いともかしこきは、置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になん。 あらき風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」 などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほど、と御覧じゆるすべし。	この時皇帝は命婦が戻ったのを見て、彼女に桐壺更衣の実家の事情について詳しく聞きます。命婦は自分が見たその惨めな光景を秘かに奏聞しました。皇帝は太君からの返事を聞いて読みますと、中にはこのように書かれています。「忝くご高配を蒙り、誠に恐縮極まりなく、身を置く所がないほどでございます。温かい御諭しを拝読し、悲しみと感動とが胸に湧き上がり、心が迷い、目が眩しくなるほどでございます。 嘉蔭が枯れて風が強く 小草を甚だ憐れみ悲しみに耐えられない」 この詩は失言するところがありますが、それは悲しみのあまり、心が大変乱れてしまったためであろうと見て、皇帝はそれを見咎めません。	皇帝は命婦が宮中に戻ったのを見て、彼女を御前に召して、更衣の実家の様子を聞きます。命婦はその見聞を如実に奏上し、太君からの手紙を呈上しました。皇帝が急いで読みますと、その中は、「恵み賜りを蒙り、大変恐縮でございます。お手紙を拝見し、悲しいとともに幸いと思い、感動してたまらないです。 栄華が落ちこぼれ、秋風は強い、 弱い草は仕方なく悲しくて禁じえない」 悲憤で心が乱れているせいであろうか、この詩にはでたらめが多いです。皇帝はこのことを知っていますので、それを追究しません。	間もなく、命婦が宮中に戻りますと、皇帝は詳細に桐壺更衣の実家の様子を聞きます。命婦は秘かに自分が目にした悲しい状況を事実に沿って奏上し、老夫人からの返事を呈上しました。皇帝は手紙を開く御覧になります。その手紙は以下の様に書いています。「御恩を蒙り、誠に恐縮極まりないです。自分が身を置く場所がないように思い、宸翰を拝見し、いろいろな感想を抱き、慌てて度を失い、ただ心の中が真っ暗のような感じがします。 朔風から守る木はすでに枯れた。 可哀そうな小草は如何にして福を得ることだろう。」 このように、老夫人は難駁でやや失礼なことを書きましたが、ここからも老夫人が愛嬢を失った後は悲しく極まりなく、それゆえ心が乱れていることが読み取れますので、皇帝も彼女のことを許すでしょう。
36 悲嘆を隠せない帝は更衣入内の頃を思い出し祖母君をも不憫に思う「いとかうしも〜」（1504／一六⑫／三四）	いとかうしも見えじ、とおぼしむけれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。御覧じはじめし年月のことさへ、かき集めよろづにおぼし続けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は経にけり。あさましうおぼしめさる。 「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりし喜びは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、言ふかひなしや」 とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。	皇帝は人に傷心の色を見せたくないの、努めて隠そうとしてもつい忍びませんでした。彼は更衣を見初めた時の千種の風情、万般の恩愛をありありと思い出しました。その時は一刻も離したくなかったです。今は一人で孤独であり、自分でも可哀そうだと思います。彼は言いました。「太君は故大納言の遺言を背きたくないの、娘を入内させました。私はこの好意に感謝するために、優遇すべきでした、ついそれを実行することができなかつたです。今その人は琴と共に消え失せ、言っても甲斐のないことになってしまいました！」彼は大変申し訳なく思います。また続いて言いました。	皇帝は皆の前で悲しみを抑えようとしていますが、更衣を見初めた時の種々の風情を思い出すと、それを隠すことはどうやってできるでしょう。今は一人ぼっちになってしまい、空しくこの塵の世に留めている自分が可哀想だと思つてなりません。即ち言いました。「更衣の父大納言の臨終の遺言により、太君が始めて娘を入内させたのです。彼達に感謝するために固より厚く遇すべきでしたが、思わぬことにそれが結局果たせなかつたです。惜しいことに今人が亡くなり、空しい約束ごとが残っているだけです！」と、ここまで言いますと、皇帝は大変申し訳なく思い、また転じて、	皇帝は何とかして人に自分の悲しい表情をみせないようにしますが、強く忍ぶほど心の中の悲しみは却って抑えきれないです。皇帝は若い更衣と出会った時のことを一つ一つ思い浮かべて歴然として目の前にあるようです。あの幸せな時間は瞬間に消えてしまうとは思ひもしなかつたですが、これは人を苛立たせて不安させるものです。今の自分が一人ぼっちで虚しく日々を送るのは、思えば本当に不思議なことですね！皇帝は言いました。「老夫人は亡き大納言の遺言を背かず、真心を以て愛嬢を宮中に送りました。朕は心を尽くしてこの深い思いにお返ししたいのですが、思わぬことに愛しい妃が早世してしまい、ついそれを実現することができなく、実に仕方のないことです。」皇帝は心の中に実に申し訳ないと思いますので、また続いて言いました。
37 帝は若宮の将来を約束し、贈物から長恨歌の釵に思いを重ねて歌う「かくても〜」（1543／一七③／三四）	「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなん。命長くとこそ思ひ念ぜめ」 などのたまはす。 かの贈り物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりけむしるしの釵ならましかばと思はずも、いとかひなし。 尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく	「そうとは言い、更衣はすでに小皇子を生みましたので、彼が大人になったら、太君はきっと安楽な日々を迎えることができるでしょう。彼女が健康で長寿であることを祈ります。」 命婦は太君からの贈り物を呈上し、御覧を請います。皇帝はそれを見て思いました。「これは臨邛の道士が故人の住処を見つけて持って帰った証の物としての鉦合金釵であれば……」このような空想をしても、果たして虚しいことに過ぎないです。即ち詩を吟じました。 君が鴻都の客になることを願う 香魂の住処を探し出してください	「幸い、更衣が残した小皇子は、大人になれば、また老太君に親孝行ができるでしょう。ああ、ただ太君が長寿であるように願います。」と言いました。 命婦は太君からの贈り物を呈上し、皇帝はこれをご覧になり、心の中では、「これはもし臨邛の道士が彼女の住処から持ってきた鉦合金釵であればいいのに……」と思います。このような無駄な幻想をするのは、実につまらないことです。そこで吟じました。 「君がもし鴻都の客になるとしたら、 その香魂は居場所を探して尋ねてくるだろう」	「しかし、勿論小皇子が大人になりますと、老夫人もきつといい運に恵まれるでしょう。できるだけ彼女に良くしてあげて健康で長生きさせるべきですね！」と。 命婦は老夫人からの贈り物を呈上し、皇帝の御覧を請います。皇帝は、「これは若しかしたら以前『長恨歌』の中で言っている臨邛の道士が故人の住処を見つけて持って帰った証の物としての鉦合金釵のようなものですか……」といろいろ連想しても何も役も立たないですが、それに付けて以下のように一首の歌を吟じました： 靈験ある道士に化すことを願い、 君の魂が嘗て至ったのかを探る
38 帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う「絵に描ける〜」（1572／一七⑦／三五）	絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと句ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひは麗しうこそありけめ、懐かしうらうたげなりしをおぼし出づるに、花鳥の色にも音にも、よそぶべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかさはむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほど、尽きせず恨めしき。	皇帝は『長恨歌』絵巻を見て、その絵の中の楊貴妃の容貌は有名な画家によって描かれているとは言え、その筆の力には限りがあるので、生き生きとする趣を欠けていると思います。詩の中では貴妃の顔と眉は「太液の芙蓉、未央の柳」に似ていると言っており、その比喩は適切であり、唐代の装束も上品で美しいと思いますが、桐壺更衣の艶めかしくてやさしい姿を思い出すと、何の花鳥の色や声でもそれと比べられないと思います。以前朝ター緒になり、よく「在天願做比翼鳥、在地願為連理枝」の句を口にし、共に誓いを交わしていました。今それは全部空の花、水の泡となりました。天命は斯くの如く、恨みを抱くこと限りなし！	今その『長恨歌』の絵巻の中の貴妃の容色は、やや生気を欠けています。皇帝は密かに、絵の中に生気があるのはもともと求め難いものであり、名家の筆の力も所詮これぐらいのものに過ぎないと思っています。詩では「太液の芙蓉、未央の柳」を以て貴妃の顔と蛾眉を喩えますが、十分相応しいと思い、また唐代の衣装と化粧も大変上品で艶めかしいと思いますが、更衣の優しくて艶めかしい姿と比べると、世の中の花鳥の色と声は皆遜色しました。以前朝ター緒にいて、「在天願做比翼鳥、在地願為連理枝」の詩を吟じ、お互いに誓いを交わしましたが、今それが水の月、夢の花となり、二度と会うことができなくなりました。これも宿命でしょう！	皇帝は『長恨歌』の中の楊貴妃の容貌を御覧になり、その画像は高明の画師の手によるもののだとは言え、どうも筆の力が欠けており、絵の中の人は傾国だとは言い難いと思います。詩の中は貴妃の美しさを譬える時は、「太液の芙蓉、未央の柳」に似ていると言っており、彼女の唐装束は、美しいとは言え、皇帝は桐壺更衣の艶めかしくて可愛らしい姿を思い出すと、何の花の色や鳥の声にしても、それとは比べられないと思います。昔朝タ枕の傍らで秘かに交わす「在天願做比翼鳥、在地願為連理枝」といういつまでも変わらぬ愛の誓いは、今は虚しい幻となり、無常の運命は本当に無限に恨めしいものですね。

39 帝の心を踏みにじるように、弘徽殿女御は傍若無人な遊び事に耽る「風の音〜」(1615／一七㊸／三五)	風の音、虫の音につけて、もののみ悲しうおぼさるに、弘徽殿には久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる、いとすさまじう、ものしと聞こしめす。このごろの御気色を見たてまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおしたち、かどかどしき所ものしたまふ御方にて、ことにあらずおぼし消ちて、もてなしたまふなるべし。	この時皇帝は風が嘯き、虫が鳴くのを聞き、それが全部人の悲しみを催すものだと思います。弘徽殿女御は久しく帝居参詣していないですが、よりによってこの深夜の時分に月を愛で、管弦を演奏します。皇帝はそれが耳障りだと思い、大変不快に思います。近頃皇帝の悲しげなご様子を目にしている殿上人と女官たちも、この奏楽の音を聞き、皆皇帝のために判官びいきをしています。弘徽殿女御はもともと非常に頑固で冷酷な人であり、全然皇帝のことを気にしないですので、このようなことをします。	この時風が嘯き、虫が鳴きます。皇帝の心は乱れて、悲しくてたまりません。よりによって弘徽殿女御は久しく帝居に疎遠し、この惱ましい夜に管弦の遊びをします。皇帝はそれを耳障りだと思い、不快に思います。側にいる殿上人と女官たちは、皇帝の心を推察し、皆この奏楽の声を嫌に思います。弘徽殿はこれほど冷酷で頑固な人ですので、わざとこのようなことをする以上、皇帝の心を少しでも顧みないです。	風が嘯き、小虫が鳴きます。目にするすべては、皆人の哀傷をよるずに催すものばかりです。さて、弘徽殿女御は久しく皇帝に参詣していないく、よりによってこの時に管弦の楽を奏で、月の色を楽しみ、深夜まで続いていた。皇帝はその楽しそうな音を聞き、これがありにも他人の災難を喜びにするのだと思い、甚だ不快でした。確かに、殿上人や女官たちは近頃の皇帝の辛そうな顔色を見て、弘徽殿女御のすることは大変酷くて厄介なことだと思います。弘徽殿女御はもともと鋭気を持ち、頗る策略あり、個性の強い人間ですが、すこしでも皇帝の憂いをもとしないですので、そのような振る舞いがあるのも当然なことです。
40 更衣の里邸に思いを馳せて悲しう歌う帝は、眠ることすらできない「月も入りぬ〜」(1660／一八㉓／三六)	月も入りぬ。 雲のうへも涙にくる秋の月いかですむらん浅茅生の宿 おぼしめしやりつと、燈火（ともしび）をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。	月は西に沈みました。皇帝はこの景色に即し、口遊みました。 宮の垣の月を眺めたくても、啼くこと多くて涙の目が翳む。遙かに荒れた邸の中を憐れみ、如何にして光が見えるだろう。 彼は桐壺更衣の実家の様子を懐かしく思い、残灯を挑げ尽くし、一晚中つくねんと座り、思いに耽け、眠ることを億劫がります。夜回りする右近の衛官が唱名するのが聞こえ、今はすでに丑の刻になったと知りました。つくねんと座るのが長くて人の目を引くのを恐れるため、立ち上がって中に入ってもなかなか寝付かないです。	この時冷月は西に沈み、皇帝は詩一首を吟じました。 「宮の垣の月が暗く、涙の目が翳む。 遙かに荒れ果てた住まいに明かりがあるかを聞く」 更衣の実家のことに心を掛け、少しも眠る気がなく、いっそのことで残灯に向けて一人で座り、夜が明るくなるのを待ちます。夜の見廻りをする右近衛官が丑の刻を唱名したのを聞いてから、つくねんと座るのが長くて皆の議論的になるのを恐れ、始めて中に入り、少し休もうとしますが、寝返りを打って眠れなかったです。	この時、月は完全に隠れました。皇帝はこの景色に触れて歌を吟じました： 宮中で涙の目は秋月を映る。 如何にして長く荒野に居るか。 皇帝は老夫人の家の情景を想像しながら、灯の芯を最後まで挑げます。火が消えましたが、皇帝は依然として就寝していません。右近衛府の巡回の官人が交替して唱名するのを聞く時は、すでに早朝丑の刻になりました。人の目を引かないようにと思い、皇帝は寢室に入りましたが、どうしても眠りにつけないです。
41 帝は政治まで疎かにしかねない悲しみの中で食事もし上らない「朝に起き〜」(1693／一八㉗／三六)	朝に起きさせたまふとて、 「明るくも知らで」 とおぼし出づるにも、なほ朝政はおこたせたまひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。朝餉の気色ばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、いとわりなきわざかな、と言ひ合はせつと嘆く。	翌日の朝起きて、以前「珠簾錦帳不覚曉」の光景を思い出し、悲しくて耐えられなく、朝政を処理するのも億劫がります。皇帝はあまりに飲食を進まないです：朝ご飯は箸を挙げてその名に応じるだけであり、正式のお食事は久しく廃止されました。御膳に伺候する人々はこの光景をみて、誰しも心配して嘆きます。側近の臣下たちも、男女問わず、苛立って嘆きます。「これは本当に仕方がないですね！」彼達はこっそりと議論します。	次の日の朝に起きて、「珠簾錦帳不覚曉」の詩を思い出し、その情景を見て心を痛めるのも免れなく、朝廷に出る気もなくなりしました。飲食も疎かになり、朝ごはんは強いてその名に応じてお箸を取りますが、正式のお食事は早くから廃止されました。左右にいる食事に伺候する人たちは、これを見て、皆憂えて嘆きます；側近の男女の臣下たちは、皆焦っており、「これは本当に仕方がないことです！	翌日の朝は目が覚めても依然として、桐壺更衣の在世の時に「夜が明けたのを知らなくて続けて寝る情景を始終心に掛けており、只管振り返って過去を悲しみ、すべてのものに対して元気がないので、朝政を処理するのも億劫がります。皇帝は食欲がなく、簡単な朝ごはんに対しても少しお箸を付けるだけで、正式の御膳は長い間お召し上がりにならないです。従って、皇帝の食事に伺候するすべての者は、皇帝の悲しい様子を見て、皆嘆きます。彼たちだけでなく、皇帝の側近の臣下たちも、男女問わず、皆嘆いて「これは本当に大変なことですね！」と言います。彼達はまたこっそりと議論します。
42 帝に奉仕する者たちも政道放棄を嘆き楊貴妃の例まで引合いに出る「さるべき契〜」(1731／一八㊸／三七)	「さるべき契りこそおはしましけめ、そこの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことにふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今はたかく世の中のことをも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と、人の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。	「皇帝は桐壺更衣とは、きっと前世の宿縁がありますね。更衣が在世した時、万の人に謗られ、恨まれても、皇帝は一概にして顧みないです。この更衣に関わることでしたら、只管私情にとらわれ、道理を講じません。今更衣はすでに死んだとしても、日々憂いに浸り、嘆くばかりで、朝政を顧みないです。これは本当に荒唐無稽なことですね！」彼たちはまた唐玄宗など外国朝廷の例を挙げ、小声で議論し、秘かに嘆きます。	皇帝と亡き更衣との間はもしかしたら前世からの因縁があるのでしょうか、在世の時は只管恩寵をし、皆の議論を少しも顧みなかったです；その死後は、只管涙に耽り、政事を処理しないです。本当に不思議ですね。」と言っています。また国外の宮廷、例えば唐玄宗などの例を挙げ、秘かで議論して嘆いています。	「もしかしたらこれは皇帝と桐壺更衣の誓いが叫ったということですか。桐壺更衣の在世の時、皇帝は皆の非難と嫉妬を顧みず、更衣についてのことは、只管私情にとらわれ、理性を失いました。今更衣が亡くなりましたが、彼はまたこのように朝夕思い焦がれ、朝政を処理する気がないです。このままですと大変なことになりますね！」彼達は外国帝王の例さえ挙げ、お互い秘かに議論して、嘆きました。
43 若宮参内で不吉な予感、弘徽殿女御は息子が四歳の春に立坊し安堵「月日経て〜」(1762／一九㉔／三七)	月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、清らにおよすけたまへれば、いとゆゆしうおぼしたり。明るる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしうおぼせど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふくおぼし憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、 「さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ」 と、世人も聞こえ、女御も御心おちいたまひぬ。	若干の日が経ちますと、小皇子は宮中に戻りました。この子は成長するほど美しくなり、塵の世の人間に似ないほどですので、父帝は彼のことを非常に可愛がっています。次の年の春は、そろそろ立坊する時となりました。皇帝は心の中で頗るこの小皇子を太子に立てたいと思います。しかし、この小皇子には高貴な外戚が後援としていなく、しかも年上のほうを廃して、年下のほうを立てることは世の人に許されないことであり、それは却って小皇子にとって不利であるのを深く恐れ、ついでこの考えを無くなりました。何食わぬ顔をししながら、大皇子を太子に立てました。世の人は皆言いました。「このように可愛がっている小皇子としても、つい太子として立てられないのは、やはり世の事には尺度があるものですからね！」大皇子の母親である弘徽殿女御もこれで安心しました。	日が少し経ちますと、小皇子はやっと宮廷に戻りました。彼は益々美しくなり、凡俗の人と大いに違いますので、皇帝は彼のことを憐れんでやまないのも当然なことです。次の年の春は皇太子を立てます。皇帝はもともと小皇子を立てたいと思っていますが、貴顕の外部からの援助がないことに苦しみ、また年上のほうを廃して、年下のほうを立てることは世の人に許されないため、このことは却って小皇子にとって不利であると思いますので、つい彼を立てる考えを打消し、猶大皇子を皇太子に立てました。世の人はまたこれを評価し、「好きな人を皇太子に立てないことからみれば、聖上が物事に対してまた尺度を持っているということですね！」と言っています。大皇子の母親である弘徽殿女御もこれで心配がいらなくなりました。	その後、少し日が経ちますと、小皇子は宮中に戻りました。小皇子は成長するにつれ、一層清らかで美しくなり、その美しさはまるで人の世の凡人ではないほどです。皇帝は大変喜び、小皇子の容貌は本当に群を抜いていると思います。翌年の春、皇太子を立てる時になりますと、皇帝は大皇子を先越し、小皇子を皇太子として立てたいと思いますが、小皇子には強い外戚が後ろ盾として居なく、また充分の理由がないと、幼子を立てて長子を立てないのは、きっと世間に認められなく、却って小皇子の成長に不利を来してしまうだろうと心配しています。ですので、皇帝はそれを表に出さずにこのつもりを打ち消しました。世間の人々も皆議論しました。「皇帝はそれほど小皇子を寵愛していても、することには尺度がありますね。」大皇子の母親である弘徽殿女御もこれで安心しました。

44 祖母君は期待も虚しく潰え若宮六歳の年に無念さを残したまま死去「かの御祖母～」(1805／一九⑥／三七)	かの御祖母北の方、慰む方なくおぼしづみて、おはすらん所にだに尋ね行かんと願ひたまひしるしにや、つみに亡せたまひぬれば、またこれを悲しびおぼすこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびはおぼし知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、返す返すのたまひける。	小皇子の母方のお祖母さんは娘が死んだ後、ずっと悲しくて自分を慰めることができません。彼女は仏に祈り、早く娘のいる国に往生したいと願います。間もなく仏の力に蒙り、彼女は極楽浄土へと迎えられました。皇帝はこのことに対して無限な悲しみを感じます。この時小皇子はまだ六歳ですが、人の情けが分かり、母方のお祖母さんの死を惜しみ、泣くことは悲しみを尽くします。お祖母さんは長い間の孫と親しんでいますので、彼と死別することを忍びなく、臨終の際に繰り返し彼のことを言い及び、悲しくてたまりません。	さて太君は愛嬢のご逝去により、悲しくて鬱積して、それを遣ることができません。そこで、毎日仏様に早く極楽に行き、娘と一緒にいることを祈っています。間もなく、果たして仏様の助けを得て、極楽に行きました。皇帝はこの凶報を聞き、また悲しく思います。この時小皇子は六歳になり、少し人情と世故が分かるようになり、悲しくて泣いて、母方の御祖母さんを哀悼します。御祖母さんはこの孫と二人で長年一緒に暮し、肉親の情けが厚く、臨終の際もこの孫さんのことを念じて、悲しくて一杯でした。	さて小皇子の母方の御祖母さん老夫人は、娘に亡くなられた後、ひどく傷心して自らを慰めることができません。彼女はいつも神霊に亡き娘の行くところまで導くようにと祈禱していますが、その祈禱が効いたためであろう、彼女はつい亡くなりました。皇帝はこれで限りなく悲しく思います。この時小皇子はすでに六歳になり、人の情けも解しますので、母方の御祖母さんのことを恋々として別れ惜しいです。彼は悲しげに泣きます。母方のお祖母さんはこの孫さんと長い間一緒に住んでいますので、彼と決別するもつらく思い、よろずに悲しんでおり、臨終の際までこのために繰り返して悲しんで嘆いていました。
45 若宮七歳の読書始めの後は、その聡明さと美貌に弘徽殿女御も感服「今は内裏～」(1844／一九⑩／三八)	今は内裏にのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなせさせたまひて、世に知らず聡うかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧す。「今は誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」 とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇、敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。	この後小皇子は常に宮中に住むことになりました。小皇子は七歳から読書を始めます。彼は賢くて悟りが早く、人並みはすれて優れています。皇帝は彼の敏捷であるのを見て、却って心配してしまいます。彼は、「今誰も彼のことを恨まないでしょう。彼は母親がいないので、この点からだけでも、皆は彼のことを可愛がるべきです」と言っています。皇帝は弘徽殿に行く時も、よく彼と一緒に連れて行きます。また、彼を御簾の内に入れます。小皇子は異常に可愛らしくて、雄々しい武士や仇にしても、彼の姿を見ると、思わず笑顔を浮かべるほどです。ですので、弘徽殿女御も彼のことを嫌悪して捨てたくありません	小皇子は読書を始めるのは、ちょうど七歳の時であり、彼の聡明さと悟りの速さは本当に世に稀なものです。このような賢さは却って皇帝を心配させます。彼は皆に、「母を亡くされた子に対して、誰が怒ることができるでしょう。この一点だけについてでも、皆は彼に良くしてあげるべきです」と言っています。皇帝が弘徽殿に御出でになる時も、小皇子を連れて行きます。この子の姿は美しく可愛らしく、面憎い人や仇のある人ですら彼を見ては綻びます。弘徽殿女御は同じく彼を見咎めることはありません。	老夫人が亡くなった後、小皇子はそれから宮中を常住するようになりました。 小皇子は七歳から学校を始めます。彼は賢くて非凡であり、並べるものがないほどです。皇帝は彼の聡明さを見て、ひいては彼の将来を心配しています。皇帝は、「今誰にしても彼を恨むようなことはないでしょう。母に亡くされた孤児として見ても、皆は彼のことを可愛がるべきです。」と言います。皇帝は弘徽殿などの所に御出でになる時は、いつも小皇子を連れて行き、また彼を御簾のうちに入れます。小皇子の容貌は非常に可愛く、勇猛な武士あるいは敵にしても、彼の美貌と英姿をみては、思わず微笑みを浮かべるのです。弘徽殿女御にしても彼に冷たくして見捨てるようなことはできません。
46 若宮は二人の皇女方より優雅で学問や音曲にも秀でる超人さを発揮「女御子たち～」(1904／二〇②／三九)	女御子たち二所、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしく恥づかしげにおはすれば、いとをかしょうちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひきこえたまへり。 わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。	弘徽殿女御は大皇子以外、また二人の皇女を産みましたが、容貌は皆この小皇子ほど美しくありません。ほかの女御と更衣たちはこの小皇子を見て、回避しません。皆は、「年端も行かないのに、これほどみやびやかでなまめかしい姿を備えるとは。本当に大変親しみやすくて慎重に扱わなければならない遊び相手ですね」と思います。勉強すべき種々の学問は言うまでもなく、琴と笛も精通しており、その清い音は雲まで響きわたります。この小皇子の才芸の多いことは、一一挙げるとすれば、まるで嘸みたいで、人に信じてもらえないほどです。	大皇子の後、弘徽殿女御は二人の皇女を産みましたが、小皇子の美しさには及ばないです。女御と更衣たちは皆小皇子を回避することなく、彼が幼少にしてこれほど上品で風姿艶めかしいのは、確かに十分親しみやすくて可愛らしいと思っています。しかし遊びをするときも、まじめに対応しなければなりません。また天資があり、賢く、勉強すべきいろいろなものをよく通じ、琴笛などの楽器も、上手に演奏することができ、その音色は澄んでおり、雲に響き渡れます。彼が多芸多才であるのは、本当に信じられないほどです。	実際に、弘徽殿女御は大皇子以外、二人の皇女を産みました。しかし、彼女たちの容貌の美しさは小皇子と比べられないです。そのほかの多くの女御と更衣は、この小皇子を回避して見ても、皆は彼が幼少なわりにこれほど優美で上品な気質を持つのは、本当に愛らしいものだと思い、それと同時に、彼を真面目に対応しなければならない遊び相手だと思います。詩文など表向き学問においては言うまでもなく、余暇の琴笛なども、手が思うに上手に奏で、その奏で出した琴笛の声は、雲まで響き渡り、素晴らしくて人の胸を打ちます。彼の才能を一々数えるのは、実に数えきれないほどで、本当のことではないようまで思わせてしまいそうです。彼はこのような才色兼備の人です。
47 高麗の相人は鴻臚館で右大弁の子として来た若宮を観て不思議がる「そのころ～」(1955／二〇⑥／三九)	そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さんことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。 「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の固めとなりて、天下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。	この時朝鮮は使臣を遣わして参観します。その中には優れている相人が一人います。皇帝はそれを聞き、この相人を召して小皇子の相を見てもらいたいと思いますが、宇多天皇が下した禁令では、外国人が宮廷に入ることが禁じられています。ですので、彼は密かに小皇子を外賓が招待される鴻臚館に行かせ、その相人に訪ねさせます。右大弁の官位についている臣下の一人は小皇子の保護者であり、皇帝は小皇子をこの右大弁の息子であるように装わせ、一緒に行かせます。相人はこの小皇子の相を見て大変驚きました。何回も首を傾けて、子細にその相を見て、不思議がってたまりません。その後言いました。「この若様の相から見れば、彼は一国の王になり、至尊の位に登るべきです。しかしそのようになれば、国家では変乱が起こり、己も憂患に遭う恐れがあります。もし朝廷の柱石になり、天下の政治を輔佐するのであれば、その相には合わないのです。」	その時ちょうど朝鮮からの使臣は参観に来ました。その中には高明な方士がおり、皇帝は彼を召して小皇子の相を見てもらいたいと思います。しかし、宇多天皇の時から禁令があり、外国人が宮廷に入ることが禁じられています。皇帝はやむを得ず小皇子を朝臣右大弁の息子として装わせます。この右大弁はもともと小皇子の保護者です。彼達と一緒に鴻臚館に行つてその方士を訪ねます。その方士は小皇子の相を見て、驚いてならなく、また度々首を傾けて、子細にその相を見ます。しばらくしてからやっと言いました。「この若様は君王の相があり、尊しい位に登るべきです。しかしそうなれば、国に変乱が起こり、災難がその身に及ぶことを恐れます。もし補佐の臣下となれば、またその相と大きくずれます。」と。	その時、高麗は使臣を遣わして訪ねました。皇帝は来訪する人の中に、高明な相人が一人いるのを聞き、彼を召して宮中に入らせたいと思います。しかし、宇多天皇は、「外国人を宮廷に入することを禁じます」との遺詔があります。ですので、密かに人を遣わして小皇子を連れて外賓を接待する鴻臚館に行かせます。また、小皇子を保護人である朝臣右大弁の息子に装わせます。相人は小皇子の容貌を観察し、大いに驚愕して、折々首を傾けて不思議がっています。彼は、「この若様の容貌から見れば、若様は一国の主たり、帝王至尊の位に昇る相を持っています。しかし、もし帝王の位に昇るとしたら、国家には不吉な紛争が起こり、若様自身も憂患に遭う恐れがあります。もし我慢して、朝廷の柱石となり、天下の政を輔佐すれば、この福のある相にはふさわしくないです。」と言っています。

48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと〜」(2019／二〇⑬／四〇)	弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交したることどもなん、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日帰り去りなんとするに、かくありがたき人に対面したる喜び、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物たまはず。おのづからことひろごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。	右大弁はもともと多芸多才の博士ですので、この相人と高談して、頗る興味を抱いています。二人は詩を吟じ、文章を作り、お互いに贈答します。相人はその日に別れを告げ、国に帰らなければなりません。彼は今回このような非凡な相を持つ人物に会えたことを大変うれしく思います。今は別れに際し、却って悲しくてたまりません。彼はこの気持ちを吟詠する多くの優美な詩文を作り、小皇子に贈りました。そのお返しとして、小皇子も大変愛らしい詩篇を吟じました。相人は小皇子の詩を読んで、激賞して種々の珍しい品物を贈りました。朝廷はこの相人に手厚いご褒美を上げました。このことは秘密にして公にしないですが、世間にはすでに噂が流れています。太子の母方のお祖父さんなどはこのことを聞き、皇帝が太子を立て直すつもりがあるのを大変恐れ、俄かに疑いねたんでいます。	右大弁も多芸多才な人ですので、その場でこの方士と高談して、二人は意気投合します。また吟詠して詩を作り、お互い贈答をします。この方士は即日別れを告げ帰国しますが、別れる前にこのような非凡な人に会えたことを喜んでいますが、間もなく別れると思うと、すこし悲しくてたまらなく、詩を作り、この気持ちを読み込めて贈ります。小皇子も詩を吟じて贈答をし、その詩は上品なものです。方士は小皇子の詩を読み、称賛すること極まりないです。また多くの貴重な物を贈ります。方士も朝廷から重いご褒美をいただきました。このことは秘められていますが、その後は世間に伝わりました。皇太子の母方のお祖父さんである右大臣はこのことを聞き、皇帝が皇太子を立て直すことを恐れ、俄かに疑念を抱くようになりました。	この右大弁も頗る才能のある頭のよい博士であり、この相人とお互い話を交わすのは、実に面白いことです。二人は詩を吟じ、文を作り、お互いに贈答します。相人は一、二日の間で別れを告げ帰国しますが、この際にこのような稀世で非凡な相を持つ人に会えたことを大変喜んでいますが、別れが目前にあると思いますと、心の中は却って別れ惜しんで悲しいです。彼は巧みにこの気持ちを詩に詠じて小皇子に送りました。小皇子も面白い歌を作って彼に返答しました。相人はこの歌を読んで、大変賞賛しましたので、極めて珍しい贈り物を呈上しました。朝廷も相人に多くの贈り物を賜りました。 このこと、皇帝のほうは外に漏れ聞きされないように努めました。が、世間には自然と噂で出てきました。皇太子の母方の御祖父さんなどの人は、不安になるのも当然なことであり、すぐ「これはいったいどのようなことでしょう。皇帝は心を変えるつもりですか?」と疑念を抱くようになりました。
49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき〜」(2075／二一⑤／四〇)	帝、かしこき御心に、倭相を仰せておぼしよりける筋なれば、今までのこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおぼして、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、我が御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなん、行く先も頼もしげなめることとおぼし定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。	皇帝の心は非常に賢明です。彼は日本の相術を信じており、この小皇子の相を見た時からはすでに成案がありますので、彼に親王の位を与えませんでした。今この朝鮮の相人の言葉は自分の見解と一致しているのを見て、この相人は実に優れていると思いながら、一方では「一生失意のままに過ごさせないためには、決して彼を後援としての外戚のいない無品親王として立てません。私がこの位に何年いられるのかは定かではありません。彼を臣下に降下させ、朝廷を補佐させたほうがいいのかも知れません。彼の将来を案じ、これも得策でしょう」と決心をしました。その後は彼にこの道に関する種々の学問を教えます。小皇子は学問を研鑽し、一層才気煥発になりました。	皇帝はとれほど聡明な人でしょう。彼は日本の相術を信じており、小皇子の相を見てから、心の中に成算を持っていますので、小皇子に親王の位を与えないでいるのです。今この朝鮮の方士の見方は自分と合致しており、その方士が高明で極まりないと思い、やがて決断をつけました。「彼を外部からの支援を持たない無品の親王に立て、不遇な運命を辿らせるより、臣下に降下させ、将来朝政を補佐させたほうがいいです。どれほどこの位に居られるのか、なお計れないですが、彼の将来のために多く打算したほうが、万全の策と言えるでしょう。」、と。そこで、彼に補佐の道を研鑽させます。小皇子はこの教えを得て、一層才気煥発になりましたので、	皇帝は心の中に早くから深い考えがあります。彼は嘗て日本の相人に小皇子の相を見せたことがあり、胸にすでに成算がありますので、今になっても小皇子に親王の位を与えません。皇帝はその高麗人が確かにすごいと思い、彼の話が自分の判断と合致しています。皇帝は密かに決意を付けました。「彼の将来が多難にならないように、小皇子に外戚を後ろ盾としていない無品の親王にさせないです。また、朕がどれほどこの位に居られるのも予測できないことです。小皇子を臣下になさせ、彼に如何に朝廷を補佐するかを教えたほうが将来的に妥当で有望です」、と。このように、皇帝は小皇子にこれに関するそれぞれの学問を勉強させます。小皇子は賢くて人より優れており、群を抜いていますので、
50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決断「際ことに〜」(2120／二一⑩／四一)	際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勤へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。	悔しくても已む無くこの人に臣下の位につかせるのは、実には大変惜しいことです。しかし親王として立てれば、必ず世間の疑いを招きますので、それは却ってよくないです。また、数秘術を精通している人にも占ってもらったが、同じ見解になりましたので、皇帝はこの小皇子を臣籍降下させ、源氏の姓を賜りました。	臣下の位に降りさせるのは、惜しいことのようにです。しかし、再び運命の筋合いに通じる方士に占ってもらい、その結果は同じく、親王の位に居ると必ず世人に疑われるとなっていますので、皇帝は小皇子を臣籍降下させ、源氏の苗字を賜りました。	彼を臣下に降りさせるのは確かに非常に惜しいことです。しかし、彼に親王の位を与えるのでしたら、目前の情勢から見れば、それはきつと世人の疑いと嫉妬を招きます。皇帝のこの心掛けは、勅旨を奉じて宮廷に入った占いに精通している者の言うこととお互い合致していますので、皇帝は小皇子を臣籍に降りさせることを決め、源氏の苗字を賜りました。
51 更衣が忘れられず世を疎ましく思う帝に、先帝の四の宮の噂が届く「年月にそへ〜」(2147／二一⑬／四一)	年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るをりなし。慰むやとさるべき人々(大島本「人々を」)参らせたまへど、なずらひにおぼさるだにいとかたき世かな、と疎ましうのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします。	時は流れの如くですが、皇帝は故桐壺更衣を思う心は、止むことがないです。憂いを晴らすために、時には有名な美人を召しますが、全部気に入らないです。桐壺更衣のような人は、この世には本当に得がたいと思います。それからは女性を疎遠にするようになり、少しも顧みる心がないです。ある日、皇帝に伺候する典侍は先帝の第四の皇女の話を持ち出しました。彼女は容貌が美しく、声望が高貴であり、	時が流れ、皇帝が桐壺更衣を思う心はすこしも止むことないです。時々頗る有名な美人を召して側に伺候させますが、それは気晴らしをするためだけです。況やこの人たちはどうして桐壺と比べることができのでしょうか。そこでますます桐壺の優れたところを感じ、世間に稀な存在だと思ひますので、気落ちして、美人を思う心がなくなりました。ある日、皇帝の側に伺候する典侍は、先帝の第四皇女の話を持ち出し、絶えずに彼女を褒めています。この皇女の容貌は美しく、人々に褒められていますが、	"時が流れ、皇帝は亡き桐壺更衣のことを依然として懐かしく思っています。時には遠近に名の聞こえる美人を召して、自分を慰めることができるかを試しましたが、一人も気に入る人がいません。皇帝は、「世の中から亡き更衣のような人を探し出すのは、容易なことではないですね!」と思います。それからは女性に近づけようとも思いません。

52 典侍は先帝の四の宮を亡き更衣に生き写しだと奏上し帝の気を引く「母后世になく〜」(2173／二二②／四一)	母后世になくしづききこえたまふを、上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとおおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねむころに聞こえさせたまひけり。	母后に寵愛される深さは、この世に例のないほどです。この典侍は先帝に伺候したことがあり、母后にも親しんでおり、時々宮廷を出入りし、この四皇女が大人になって来たのを見ています。今もよく微かにその容姿を窺います。この典侍は奏して言いました。「わたくしは宮廷に入って伺候することは、三代を経ましたが、未だ桐壺の妃様と似る人を見たことはありません。惟この四皇女が成長することにつれ、非常に桐壺の妃様と似ており、本当に傾城傾国の容貌だと思います。」皇帝はそれを聞き、「まさか本当にそのような人があるか」と思い、情けを留めるのも自然なことです。即ち謙遜な言葉と厚いご褒美を以て、四皇女が入内することを勧めます。	その母后も非常に彼女のことを寵愛しています。昔この典侍が先帝に伺候していた時は、その母后とすぐく親しかったので、宮殿の間を往来している中、この皇女が美人に成長したのを見てきました；今も偶に会うことがあります。典侍は皇帝に、「わたくしは宮廷に入り、三代の君主に伺候していますが、未だ桐壺の妃様と似る人を見たことはありません。惟この第四皇女は彼女に似ており、その容貌は傾城傾国です。」と奏上しました。皇帝はこれを聞き、「世間には本当にこのような偶然があるのだろう」と疑念を抱きますが、心が動かされますので、礼儀に沿い、先帝の第四皇女を入内させるように命じます。	母后に大事にされ、無限に寵愛されています、と。この典侍は嘗て先帝に伺候しており、その母后にも親しくて、よく彼女の殿舎を出入りしており、よく知っています。彼女は四の皇女が成長するのを見てきて、現在も偶に微かに四の皇女の姿を窺うことができます。彼女は皇帝に奏しました。「わたくしは宮廷に入り、今は三代を経ましたが、未だに誰か容貌が亡き桐壺更衣様と似る人を見たことはありません。しかし、後宮の四の皇女だけは、成長することにつれ、桐壺更衣様に酷似するようになりました。まるで稀世の傾国の色ですね」、と。皇帝はそれを聞き、心の中で、「本当にこれほど酷似する人がいるの？」と思っています。皇帝はこの皇女のことに心が動き、そこで厚い贈り物を用意して贈り、四の皇女の入内を懇請します。
53 帝を巡る女たちの怖さを言う四の宮の母が死ぬと、入内の道が開く「母后、「あな〜」(2233／二二⑧／四二)	母后、「あな恐ろしや、春宮女御のいとさがなくて、桐壺更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、おぼしつみて、さすががしうもおぼしたたざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。心細きさまにておはしますに、「ただ我が女御子たちの同じつらに思ひきこえん」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。	母后は思いました。「嗚呼、これは本当に恐ろしいことですね！弘徽殿女御の下心は陰険であり、桐壺更衣は明らかに彼女に苦しめられ死んだのです。前車の覆るは後車の戒めというように、これは本当に人を寒心させることです！」彼女は思い巡らし、煩っていますが、このことは到底うまく運ばなかったです。思わぬことに、その間母后は病気で亡くなり、四皇女は一人ぼっちの身になりました。皇帝は懇ろに人を遣わして見舞をし、彼女の家族に、「彼女を入内させてください。私は自分の子供のように彼女の世話をしますから」と言いました。	さて第四皇女の母后はこの勅旨を聞き、大変焦ってきて、「どうすればいいでしょう？弘徽殿女御は陰険で悪辣な人であり、亡き桐壺更衣は戒めとすべき前例であり、彼女のことは用心しなければなりません」と思っています。彼女は思いを巡らし、つい決断をつけることができなく、第四皇女を入内させませんでした。しかし、この母后は間もなく亡くなり、第四皇女は一人ぼっちになりました。皇帝は彼女のことを憐れみ、人を遣わしてその家族にお見舞いをし、「第四皇女を入内させてください。皇女と同様に扱いますから。」と言い聞かせます。	四の皇女の母后は密かに考えています。「ああ、本当に恐ろしいことですね！皇太子の母親弘徽殿女御は大変残酷無情な人であり、桐壺更衣は明らかに彼女に勝手に苦しめられ無残に死んだのです。この先例だけ見ても、不吉に感じてならなく、恐ろしくて鳥肌が立つぐらいです……」、と。母后は当然これを見ただけでしり込みしますが、娘を入内させることは、なかなか決心できません。それを躊躇っている間、母后は不幸にしてなくなり、四の皇女は取り残され、一人ぼっちになりました。皇帝は再度懇ろに伝言をしました。「彼女を入内させてください。朕は彼女を我が子として面倒を見てあげますから」、と。
54 不思議なほど更衣に似る四の宮は周りに押され入内し藤壺と称する「さぶらふ人々〜」(2264／二二⑩／四二)	さぶらふ人々、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさんよりは、内裏住みさせさせたまひて、御心も慰むべくなどおぼしなりて、参らせたとまつりたまへり。藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。	"四皇女の侍女たち、保護者とその兄である兵部卿の親王は皆思いました。「このように孤独に暮らすより、彼女を入内させたほうがいいです。気持ちも少し慰められるでしょう。」即ち四皇女を入内させました。彼女は藤壺の庭に住んでいますので、藤壺女御と呼ばれています。	それほどの主張を考慮して、貴婦人の母方の親戚と兄弟のヒョブ王子は決断を下すために集まった。彼らが至った結論は彼女の華麗さが枯渇するまで家にいるよう強いるよりも女の子を宮廷に送った方が望ましいということだった。だから彼女を皇居に送った。藤の別棟に落ち着いたことからフジツボと呼ばれていた。皇帝に話していたように、亡くなった女性にとても似ていたが、	彼女の名誉ある貴婦人たち、つまりその若い女性の利害を心配するべき人たちと彼女の兄である戦いの殿下は皆彼女が家に一人でいるよりは宮殿の中にいる方が遥かに良いということで合意して、そのため彼女がそこに行くべきだと主張した。「彼女の子はフジツボと呼ばれていた。本当に驚くほど端まであのもう一人の貴婦人に似ていたが、
55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしいに移る「これは人々〜」(2295／二三②／四三)	これは人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ざしあやくなりしぞかし。おぼし紛るとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こようおぼし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。	しかも身分は高貴であり、世の人に尊敬され、ほかの妃も彼女を非難することがないです。ですので、藤壺女御が入内して以来、何事も思うように行きます。故桐壺更衣は出身が低いゆえ、人に軽蔑されていましたが、寵愛は異常に深かったです。今皇帝が彼女に対する愛情は少しも減ることはないですが、それは自然に藤壺女御に移し、注いでいるのです。皇帝の気持ちは慰められ、嬉しいですが、これも世の常のことであり、深く感慨すべきです。	該当箇所ナシ	この藤壺女御の出身が高いためであろうか、また彼女は人気者であるのを加え、ほかの女御と更衣たちは彼女の悪口を言おうとしても言うところがなく、彼女は何事をしても思うように上手くでき、何も不如意なことはいません。亡き桐壺更衣は出身が低く、人に賤しめられますが、皇帝は格別に彼女を寵愛しています。藤壺女御が入内してから、皇帝は昔桐壺更衣に対する寵愛は、以前として衰えることはないですが、知らぬ間に、この寵愛は少しずつ藤壺女御に移しました。皇帝ご本人も無限に慰められ、これも人情の常ですね。
56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する「源氏の君は〜」(2327／二三⑤／四三)	源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、我人に劣らむとおぼいたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若ううつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。	源氏の公子は一刻も皇帝の左右を離れることはないですので、普段皇帝に伺候する妃たちも彼を回避することはありません。妃たちは誰しも自分の美貌が人より優れていると思いますが、彼女は確かなまめかしくてしとやかであり、それぞれ優れるところがあります。しかし、彼女たちはより年長であり、人柄も老練ですが、この藤壺女御だけ年が一番若く、容貌も一番美しく、源氏の公子に会うといつも恥らって回避します。ですが、公子は朝夕宮廷を出入りにしていますので、自然によくその姿を窺います。	苗字をもらった源氏の君は皇帝と最も親しいですので、皇帝の左右の妃たちは普段彼を回避することはないです。彼女たちは自分が風采あり、艶めかしいと思っていますが、年がやや上ですので、皆老練で従順です；藤壺女御がその中にいると、やや年下ですが、群を抜いて優れており、宮中で源氏の君に会う時はいつも恥ずかしくて回避します。源氏の君はよく宮中を出入りしており、自然に少しその容色を窺うことができます。	さて、源氏の君はいつも父帝の側にいて、少しも離れません。また、皇帝はよく彼をつれて女御と更衣たちの住むところに行きますので、妃たちは源氏の君に慣れて、それを常のこととして、回避しません。源氏の君も自然に彼女と会います。彼女たちは皆自分の美しさが他人に遜色しないと思っているでしょう。実際に、彼女たちは確かなよなよとして、可憐で人の心を動かすところがありますが、皆老成しています。この藤壺女御だけは若くて美しくて、とても恥ずかしくて、いつも恥ずかしそうに他人に見られないように身を隠しています。勿論源氏の君は彼女の姿を目にする機会があります。

57 三歳で母と死別した源氏の君は、母に生き写しだという藤壺を慕う「母御息所も〜」(2370／二三⑨／四三)	母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、つねに参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。	母桐壺更衣が亡くなった時、公子は僅か三歳でしたので、当然面影すら覚えていません。ただ、典侍の話によると、この藤壺女御の容貌は母親と酷似していることですので、幼い公子は彼女のことを深く思慕し、よくこの継母に親近しています。	源氏の君は三歳の時に母親桐壺更衣を亡くされましたので、今になっては母親の面影を覚えていないです。典侍から聞いた話では、藤壺女御は母親と似ているとのことですので、この若い君は彼女のことを恋い慕い、時々藤壺女御に近づきます。	源氏の君は親愛なる母親桐壺更衣の面影について少しも記憶を持っていないです。彼は典侍から、この藤壺女御の姿は非常に自分の生母に似ていると聞きますと、童心から自然に親しみを感じるようになり、よくこの継母に近づきます。
58 帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤源に源氏は好意を示す「上も、限りなき〜」(2396／二三⑩／四四)	上も、限りなき御息ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなん」など聞こえつけたまへれば幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。	皇帝はこの二人を限りなく寵愛しており、よく藤壺女御に言いました。「その子を疎遠にしないでください。彼はあなたのことを近づけて来たら、失礼だと思わないで、彼のことを可愛がって下さい。彼の母親の音容はあなたと非常に似ていますので、彼も自然にあなたと非常に似ています。お二人は親子としても、似合わないところはないです。」源氏の公子はこの話を聞き、童心のなかで大変嬉しく思い、春花秋月や、良辰美景に逢うと、いつも藤壺女御に近づき、彼女に思慕の情けを伝えます。	の二人は皆皇帝にとって大事な人ですので、皇帝はよく藤壺女御に、「この子があなたに近づいてくるのは、その母親はあなたと酷似しているからです。それを失礼だと思い、彼を冷たくしないで、彼のことを大いに可愛がって下さい。また、彼の母親の音容はあなたと非常に似ていますので、お二人は親子としても、相応しいです。」と言っています。幼い源氏の君はこれを聞き、大変誇らしく思うのも当然なことです。良辰や盛会のあるたびに、いつもこの女御を恋い慕い、一層彼女と親しいです。	藤壺女御は源氏の君と同じく、皇帝からの格別な寵愛を受けています。皇帝はいつも藤壺女御に言っています。「この子に冷たくしないでください。何故かわからなく、朕はいつもあなたの気性がこの子の母親桐壺更衣と似ているように感じます。彼があなたに近づきましたら、それを失礼なことだとせず、温かく可愛がってください。桐壺更衣の容貌と目つきなどはあなたと非常に似ており、自然に、この子も非常にあなたと似ています。彼をあなたと母子関係だと思っても、何も相応しくないことはないようです。」と。父帝のこの話は、源氏の君の童心もすこし悟ったところがあるようです。春に百花が盛んに咲く時や秋に紅葉が染め尽くした時になると、機会があるたびに彼はいつも藤壺女御に近づき、彼女に対する無限の恋慕を伝えます。
59 弘徽殿と藤壺が険悪な中、世の人は光る君とかかやく日の宮と賞讃「こよう〜」(2433／二四①／四四)	こよう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さもたち出でて、ものしとおぼしたり。世に類ひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへん方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとよりぢりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。	弘徽殿女御は藤壺女御と気が合わないですので、このことは彼女が源氏の公子に対する宿恨を呼びさまし、彼のことを目障りとしします。皇帝はよく藤壺女御の名声は天下に重く、この世に並びの無い美人だと見えています。源氏の公子の容貌は、彼女よりも輝かしくて艶めかしいですので、世の人は彼のことを「光華公子」と呼んでいます。藤壺女御は源氏の公子と一緒に皇帝の寵愛を蒙りますので、世の人は彼女のことを「昭陽の妃様」と呼んでいます。	思わぬことに弘徽殿女御は藤壺女御との仲が悪く、そのせいで、彼女が源氏の君に対する宿恨が引き起こされ、彼をも目障りとしします。藤壺女御はよく皇帝に称賛され、世に稀な美人と言われています。源氏の君については、その容貌はさらに光り輝き、藤壺に勝っていますので、「光華公子」と呼ばれています。藤壺女御も皇帝の寵愛を得ていますので、当時の人に「昭陽の妃様」と呼ばれています。	このことはまた弘徽殿女御が源氏の君に対する宿恨を呼びさしました。弘徽殿女御はもともと藤壺女御と仲が悪いですので、新旧の恨みが重なり、彼女は源氏の君のことを目障りとしします。皇帝は源氏の君は世の中に並べのない美男子だと思い、同じく名前の聞こえる藤壺女御と比べても、それと相当するほどです。源氏の君の優雅で上品な風姿は一層光り輝くように見えますので、世の人は源氏の君を「光君」と愛称を付け、艶めかしい藤壺女御は源氏の君と一緒に皇帝の寵愛を受けていますので、世の人は彼女のことを「耀日妃」と呼びます。
60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う「この君の〜」(2483／二四⑤／四四)	この君の御童姿、いと変へまうくおぼせど、十二にて御元服したまふ。居立ちおぼしいとなみて、限りあることに、事をそへさせたまふ。一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式。よそほしかりし御響きにおとさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることとぞ、とりわけ仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。	源氏の公子の童姿は艶めかしくて可愛らしいので、改装するのは惜しいことです。しかし、十二歳になったら、例によって冠礼を挙げ、成人の装束に変えなければなりません。この儀式を挙げるために、皇帝は朝夕気を遣い、自ら指揮します。例の制度以外、また種々の格式を添い、非常に盛大です。以前皇太子の冠礼は紫宸殿で開かれ、非常に盛大でしたが、今回の源氏の公子の冠礼も必ずそれに劣らないようにと求められています。彼方此方の饗宴は、いつも内蔵寮と穀倉院によって公のこととして取り扱われていますが、皇帝は彼等の行き届かないところがあるのを深く恐れ、必ず善美を尽くすようにと特別な命令を下しました。	源氏の君は十二歳になると、冠礼を行い、成人の服装を着ます。今回の儀式全般は、皇帝は自ら計画して処理します。その儀式は非常に盛大であり、決まったもの以外は新しい項目を設けます。皇帝の意思では、必ずそれを昔紫宸殿で行われた皇太子の冠礼よりも盛大な儀式に仕上げるとのことです。儀式の饗宴について、皇帝は至らぬところがあるのを恐れ、内蔵寮と穀倉院に特別な言いつけをし、それを公事として必ず善美を尽くすようにと指示しました。	源氏の君の童姿は特に美しく可愛いですが、今はその装束を変えるのは、実に惜しいことです。しかし、十二歳になると、例によって元服の儀式を挙げなければなりません。今回の儀式を挙げるために、皇帝はいろいろと心を尽くし、細かに世話をし、自ら指揮して、限度のある慣例以外、特別な手配を加えて、とても盛大な場面に仕上げました。この前、皇太子の元服の儀式は南殿で挙げられました。今回の源氏の君の元服の儀式も、それに遜色ないように努め、荘重で盛大な儀式に仕上げます。所々の饗宴などの事務は、元々は内蔵寮と穀倉院が一般の公の事務として処理しますが、皇帝は彼が至らぬところがあるのを心配し、特別な命令を下し、善美を尽くすようにと命じました。
61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる「おはします〜」(2537／二四⑩／四五)	おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引き入れの大臣の御座、御前にあり。申の時に源氏参りたまふ。みづら結ひたまへるつらつき、顔の勾ひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪をそくほど、心苦しげなるを、上は、御息所の見しかばとおぼし出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。	皇帝の常に住んでいる清涼殿の東の廂に、東向きで皇帝の玉座を設け、玉座の前に冠者である源氏と加冠をする大臣の座席を設けます。源氏の公子は申の刻に昇殿しました。彼の童の髪は総角にして、左右に別れ、耳のあたりに二つの髻に結び上げ、艶めかしくて可愛らしいです。今は彼を成人の装束に変えるのは、甚だ惜しいです！髪を切るのは、大蔵卿によって執行します。この美しい髪を短く切るのは、実に忍びないことです。この時皇帝はまた彼の母である桐壺更衣のことを思い出しました。彼は、もし更衣がこの光景を見ることができたら、何を思うでしょうと思います。少しの間で悲しみは胸に込み上げ、涙を流すほどでしたが、やっとのことでそれを隠し忍びました。	儀式は皇帝の一番気に入りの清涼殿の東の廂で行われ、東面は皇帝の玉座であり、その前は冠者と加冠をする大臣の座席になります。さて申の刻になると、源氏の君は昇殿しました。彼の総角に結い上げた髪の毛は、両側に別れ、二つの髻を耳のあたりに結び上げ、可愛らしいです。惜しいことでそれを成人の装束に変えるのは、本当に忍びないことです！髪を切る儀式を執行する大蔵卿も彼の美しい髪を見て、手を加えるのは実に忍びないです。この情景はまた皇帝が桐壺更衣に対する思いを引き起こします。彼は、「もし更衣がこの世にいたら、この情景を見ると、何を思うでしょう」と思うと、悲しみがこみ上げ、涙が落ちそうでしたが、やっとのことでそれを我慢しました。	皇帝の常に住む清涼殿の東の廂に、東向きで皇帝の玉座を設け、その御前に冠者である源氏の君と加冠をする大臣の座席を設けます。申の刻、源氏の君は昇殿しました。彼の両耳のあたりに結い上げている丸い髻という児童の髪型に引き立てられ、その容貌は艶めかしくて可愛いです。今はその美しい髪を切り、成人の髪型に変えるのは、実に惜しいです。大蔵卿は髪を切る役を担当しますが、この可愛らしい髪を切ろうとする時、彼はとても惜しがっているようでなかなか切れませんでした。皇帝はそれを目にして、思わず亡き桐壺更衣のことを思い浮かべ、もし彼女がこの情景を目にするなら、何を思うだろうと思いました。桐壺更衣のことに思いつくると、皇帝は悲しみが胸から湧き出てたまらないのですが、強いて熱い涙を飲み込みました。

62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量「かうぶり〜」(2580／二五①／四五)	かうぶりをしたまひて、御休み所にまかてたまひて、御衣奉りかへて、おりて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、おぼし紛るるをりもありつる昔のこと、とりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしくおぼさつるを、あさまじううつくしげさ添ひたまへり。	源氏の公子は加冠された後、休憩室に入り、成人の装束に変わり、再び昇殿し、皇帝に拝舞します。観る者はこの光景を見て、讃歎して涙を流さない人はいないです。皇帝はこれを見て、一層深く感動して耐えられません。昔の悲しみは、近頃忘れられる時もありますが、今は再び胸に込み上げました。今回の加冠に際して、彼が一番心配しているのは源氏の公子の天真爛漫の風姿は改装によって減色することです。意外にも、(源氏の公子が)改装した後は一層美しく可愛らしくなりました。	加冠してから、源氏の君は休憩所を着替えをし、昇殿して父帝に謁見します。皆はこれを見て、嘆いて止まないです。皇帝はさらにいろいろな感想を抱き、昔の忘れかけようとする悲しみは、また微かにこみあげます。源氏の君が改装した後、一層美しく可愛くなりました；この前改装することに対する心配も自然に消えました。	源氏の君は元服の儀式が終わった後に、休憩所に退出して、成人の装束に着替え、その後また階段に降りて、清涼殿の御庭で皇帝の御恩を感謝する舞を踊りました。人々はこの情景を目にしますと、皆感動して涙を流しました。況や皇帝はこの情景に触れて、胸の悲しみを抑えられないです。近頃しばらく忘れられる時もありますが、今桐壺更衣の在世の時の情景を思い出し、一層懐かしく、哀れな思いは猶潮のように湧きました。皇帝は源氏の君のような稚い子供は、成人の装束に変えた後は、以前より遜色してしまうことを心配していましたが、実際に、源氏の君が元服の儀式の後は一層雅やかで美しくなりました。
63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの〜」(2623／二五⑥／四六)	引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたまふ御娘、春宮よりも御気色あるを、おぼしわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内裏にも、御気色たまはらせたまへりければ、「さらば、このをりの後見なめるを、添い臥しにも」と、もよほさせたまひければ、さおぼしたり。	加冠は左大臣によって執行されました。この左大臣の夫人は皇女であり、彼女が産んだ娘はただ一人であり、葵姫と呼ばれています。皇太子はこの葵姫のことを恋い慕い、彼女を娶りたいですが、左大臣はそれを引き延ばし未だに返事をしないのは、早くからこの娘を源氏の公子に嫁ぎたいと思っているからです。彼は嘗てこのことを奏しました。皇帝は、「この子は加冠した後、固より外戚と後援者を欠けています。彼にはこのような考えがある以上、このままこれを叶えさせ、彼女を添い臥しにさせましょう」と思っています。ですので、左大臣に早く用意するようにと催促しました。左大臣もちょうど早くことを成し遂げたいと思うところです。	さて今回の儀式を執行した左大臣は、その夫人も皇族であり、二人の間には一人娘がいて、葵姫と呼ばれています。皇太子は彼女を娶りたいと思いますが、左大臣はわざとそれを引き伸ばし、却って皇帝に、この娘を源氏の君に嫁ぎたいと奏上しました。皇帝は、「この子はもとより高貴な人を後援としていないので、加冠した後左大臣はこのようなご厚意があれば、それを叶え、葵姫を添い臥しにさせるのはよいことだろう」と思っています。そこで、皇帝は左大臣に早く用意するように命じ、左大臣はこのことを早く実現させるようにと望んでいますので、喜んで承知しました。	加冠を担当した大臣は左大臣です。彼の夫人は皇女であり、二人には一人娘である葵姫がいて、可愛がること至らぬところがないほどです。皇太子はこの娘を恋い慕い、彼女を娶りたいですが、うまくできなかったのは、左大臣は早くから愛嬢を源氏の君と結婚させたいと思うからです。左大臣はこのつもりを皇帝に奏上して、皇帝の意思を伺いました。皇帝は、「そうすれば、もともとこの子は元服の儀式の後に外戚や後ろ盾が欠けていますので、この娘を添い臥しにさせましょう。」と考えています。皇帝はこのことを急かしていますが、左大臣も早く儀式を挙げるようにと願っています。
64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658／二五⑨／四六)	さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまあるほど、親王たちの御座の末に、源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、ものの憤ましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。御前より、内侍、宣旨承り伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿のもの、上の命婦取りてたまふ。白き大袈に御衣一領、例のことなり。	冠礼が終わり、皆人退出して、侍所に赴き、そちらで盛大な饗宴を開きます。源氏の公子は諸親王に次ぐ末席に着席しました。左大臣は宴席で微かに葵姫のことについて言及しました。公子はまだ幼くて、恥らっており、黙って返事もしませんでした。間もなく内侍は詔旨を読み上げ、左大臣を参上させます。左大臣は内に入り、参観します。御前の諸命婦は加冠のご褒美を左大臣に賜ります。例によって白い大袈一着、衣裳一式になります。	儀式の後、皆は退出して、侍所の宴会に赴きます。この時侍所の中には盛大な宴会が開かれました。源氏の君は親王席の末席に座り、その場で左大臣は葵姫のことを少し打ち明けましたが、源氏の君は稀くて恥ずかしくて、俯いて答えませんでした。その後内侍は皇帝が召すのを伝え、左大臣は急いで中に入りました。皇帝は左大臣に白い大袈一着、衣裳一式、	源氏の君は休憩所に退出しました。間もなく、人々は饗宴の美味しいお酒と御肴を楽しんでいる時、源氏の君も親王たちが着席した末席に腰かけました。左大臣は密かに娘葵姫のことを微かに彼に打ち明けましたが、源氏の君は恥ずかしがりの年ですので、どのように応対すればいいのかわかりません。 皇帝は内侍を遣わして左大臣を御前に召しました。左大臣は御前に着くと、皇帝は彼が元服の儀式を挙げる疲れを慰労するために、多くの贈り物を賜り、御前に伺候している左近の命婦によって渡しました。合計は例による白い大袈一着、衣裳一式あります。
65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703／二五⑩／四七)	御盃のついでに、 いとときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや 御心ばへありて驚かせたまふ。 結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。	また酒一杯を賜り、其時皇帝は吟じます。 「童の髪は今汝の手によって束ねられたが、 合歡の二つの帯は結び上げているか」 この詩は結縁のことを暗示しています。左大臣は非常に喜び、早速詩を和して奉ります。 「朱の糸はすでに同心の結びを結いあげたが、 惟深い紅色の永久に消えないことを願う」 彼は階段を降り、庭の中まで歩いて来て、拝舞して返礼をします。	また酒一杯を賜るのは皆宮中の例であり、側にいる諸命婦によってそれを呈上しました。また詩を吟じました。 「君の手により、童の髪を束ねた。 いずくんぞ知らんや合歡を結うことができるか」 詩の中に込めた結縁の暗示は、左大臣は勿論それを知っていますので、大変喜んで詩を和しました。 「合歡はすでに朱の糸によって繋がられ、 惟紫紅の色の永遠に衰えないことを願う」 それを吟じ終わり、階段から降りて、お庭で御恩に感謝して跪いて拝みました。	また特別にお酒一杯を賜り、その時、皇帝は歌を吟じました： 少年は成人して功業を成す、 因縁の同心は結んだのか。 その歌は皇帝の気持ちを込めており、左大臣はそれを悟り、返答して吟じました。 因縁の情けの糸はきつく結び合い、 紫色は誠の願いを長く存する 左大臣は廊下の階段からお庭まで歩き、舞を踊って御恩を感謝します。
66 左大臣や親王たちは祿を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛大「左馬寮の〜」(2730／二六④／四七)	左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据えてたまはりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部連ねて、祿ども品々にたまはりたまふ。 その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なん承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃などもど所狭きまで、春宮の御元服のをりにも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなん。	皇帝はまた左大臣に左馬寮の馬一匹、蔵人所の鷹一頭を賜ります。そのほかの公卿たちも階段に列を並べ、その身分に応じてご褒美をいただきます。この日冠者によって献ずる御肴と御菓子は、箱に入れられたり、籠に入れられたりしていますが、右大弁が命令を受けそれを調理することになります。そのほか皆に賜る屯食および諸官員に賜る古式の御櫃に入れられているご褒美は前に陳列しており、道を塞がるほどであり、皇太子の加冠の時よりも豊かです。この儀式は本当に盛大極まりないです。	皇帝はまた左馬寮の馬一匹、蔵人所の鷹一頭を賜ります。公卿士族たちも階段の前に列を並べ、それぞれご褒美をいただきます。源氏の君が皆に呈上する食物と贈り物は、右大弁によって用意され、それぞれ箱と籠に入れてあります。そのほか、下層官僚に賜る屯食および宮廷の官員に賜るお褒美は、御櫃にいっぱい入れてあり、ところどころあります。儀式の盛大さは、皇太子の時より勝っています。	皇帝はまた左大臣に左馬寮の馬一匹、蔵人所の鷹一頭を賜ります。親王と公卿たちは階段の前に並び、各自の身分に応じてご褒美をいただきます。この日に冠者が御前に呈上した食べ物、お箱に入れているお菓子と御肴があり、またお籠に入れているお菓子等々があります。これらの食べ物、宮廷の助手右大弁が命令を受けて調理したものです。そのほか、皆に賜った小豆餅米御握りおよび諸官員に賜った唐式の古色蒼然の箱に入れている贈り物は、素晴らしいものがたくさんあり、廊下に並べきれないぐらいです。皇太子が元服の儀式を挙げた時に陳列したものより物の数は豊富です。儀式の場面も大変荘重で盛大です。

67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768／二六⑧／四七)	その夜、大臣の御里に、源氏の君までさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり。いとぎきはにておはしたるを、ゆゆしううつくしと思ひきこえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしとおぼいたり。	その夜源氏の公子は左大臣邸に招親に行きます。結婚式の盛大さは、この世に並べがないぐらいです。左大臣はこの花婿が確かに小柄で美しくて可愛らしいと見ています。葵姫は自分が花婿よりやや年上であり、すこし不似合いだと思うようで、心の中で恥らっています。	その夜、源氏の君は左大臣の邸に行きました。その後結婚式を行い、場面の盛大さはまた世に稀なものです。花婿は身柄が小さくて風采があり、可愛らしいのを見て、左大臣が喜ぶのも当然なことです。ただ葵姫は自分がやや年上であるため、不似合いだと思いますので、すこし気まずいです。	その夜、源氏の君は即ち左大臣の邸に行って婚儀に参加します。結婚式は異常に盛大で、世を挙げても稀なものです。左大臣はこの婿が若くて美しく、非常に可愛らしいとみています。葵姫は花婿よりやや年上であり、夫が特に若いですので、自分から相応しくないと思い、少し恥ずかしいです。
68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」(2800／二六⑩／四八)	この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏の一つ后腹になんおはしければ、いつ方につけてもいと華やかなるに、この君さへかくおはしそひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき、右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり。	この左大臣は皇帝に信用されている人であり、しかもその夫人は皇帝の同胞の妹であるので、どちらにおいても高貴で比べるものがないほどです。今は源氏の公子を婿として迎え、その勢いはますます盛んです。	左大臣はもともと皇帝に信頼され、その夫人は皇帝の同胞の妹であるため、自然に所々人より優れています。また源氏の君を花婿として迎えたので、その声名は以前より一層高くなりました。今の皇太子の母方のお祖父さんである右大臣は、朝廷の重臣であり、将来朝政を握ることができると雖も、現在は左大臣とは比べものにはなれないです。	この左大臣は皇帝に重視され、それに加え夫人は皇帝の同胞の妹であり、どの面から見ても、その身分は高くて輝かしいものです。今はこのように源氏の君を婿として迎えたので、右大臣は皇太子の母方のお祖父さんとして将来朝政を一人占めできる可能性はありますが、この左大臣の勢いとは比べるものにならないです。そこで、右大臣は少しがっかりしてならないです。
69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」(2833／二七①／四八)	御子どもあまた、腹々にものしたまふ。宮の御腹は蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。	左大臣は多くの妾を持ち、子どもたくさんいます。正室が産んだのはもう一人息子があり、現在は蔵人少将の職に就いています。容貌は非常に美しく、若い俊才です。右大臣は左大臣との仲が睦まじくないですが、この蔵人少将のことが気に入り、つい自分の最愛の第四の娘さんを彼に嫁ぎました。右大臣が蔵人少将を重視するのは、左大臣が源氏の公子を重視するのに劣らないほどです。これは本当に世に稀ですが似ている二対の舅と婿です！	左大臣は多くの妻妾を持ち、子女もたくさんいます。現在蔵人少将の職に就いているのは正室が産んだ君であり、その美しさは源氏の君と比べ合わせるほどです。右大臣はこの蔵人少将のことを大変気に入り、その父との仲が悪いですが、自分の一番寵愛している四の君を彼に嫁ぎました。彼を愛する気持ちは、左大臣に劣れないほどです。この二対の舅と婿は、本当に珍しいです。	さて、左大臣は多くの妻妾を持ち、子女もたくさんいます。最初の妻が産んだのはまた一人の君がいて、現在は蔵人少将であり、才能と容貌はすぐれていますので、左大臣と仲の悪い右大臣にしても、この蔵人少将のことが気に入り、自分の可愛がっている第四の娘を彼に嫁ぎました。右大臣が蔵人少将を大事にすることは、左大臣が源氏の君を可愛がるのに遜色しないほどです。この両家はいつでも姻戚の睦まじい関係を保つことを願います。
70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863／二七④／四九)	源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類ひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿君、いとをかしげにかしづかれた人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。	源氏の公子はよく皇帝に召され、その左右を離れないですので、妻の家に行く暇もないです。彼の心の中は一途に藤壺女御の美貌はこの世に比べるものがないと思っています。彼は、「このような人と結婚できたらいいですね。本当に世にも稀な美人ですね」と思っています。葵姫は左大臣の目に入れても痛くない娘であり、艶かく可愛らしいですが、源氏の公子となかなか気が合わないです。少年の心は一途ですので、源氏の公子のこの秘密の恋は本当に苦しくて言うのに耐えないです。	皇帝に時々召されますので、源氏の君はよく宮中に住んでおり、あまり葵姫のところに行かないです。藤壺女御の美貌を思い出すと、「このような美人と一緒になれば、きっといいことでしょう」と、あれこれとくだらないことを思い廻らすのも免れないです。葵姫は高貴な令嬢で左大臣の目に入れても痛くない娘であり、艶かく可愛らしいですが、源氏の公子となかなか気が合わないです。源氏の君が藤壺女御に対する秘密な恋慕は、彼を苦しめてたまらないです。	源氏の君はよく皇帝に召され、皇帝の傍らに付き添いますので、気楽に左大臣の邸でよく妻と一緒にいることができません。実際に、源氏の君は早くから藤壺女御の容貌だけこの世に並べもののないほど美しいと思っています。彼は「そのような美人こそ私の結婚したい人です。彼女の美しさは本当に比べられる人はいないほどです」と密かに思っています。左大臣の令嬢葵姫は本当に可愛く、両親にも大事にされていますが、なぜかわからなく、源氏の君はいつも彼女と気があわないです。この少年は一途に藤壺女御のことを深く恋い慕い、この片思いは彼を苦しめて辛くてたまらないです。
71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」(2912／二七⑨／四九)	大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴、笛の音に聞こえ通ひ、ほのかなる御声を慰めて、内裏住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は、幼き御ほどに、罪なくおぼしなして、いとなみかしづきこえたまふ。御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、選（え）り整えすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほなおぼしいたつく。	加冠成人の後は、子供の時のように御簾に入ることができません。ただ宴楽の時、御簾を隔て、笛を吹き、御簾の内の琴の音と和することを以って、愛慕の気持ちを伝えます。時には微かに御簾のうちに藤壺女御の嬌音が聞こえるのも、聊か慰められるような気がします。このことで源氏の公子は一途に宮中に泊まるのが好きです。大体宮中に五六日泊まっては、左大臣邸に二三日泊まります。途切れ途切れで、つかず離れずしています。左大臣は彼の年が若いので、わがままであるのも当然のことであると見て、彼を見咎めることなく、真心を以って彼を可愛がっています。源氏の公子と葵姫の側近の侍女たちは、世に稀な美人を選んでそれに充てます。また、よく源氏の公子の好きな遊芸を開き、万策尽くして彼の歡心を買います。	今は加冠して成人となりましたので、気ままに宮廷を出入りして、子供の遊びをすることができなくなりました。ただ皆が奏楽するのを機として、笛を以て御簾の内の琴の音を誘い、それと呼応することでお互い恋慕の情けを伝えます。偶には御簾の内の微かな嬌音が聞こえるのも、苦しい恋心も少し慰められます。そこで長く宮中に住むようになり、五六日してからやっと左大臣邸に二三日住み、このように葵姫につかず離れずしています。左大臣はそれを見咎めることなく、彼がまだ若くて我儘であるのも当然だと思い、相変わらず彼を大事にしています。源氏と葵姫の側近の侍女は、皆選ばれた絶世の美人であり、彼女たちはいつも可愛い悪戯をして、源氏の君を喜ばせます。	成人を意味する元服の儀式の後、皇帝は以前のように彼を子供とみて御簾に入れてくれないです。源氏の君は毎回管弦遊楽の会を上げるのを機会として、琴笛の音に合わせてその恋慕の気持ちを伝えます。あるいは微かに御簾の内から聞こえる藤壺女御の声を聊かの慰めとします。彼は宮中で暮らしたいとだけ思っていますので、五六日は宮中に住み、御前に伺候しては左大臣の邸に戻り二三日住み、このように途切れ途切れで二つの所を往復しています。左大臣のほうは彼がまだ年少であるのを考え、彼のことを咎めることなく、大事に扱っています。左大臣は婿のためにも、娘葵姫のためにも、心を込めて普通でない美人の女官を選んで彼らに伺候させます。また時々源氏の君が好きな遊楽活動を挙げ、できるだけ気を遣い、彼の面倒を至らぬところなく見て上げ、彼を喜ばせるように努めます。

72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976／二七⑩／五〇)	内裏には、元の淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。元の木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしようおぼしわたる。光る君といふ名は、高麗人のめできえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたるとなむ。	宮中では、以前桐壺更衣が住んでいる淑景舎（即ち桐壺の庭）を源氏の公子の住居とします。以前桐壺更衣に伺候していた侍女たちも宮廷から退出させずに、源氏の公子に伺候させます。そのほか、桐壺更衣の実家の邸も、修理職と内匠寮が命令を受け、大いに改造しています。此処にはもともと林と築山があり、風景が優れています。今は池を広げ、土木工事を盛んに行い、綺麗に装います。此処は即ち源氏の公子の二条の私邸になります。源氏の公子は、「この所は、私と愛しいその人と一緒に住んだらいいですね」と思っています。世間の言い伝えでは、「光華公子」という名は、その朝鮮の相人が源氏の公子の美貌を称えるために付けたそうです。	桐壺更衣がすんでいた桐壺院は、今は源氏の君の宮中での住所となりました。侍女たちも退出することなく、転じて源氏の君を伺候するようになりました。修理職と内匠寮が命令を受け、更衣の実家の邸を改造し、土木工事を盛んに行い、元の木々と築山に呼応させるように、池を広げました。その風景は俄かに静かで趣があるようになり、実に違うものとなりました。源氏の君はここを以て二条院の私邸とします。彼はいつも、「愛おしい人と一緒にここに住むことができれば、どれほどいいことでしょう」と思っています。そう思うと気が落ちるのも免れないです。世の中の噂では、「光華公子」は朝鮮の方士が源氏の君の容姿に対する過分な賛美にすぎないそうです。	宮中は手配して、以前桐壺更衣が住んでいた淑景舎を源氏の君の住居とし、また以前源氏の君の生母桐壺更衣に伺候していた女官たちをそのまま留めて、現在は源氏の君に伺候させます。皇帝はまた勅旨を下し、修理職と内匠寮に亡き桐壺更衣の実家の邸宅を限りなく立派な建物に改築することを命じます。以前お庭に植えている樹木や、築山の配置など、一層風情のあるように改築し、またもともとあるお池を掘り、それを広め、土木工事を盛んに行い、此処を華やかな邸宅に改築します。源氏の君は心の中に、「このような邸宅の中に、自分の恋慕しているその方と一緒に暮らすことができれば、どれほどいいことでしょう！」と思っています。彼は思いに耽り、嘆いて已まないです。世の伝えでは、「光君」という名前は、高麗の相人が源氏の君の美しさを褒め称えるために付けたのです。
---	---	---	---	--

執筆者一覧（敬称略・掲載順）

伊藤 鉄也

（国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授）

朱 秋而

（國立台灣大学日本語文學系所・教授）

庄 捷淳

（立命館大学 大学院博士後期課程）

趙 俊槐

（天津科技大学外国語学院日本語科 教員）

緑川 眞知子

（早稲田大学 非常勤講師）

雨野 弥生

（株式会社三省堂 辞書出版部・古語辞典編集者）

浅川 槿子

（国文学研究資料館・研究員）

◆ 編集後記

『海外平安文学研究ジャーナル』第5号をお届けします。

前号と同じく、ご多忙の中、原稿をお寄せくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。また、全体として、発行のスケジュールが遅くなってしまったことをお詫び申し上げます。

第6号も、さまざまな言語に翻訳された平安文学作品や、海外における平安文学の研究事情など幅広い視点の原稿をお待ちしております。

本科研も最終年度となり、前年度より原稿の締め切り日時が早まりますが、よろしくお願い致します。

(浅川楨子)

今号は、「夕顔」より扇に花を乗せて手渡す有名な場面を抜き取って表紙および中表紙としました。和歌の書かれた扇と花を間に平安時代の男女が相向かい合った、まさしく絵になる構図です。ただ、この二人は「夕顔」巻の主人公たる光源氏と夕顔ではなく、彼らに仕える藤原惟光と右近です。現代なら、単行本の表紙などとして主人公たちが華やかに据え置かれるところでしょう。平安時代と現代の感覚の差が、こんなところにもあるような印象を受け、不思議な気持ちで製作しました。

「源氏物語屏風」を素材として製作したジャーナル表紙のシリーズも次号で最終となります。科研の最後を飾るに相応しいものになるよう鋭意努力したいと考えています。よろしくお願い致します。

(加々良恵子)

研究組織

研究代表者

伊藤 鉄也（国文学研究資料館／総合研究大学院大学・教授）

研究分担者

野本 忠司（国文学研究資料館／総合研究大学院大学・准教授）

連携研究者

マイケル, ワトソン（明治学院大学・教授）

清水 婦久子（帝塚山大学・教授）

荒木 浩（国際日本文化研究センター・教授）

ラリー, ウォーカー（京都府立大学・准教授）

藤井 由紀子（清泉女子大学・准教授）

高田 智和（国立国語研究所・准教授）

研究協力者

高木 香世子（マドリード・アウトノマ大学・准教授）

緑川 真知子（早稲田大学・講師）

土田 久美子（東京工業大学・講師）

須藤 圭（立命館大学・助教）

川内 有子（立命館大学・大学院生）

テレサ, マルティネス（立命館大学衣笠総合研究機構・客員研究員）

庄 捷淳（立命館大学・大学院生）

畠山大二郎（愛知文教大学・専任講師）

村上明香（インド・アラハバード大学・大学院生）

浅川 槇子（国文学研究資料館・研究員）

加々良 恵子（国文学研究資料館・補佐員）

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書

「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

海外平安文学研究ジャーナル 5.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.5.0

2016 年 09 月 21 日 発行

〈非売品〉

発行所 人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒 190-0014 東京都立川市緑町 10-3

電話 050-5533-2900

<http://www.nijl.ac.jp/>

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

(「海外平安文学研究ジャーナル」 <http://genjiito.org/journals/>)

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは
法律で認められた場合を除き禁じられています。